石見銀山

Iwami-Ginzan Silver Mine Site

石見銀山遺跡発掘調査概要25

●

－昆布山谷地区・宗岡家地点・金森家地点－

2017年3月

島根県大田市教育委員会

巻頭図版１

昆布山谷地区第６地点ＳＸ 25 全景 (南東より)

巻頭図版２

昆布山谷地区第８地点ＳＷ 06 全景 (北より)

石見銀山

Iwami-Ginzan Silver Mine Site

石見銀山遺跡発掘調査概要25

●

－昆布山谷地区・宗岡家地点・金森家地点－

2017年3月

島根県大田市教育委員会

序

石見銀山遺跡は 16 世紀から 20 世紀にかけて採掘から精錬までが行われた銀鉱山跡を中心として、周囲の山城跡や銀山から港までを結ぶ街道、銀の積み出しや諸物資を搬入した港湾などから構成される複合遺跡です。

遺跡の発掘調査は 32 年目となり、今年度は銀鉱山跡の昆布山谷地区と重要伝統的建造物群保存地区内の宗岡家地点、金森家地点の発掘調査を実施しました。併せて、遺跡地内における小規模な掘削を伴う現状変更行為に対応し、立会調査を随時実施したところです。

昆布山谷地区の発掘調査は 7 年目となり、これまでの調査では昆布山谷の谷筋に広がる平坦面の調査を実施し、昆布山谷における居住の様相が明らかとなっています。本年度からは平坦面の調査は継続しつつ、新たに道沿いの調査に着手したところです。

宗岡家地点においては、宗岡家住宅保存修理事業に先立ち平成 26 年度から発掘調査を実施しており、本年度は主屋部分の調査により、カマドや水回り施設などの痕跡や、宗岡家創建前の建物に関連する礎石や石列を確認したところです。金森家地点では、本年度より調査に着手し、主屋基礎の配置について確認することができました。

また、特に面的な発掘調査を行った昆布山谷地区と宗岡家地点においては、現地説明会を開催し、調査成果の公開・説明を行ない普及をはかったところです。

終わりになりますが、発掘調査の実施にあたっては、土地所有者、調査指導者、地元関係者、調査作業員の皆さんのご理解と多大なご協力を賜わり、感謝を申し上げます。

平成 29 年 3 月

島根県大田市教育委員会

教育長 **大 國 晴 雄**

例　言

1．本書は、島根県大田市大森町に所在する史跡石見銀山遺跡の発掘調査概要である。

2．調査は国庫補助事業として大田市教育委員会が事業主体となって実施した。

3．本書は、平成28年度の昆布山谷地区、宗岡家地点、金森家地点及び、伝統的建造物群保存地区で実施した調査の概要をまとめたものである。

4．調査体制は下記のとおりである。

〔石見銀山遺跡調査整備活用委員会〕

勝部　昭(元島根県教育委員会教育次長)　　黒田乃生(筑波大学大学院教授)

高安克己(島根大学名誉教授)　　田邉征夫((公財)大阪府文化財センター理事長)

田中哲雄(元東北芸術工科大学芸術学部教授)　　中塩　弘(ＤＯＷＡホールディングス㈱取締役)

仲野義文(石見銀山資料館館長)　　中村俊郎(中村ブレイス㈱代表取締役社長)

村田信夫(大田市伝統的建造物群保存地区保存審議会委員)

和上豊子(石見銀山ガイドの会前会長)

〔石見銀山遺跡調査専門委員会〕

井上雅仁(島根県立三瓶自然館学芸課課長代理)　　大橋泰夫(島根大学法文学部教授)

勝部　昭(元島根県教育委員会教育次長)　　黒田乃生(筑波大学大学院准教授)

田邉征夫((公財)大阪府文化財センター理事長)　　中西哲也(九州大学総合研究博物館准教授)

仲野義文(石見銀山資料館館長)　　原田洋一郎(東京都立産業技術高等専門学校教授)

村上　隆(京都美術工芸大学教授)

〔事 務 局〕　大田市教育委員会石見銀山課

〔調 査 員〕　山手貴生・新川　隆・尾村　勝(大田市教育委員会石見銀山課)

〔遺物整理〕　高村玲子・井上伸子・浅野美貴

〔調査指導〕　文化庁記念物課、独立行政法人奈良文化財研究所、島根県教育委員会

5．挿図の縮尺は、図中に示した。

6．挿図中の座標は、昆布山谷地区は世界測地系を、宗岡家住宅は旧日本測地系の座標を使用した。またレベル高は標高を示す。

7．Fig.１・Fig.２は国土交通省国土地理院発行の地形図を縮小編集し、一部加筆して使用した。

8．本文中に使用した略号は下記のとおりである。

ＳＢ－住居跡　ＳＤ－溝跡　ＳＦ－道跡　ＳＫ－土坑　ＳＰ－柱穴　ＳＷ－石垣、石積み　ＳＸ－炉跡、特殊遺構　ＳＥ－水溜遺構

9．挿図中のマンセル表記及び土色は農林水産省技術会議事務局監修の『新版標準土色帖』によった。

10. 発掘調査に当たっては大橋泰夫氏より、現地指導を賜った。

11. 昆布山谷地区第５地点の土層の剥ぎ取りは、島根県古代出雲歴史博物館学芸員の澤田正明氏の立会いの下で実施した。

12. 本書の執筆は第５章を新川が、それ以外を山手が行なった。本文中の挿図は遺構図については尾村が、遺物実測図については新川が中心になって作成した。写真については、遺構写真は各担当者が、遺物写真については山手が撮影した。編集は筆者協議の上、新川が行った。

13. 出土資料及び実測図・写真などは大田市教育委員会で保管している。

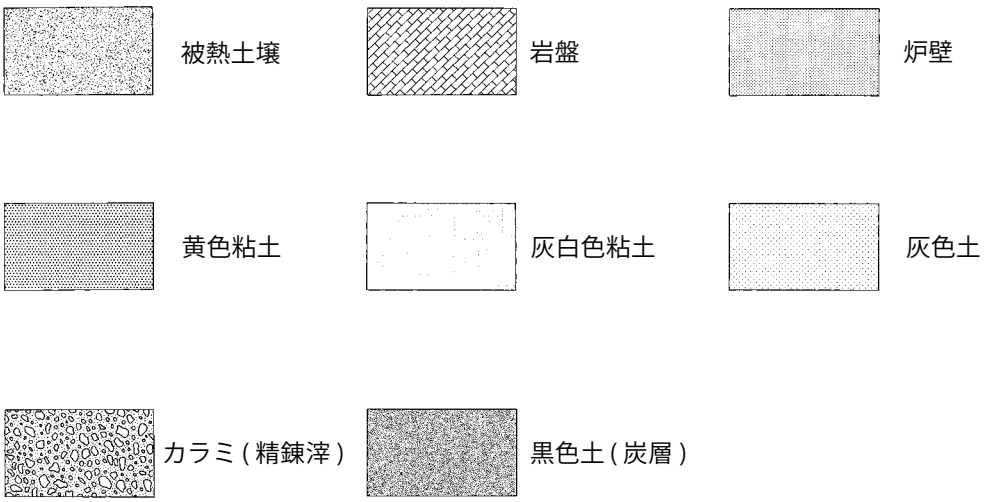
凡　例

1．図版の表現

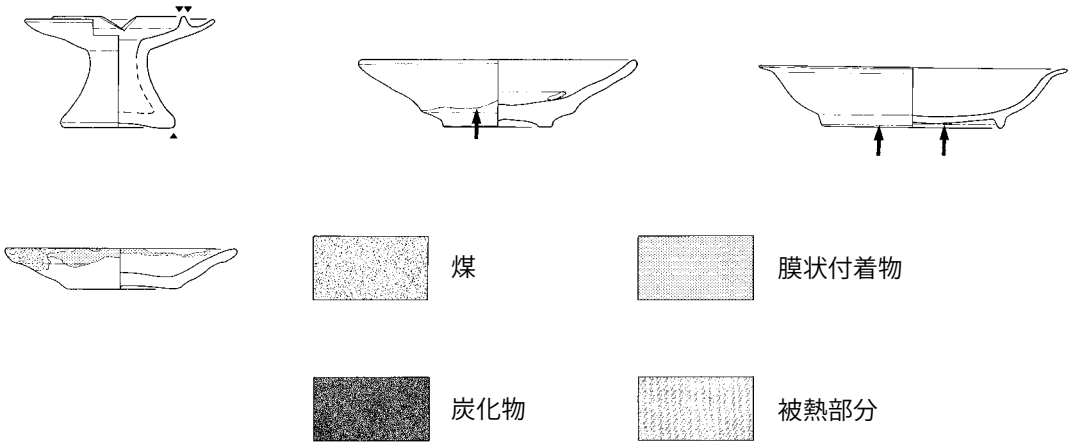
遺構・遺物図版中における表記は下記による。

これ以外のものについては個別に図中に示した。

〔遺 構〕



〔遺 物〕



図中の▼印あるいは一点鎖線(図中↑箇所)は施釉範囲の境界を示す。

2．本文中の語句

以下の語句については、カタカナ表記に統一し、その意味を定義しておく。

ズ　　リ・・・選鉱過程にて除去される化学的変化に起因しない目的外鉱物をいう

ユリカス・・・比重選鉱により除去された砂粒

カ ラ ミ・・・広義の製錬工程にて排出された鉱滓

本文目次

第１章　遺跡の位置と概要

第１節　遺跡の位置と概要 …… 1

第２節　平成28(2016)年度の調査 …… 2

第２章　昆布山谷地区の調査

第１節　調査地の周辺環境 …… 5

第２節　調査の概要 …… 5

第３節　第５地点 …… 10

第４節　第６地点 …… 14

第５節　第８地点 …… 20

第６節　小結 …… 26

第３章　宗岡家地点の調査

第１節　調査の概要 …… 27

第２節　調査の成果 …… 31

第３節　小結 …… 36

第４章　金森家地点の調査

第１節　調査の概要 …… 42

第２節　調査の成果 …… 42

第３節　小結 …… 46

第５章　本年度の試掘・立会調査

第１節　平成28年度の調査地点 …… 47

第２節　峰山家(旧田中家)地点の調査 …… 47

第３節　旧川上家地点の調査 …… 52

第６章　総括

第１節　昆布山谷地区 …… 56

第２節　宗岡家地点 …… 58

第３節　金森家地点 …… 58

第４節　まとめ …… 58

挿図目次

Fig. 1　石見銀山遺跡位置図(S＝1／100,000) …… 1
Fig. 2　石見銀山遺跡調査地点位置図(S＝1／25,000) …… 4
Fig. 3　昆布山谷地区調査地点位置図(S＝1／1,500) …… 6
Fig. 4　昆布山谷地区第5地点検出遺構配置図(S＝1／60) …… 7
Fig. 5　昆布山谷地区第5地点土層断面図(S＝1／40) …… 8
Fig. 6　昆布山谷地区第5地点出土遺物実測図Ⅰ(S＝1／3) …… 11
Fig. 7　昆布山谷地区第5地点出土遺物実測図Ⅱ(S＝1／1、1／2、1／4) …… 13
Fig. 8　昆布山谷地区第6地点・第8地点地形測量図(S＝1／130) …… 15
Fig. 9　昆布山谷地区第6地点検出遺構平面図・立面図(S＝1／80) …… 17
Fig.10　昆布山谷地区第6地点検出遺構立面図(S＝1／60) …… 18
Fig.11　昆布山谷地区第6地点検出遺構断面図(S＝1／80) …… 18
Fig.12　昆布山谷地区第6地点トレンチ平面図・断面図(S＝1／40) …… 19
Fig.13　昆布山谷地区第6地点出土遺物実測図 (S＝1／3、1／4、1／6) …… 21
Fig.14　昆布山谷地区第8地点岩盤平面図・断面図(S＝1／80) …… 22
Fig.15　昆布山谷地区第8地点トレンチ平面図・土層断面図(S＝1／70) …… 23
Fig.16　昆布山谷地区第8地点SW06平面・立面図(S＝1／40) …… 24
Fig.17　昆布山谷地区第8地点出土木舞平面・立面・土層断面図(S＝1／20) …… 25
Fig.18　昆布山谷地区第8地点出土遺物実測図(S＝1／3) …… 26
Fig.19　大森銀山伝建地区内調査・試掘・立会地点(S＝1／10,000) …… 28
Fig.20　宗岡家地点調査区配置図(S＝1／1,000) …… 29
Fig.21　宗岡家地点遺構配置図(S＝1／120) …… 30
Fig.22　宗岡家地点Ⅵ・Ⅶ区遺構配置図(S＝1／80) …… 32
Fig.23　宗岡家地点Ⅵ・Ⅶ区トレンチ土層断面図(S＝1／80) …… 33
Fig.24　宗岡家地点Ⅵ区礎石断面図(S＝1／80) …… 34
Fig.25　宗岡家地点Ⅶ区東半実測図(S＝1／40) …… 35
Fig.26　宗岡家地点Ⅶ区SX06平面・断面図(S＝1／20) …… 36
Fig.27　宗岡家地点北側SD04平面・立面・土層断面図(S＝1／80) …… 37
Fig.28　宗岡家地点浄化槽トレンチ土層断面図(S＝1／40) …… 38
Fig.29　宗岡家地点出土遺物実測図Ⅰ(S＝1／3) …… 39
Fig.30　宗岡家地点出土遺物実測図Ⅱ(S＝1／3) …… 40
Fig.31　宗岡家地点出土金属・石製品実測図(S＝1／1、1／2) …… 40
Fig.32　金森家地点周辺地形図・調査区配置図(S＝1／500) …… 43
Fig.33　金森家地点遺構配置図(S＝1／100) …… 44
Fig.34　金森家地点トレンチ平面図・土層断面図(S＝1／40) …… 45
Fig.35　金森家地点出土遺物実測図(S＝1／3) …… 46
Fig.36　旧田中家建物平面(昭和49年度調査時) …… 47
Fig.37　峰山家(旧田中家)地点遺構配置図(S＝1／80) …… 48
Fig.38　峰山家(旧田中家)地点トレンチ平面図・土層断面図(S＝1／40) …… 50
Fig.39　峰山家(旧田中家)地点出土遺物実測図(S＝1／3) …… 51
Fig.40　旧川上家地点調査区配置図(S＝1／500) …… 52
Fig.41　旧川上家地点出土遺物実測図Ⅰ(S＝1／3) …… 54
Fig.42　旧川上家地点出土遺物実測図Ⅱ(S＝1／3) …… 55
Fig.43　長楽寺周辺絵図 …… 57

図版目次

巻頭図版１　昆布山谷地区第６地点ＳＸ25全景(南東より)
巻頭図版２　昆布山谷地区第８地点ＳＷ06全景(北より)

ＰＬ．１ 昆布山谷地区第５地点　第２面検出状況(南東より)
同　第２面検出状況(南西より)
ＰＬ．２ 昆布山谷地区第５地点　ユリカス集積部検出状況(南東より)
同　ユリカス集積部検出状況(南西より)
ＰＬ．３ 昆布山谷地区第５地点　完掘状況(南東より)
同　完掘状況(北より)
ＰＬ．４ 昆布山谷地区第５地点　ユリカス集積部検出状況(北東より)
同　ユリカス集積部検出状況(南西より)
ＰＬ．５ 昆布山谷地区第５地点　有機物出土状況(西より)
同　有機物出土状況(北西より)
同　有機物出土箇所土層堆積状況(東より)
同　有機物出土箇所土層堆積状況(南東より)
同　ＳＫ03検出状況(南東より)
同　ＳＫ03完掘状況(南東より)
同　ＳＫ03完掘状況(北東より)
同　ＳＫ03北壁石積(南東より)
ＰＬ．６ 昆布山谷地区第５地点　北壁・東壁北側(南より)
同　東壁南側(南西より)
ＰＬ．７ 昆布山谷地区第５地点　南壁(北西より)
同　南壁中央部(北東より)
ＰＬ．８ 昆布山谷地区第６地点　ＳＸ25調査前状況(南東より)
同　ＳＸ25調査前状況(北東より)
ＰＬ．９ 昆布山谷地区第６地点　ＳＸ25検出状況(南東より)
同　ＳＸ25上部(南西より)
ＰＬ.10 昆布山谷地区第６地点　トレンチ　遺構面(南東より)
同　遺構面(南東より)
同　南壁(北東より)
ＰＬ.11 昆布山谷地区第８地点　調査前状況(南東より)
同　調査前状況(南より)
ＰＬ.12 昆布山谷地区第８地点　南壁(北西より)
同　第１面検出状況(南東より)
同　第３面検出状況(南東より)
同　第４面検出状況(南東より)
ＰＬ.13 昆布山谷地区第８地点　第１トレンチ
ＳＷ06-②検出状況(南東より)
同　ＳＷ06-②検出状況(北東より)
ＰＬ.14 昆布山谷地区第８地点　第１トレンチ
ＳＷ06-①検出状況(南東より)
同　ＳＷ06-①検出状況(北より)
ＰＬ.15 昆布山谷地区第８地点　第１トレンチ東壁(南より)
同　東壁(北より)
ＰＬ.16 昆布山谷地区第８地点　木舞出土状況①(北東より)
同　木舞出土状況②(北東より)
同　第１トレンチ北端部踏石出土状況(東より)
同　第２トレンチ　南壁(北より)
同　第２トレンチ完掘状況(南西より)
同　ＳＷ06-②上平坦面検出状況(南東より)
ＰＬ.17 宗岡家地点　Ⅶ区　調査前状況(西より)
同　完掘状況(南西より)
ＰＬ.18 宗岡家地点　Ⅵ区　調査前状況①(西より)
同　調査前状況②(西より)
同　調査前状況③(西より)
同　調査前状況③(西より)
同　調査前状況⑤(西より)
同　調査前状況⑥(南より)
同　調査前状況⑦(南より)
ＰＬ.19 宗岡家地点　Ⅵ区　完掘状況①(北東より)
同　完掘状況②(東より)
ＰＬ.20 宗岡家地点　Ⅵ区　完掘状況③(北東より)
同　完掘状況④(南より)
ＰＬ.21 宗岡家地点　Ⅵ区　ＳＢ03検出状況①(北より)
同　ＳＢ03検出状況②(南東より)
ＰＬ.22 宗岡家地点　Ⅵ区　ＳＢ03検出状況③(北東より)
同　ＳＢ03北西部(北西より)
同　ＳＢ03検出状況④(東より)
宗岡家地点　Ⅶ区　ＳＸ06検出状況(南より)
同　ＳＸ06完掘状況①(南より)
同　ＳＸ06完掘状況②(西より)
同　ＳＸ06南北断面(東より)
ＰＬ.23 宗岡家地点　Ⅶ区　ＳＸ07検出状況(西より)
同　ＳＤ04-②検出状況(南より)
同　ＳＤ04-②完掘状況(南より)
ＰＬ.24 宗岡家地点　10トレンチ　柱掘方検出状況(南より)
同　礎石掘方検出状況(東より)
同　礎石掘方検出状況(北東より)
同　完掘状況(南西より)
ＰＬ.25 宗岡家地点　浄化槽トレンチ　北壁(南より)
同　東壁(西より)
ＰＬ.26 宗岡家地点　北側　ＳＤ04検出状況(北東より)
同　ＳＤ04検出状況(東より)
同　ＳＤ04検出状況(北西より)

同　ＳＤ04検出状況(西より)
同　ＳＤ04内部(西より)
ＰＬ.27 金森家地点　主屋南西部　礎石検出状況(西より)
同　東半部礎石検出状況(北より)
同　西半部礎石検出状況(北より)
同　ＳＢ01　調査前状況(南東より)
ＰＬ.28 金森家地点　ＳＢ01　完掘状況(北より)
同　第１トレンチ南半東壁(北より)
同　第１トレンチ北半東壁(南東より)
同　第２トレンチ南壁(北より)
同　第３トレンチ南壁(北より)
ＰＬ.29 金森家地点　主屋北東部　風呂場跡検出状況(東より)
同　廊下跡踏石検出状況(西より)
同　廊下跡礎石検出状況(南より)
同　廊下跡礎石検出状況(東より)
ＰＬ.30 峰山家(旧田中家)地点　上層遺構検出状況(東より)
同　台所検出状況(南東より)
ＰＬ.31 峰山家(旧田中家)地点　台所礎石検出状況(南より)
同　石敷検出状況(東より)
同　台所検出状況(北東より)
同　便所風呂棟西側部分検出状況(北より)
ＰＬ.32 峰山家(旧田中家)地点　便所風呂棟西側部分検出状況(南西より)
同　(南東より)
ＰＬ.33 峰山家(旧田中家)地点　便所風呂棟東側部分検出状況(南より)
同　全景（南東より）
ＰＬ.34 峰山家(旧田中家)地点　便所検出状況(北より)
同　風呂場検出状況(南より)
同　便槽検出状況(北より)
同　風呂釜遺構検出状況(北より)
同　浄化槽トレンチ　石列検出状況(南より)
ＰＬ.35 峰山家(旧田中家)地点　浄化槽トレンチ石列検出状況(東より)
同　土層断面(東より)
同　(南より)
同　完掘状況(南より)
ＰＬ.36 旧川上家地点　調査前状況(南西より)
同　石列検出状況(南より)
ＰＬ.37 旧川上家地点　石列焼土検出状況(南より)
同　岩盤検出状況(東より)
同　遺構面検出状況(東より)
同　石列部分土層断面(南より)
ＰＬ.38 旧川上家地点　水溜遺構(ＳＥ01)検出状況(北より)
同　半截状況(南より)
同　(東より)
同　水溜遺構(ＳＥ01)検出面完掘状況(東より)
ＰＬ.39 旧川上家地点　土層断面(南より)
同　(南より)
ＰＬ.40 昆布山谷地区出土遺物Ⅰ
昆布山谷地区出土遺物Ⅱ
ＰＬ.41 昆布山谷地区出土遺物Ⅲ
昆布山谷地区出土遺物Ⅳ
ＰＬ.42 宗岡家地点出土遺物Ⅰ
宗岡家地点出土遺物Ⅱ
ＰＬ.43 宗岡家地点出土遺物Ⅲ
金森家地点・峰山家(旧田中家)地点出土遺物
ＰＬ.44 旧川上家地点出土遺物Ⅰ
旧川上家地点出土遺物Ⅱ
ＰＬ.45 昆布山谷地区出土遺物
ＰＬ.46 金森家地点・旧川上家地点出土遺物

表目次

Tab.1　石見銀山遺跡調査一覧 …… 3
Tab.2　昆布山谷地区第５地点出土遺物一覧表 …… 12
Tab.3　昆布山谷地区第６地点出土遺物一覧表 …… 22
Tab.4　昆布山谷地区第８地点出土遺物一覧表 …… 26
Tab.5　宗岡家地点出土遺物一覧表 …… 41
Tab.6　金森家地点出土遺物一覧表 …… 46
Tab.7　峰山家(旧田中家)地点出土遺物一覧表 …… 51
Tab.8　旧川上家地点出土遺物一覧表 …… 54

第１章　遺跡の位置と概要

第１節　遺跡の位置と概要

第１項　石見銀山遺跡の位置と概要 (Fig. 1)

石見銀山遺跡は島根県中央部の大田市に位置する鉱山遺跡である。遺跡の中心部は日本海から直線距離で約６㎞の内陸部に位置する。遺跡の周辺には大江高山火山群の一角である仙ノ山や要害山などの海抜 400 ～ 500 ｍの山々が連なり、山間には深い谷と水系が発達している。山地から海岸に至るまでに平地は極めて少なく、銀を運んだ街道は中小の丘陵や台地、谷間の水系の間を縫って設けられている。港と港町が位置する沿岸部にはリアス式海岸が展開し、港の奥部には狭い谷が発達している。

本遺跡は 16 世紀から 20 世紀にかけて採掘から精錬までが行われた鉱山跡と鉱山町を中心に、周囲の山城跡や銀鉱山から港までを結ぶ２本の街道、銀鉱石・銀の積出しや銀山で必要な諸物資を搬入した港湾などからなる複合遺跡である。銀の生産から搬出に至る鉱山開発の社会機構及び社会基盤施設の総体を示すこれ

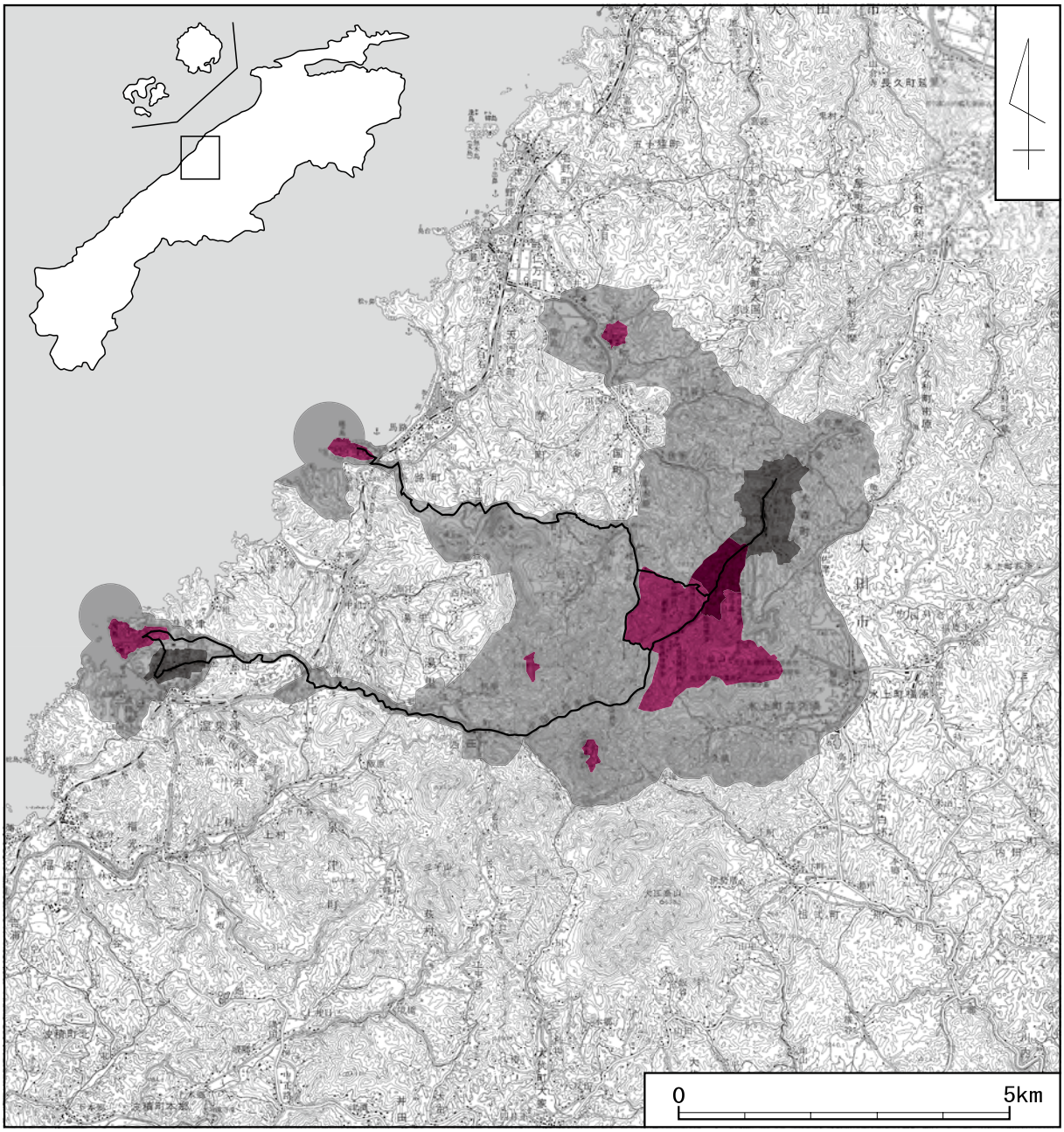


Fig. 1　石見銀山遺跡位置図 (Ｓ＝１／ 100,000)

らの良好な遺跡群は、鉱山町や港湾などの建造物群とともに、当時の土地利用の在り方と機能の一部が現在の土地利用の在り方にも伝達されつつ、自然と共生した顕著な普遍的価値を持つ文化的景観の事例として、平成 19(2007) 年にユネスコ世界遺産に登録された。

第２項　調査の経過 (Tab. 1)

石見銀山遺跡の発掘調査は、昭和 58(1983) 年度から昭和 60(1985) 年度にかけて島根県教育委員会 (以下「県教委」) と大田市教育委員会 (以下「市教委」) が策定した「石見銀山遺跡総合整備計画」と同時に開始された。昭和 63(1988) 年からは県教委と市教委が共同で、平成 18(2006) 年からは市教委が主体となって毎年継続して発掘調査を実施している。

平成 8 (1996) 年度からは石見銀山遺跡総合調査が開始し、平成 14(2002) 年にはその成果として、石見銀山遺跡の広域的な保存を目的した史跡範囲の追加指定が行なわれた。その後、調査の進展と共にさらに史跡範囲の拡大と保護措置が図られ、平成 20(2008) 年には、史跡指定総面積は 389ha となった。これまでの調査地点と調査の経過は Tab. 1 のとおりである。

第２節　平成 28(2016) 年度の調査

第１項　調査の概要

石見銀山遺跡の調査研究は平成 28 年度で 32 年目となった。平成 28 年度は、昆布山谷地区と大森銀山伝統的建造物群保存地区 (以下、伝建地区という) 内の宗岡家地点・金森家地点の発掘調査を実施した。また、史跡地内・伝建地区内・世界遺産指定範囲内において小規模な掘り下げを伴う現状変更行為が発生した際には試掘・立会調査を随時実施し、遺構・遺物の確認と記録を行なった。

昆布山谷地区では平成 22(2010) 年度から発掘調査を実施しており、本年度で７年目となる。本年度は、昨年度に引き続き第５地点・第６地点と、本年度から新たに設定した第８地点を対象として実施した。

第５地点においては、昨年度よりも調査面積を広げて遺構の検出に努めた。発掘調査によって、第３遺構面上には大量のユリカスが廃棄されており、選鉱に関連する可能性のある遺構も検出された。また、土地の造成や利用の変遷に関わる資料も得ることができた。

第６地点においては、岩盤加工遺構ＳＸ 25 が検出された。ＳＸ 25 は階段状遺構を中心とする遺構で、検出状況や文献史料における記録より、長楽寺へ向かう参道の一部と考えられる。

第８地点は今年度から新たに着手した調査地点で、昆布山谷の谷筋における道の様相を明らかとすることを目的として発掘調査を行なった。調査によって、かつての道と平坦面を区画していたとみられる石垣ＳＷ 06 が検出された。

宗岡家地点においては、保存修理事業に先立ち、建物の修理や復原に必要な情報を得ることを目的とする発掘調査を平成 26(2014) 年度から継続的に実施しており、本年度は主屋内を対象として発掘調査を行なった。発掘調査により、宗岡家住宅の前身建物に関連する礎石や石列が検出されたほか、大カマドなどの宗岡家の設備に関連する遺構が検出された。

金森家地点においても、保存修理事業に先立つ発掘調査を実施した。本年度は主屋基礎の測量調査のほか、主屋内の一部と主屋東側に位置する付属屋跡の発掘調査を実施した。

立会調査は、伝建地区内の７か所で実施した。立会調査を実施した地点の内、峰山家地点と旧川上家地点、宗岡家地点ではかつての町並みに関連する遺構が検出された。

第２項　指導関係及び公開事業

本年度の調査に関連して、10 月 31 日に大橋泰夫教授 (島根大学) から昆布山谷地区発掘調査地現地にて、調査成果の検証や今後の調査方針などに関する指導を頂いた。また、大橋康二氏 (佐賀県立九州陶磁文化館) からは、６月 24 日に石見銀山遺跡のこれまでの発掘調査で出土した陶磁器類の、時期及び産地について指導を頂いた。

昆布山谷地区の発掘調査に当たっては９月２日～16 日にかけて、島根大学考古学研究室と共同で調査を行なった。共同調査の成果は９月 14 日に現地説明会で公表した。

公開事業としては、発掘調査現地説明会を５月８日に宗岡家地点で、11 月 26 日に昆布山谷地区でそれぞれ開催し、多くの見学者の来場があった。

Tab. 1　石見銀山遺跡調査一覧

年　度	西　暦	調　査	調　査　地　点	備　考
昭和 58 年	1983	発掘調査	①代官所跡、④蔵泉寺口番所跡	石見銀山遺跡総合整備計画の策定
60 年	1985	分布調査	大田市、温泉津町、仁摩町、邑智町、赤来町、大和村、羽須美村に所在する石見銀山関連遺跡	
63 年	1988	発掘調査	⑨龍源寺間歩	
平成元年	1989	発掘調査	蔵泉寺口番所跡、②向陣屋跡、⑧上市場	
2 年	1990	発掘調査	蔵泉寺口番所跡、⑥大龍寺谷、③旧河島家	
3 年	1991	発掘調査	⑤下河原吹屋跡	
4 年	1992	発掘調査	⑦山吹城跡下屋敷	
5 年	1993	発掘調査	⑫石銀千畳敷	
6 年	1994	発掘調査	石銀千畳敷	
7 年	1995	発掘調査	石銀千畳敷	
8 年	1996	発掘調査	⑬石銀藤田	総合調査開始
9 年	1997	発掘調査	⑰宮ノ前、⑪出土谷、石銀藤田	
10 年	1998	発掘調査	⑩栃畑谷、石銀藤田、⑭於紅ヶ谷、⑮竹田	
11 年	1999	発掘調査	宮ノ前、石銀藤田、出土谷、竹田	
12 年	2000	発掘調査	宮ノ前、石銀藤田、出土谷、竹田	
		分布調査	柑子谷地区	
13 年	2001	発掘調査	宮ノ前、於紅ヶ谷、出土谷、竹田、⑯本谷、町並み保存地区 (阿部家、熊谷家)	
14 年	2002	分布調査	宮ノ前、於紅ヶ谷、出土谷、竹田、本谷、町並み保存地区 (阿部家、熊谷家)	
15 年	2003	発掘調査	宮ノ前、下河原下組、出土谷、本谷	
16 年	2004	分布調査	宮ノ前、本谷、港湾集落、町並み保存地区	
17 年	2005	発掘調査	本谷、町並み保存地区 (岡家)	
18 年	2006	発掘調査	本谷、町並み保存地区 (宗岡家)	
19 年	2007	発掘調査	⑱安原谷、下河原、町並み保存地区 (渡辺家)	世界遺産登録
20 年	2008	発掘調査	安原谷、町並み保存地区 (柳原家、渡辺家)、⑲清水谷製錬所跡	
21 年	2009	発掘調査	安原谷、本谷、町並み保存地区 (杉谷家、渡辺家)、清水谷製錬所跡	
22 年	2010	発掘調査	安原谷、本谷、昆布山谷	
23 年	2011	発掘調査	⑳昆布山谷、石銀、町並み保存地区 (旧大住家)	
24 年	2012	発掘調査	昆布山谷	
25 年	2013	発掘調査	昆布山谷	
26 年	2014	発掘調査	昆布山谷、町並み保存地区 (宗岡家)	
27 年	2015	発掘調査	昆布山谷、町並み保存地区 (宗岡家)、㉑豊栄神社	
28 年	2016	発掘調査	昆布山谷、町並み保存地区 (宗岡家、金森家)	

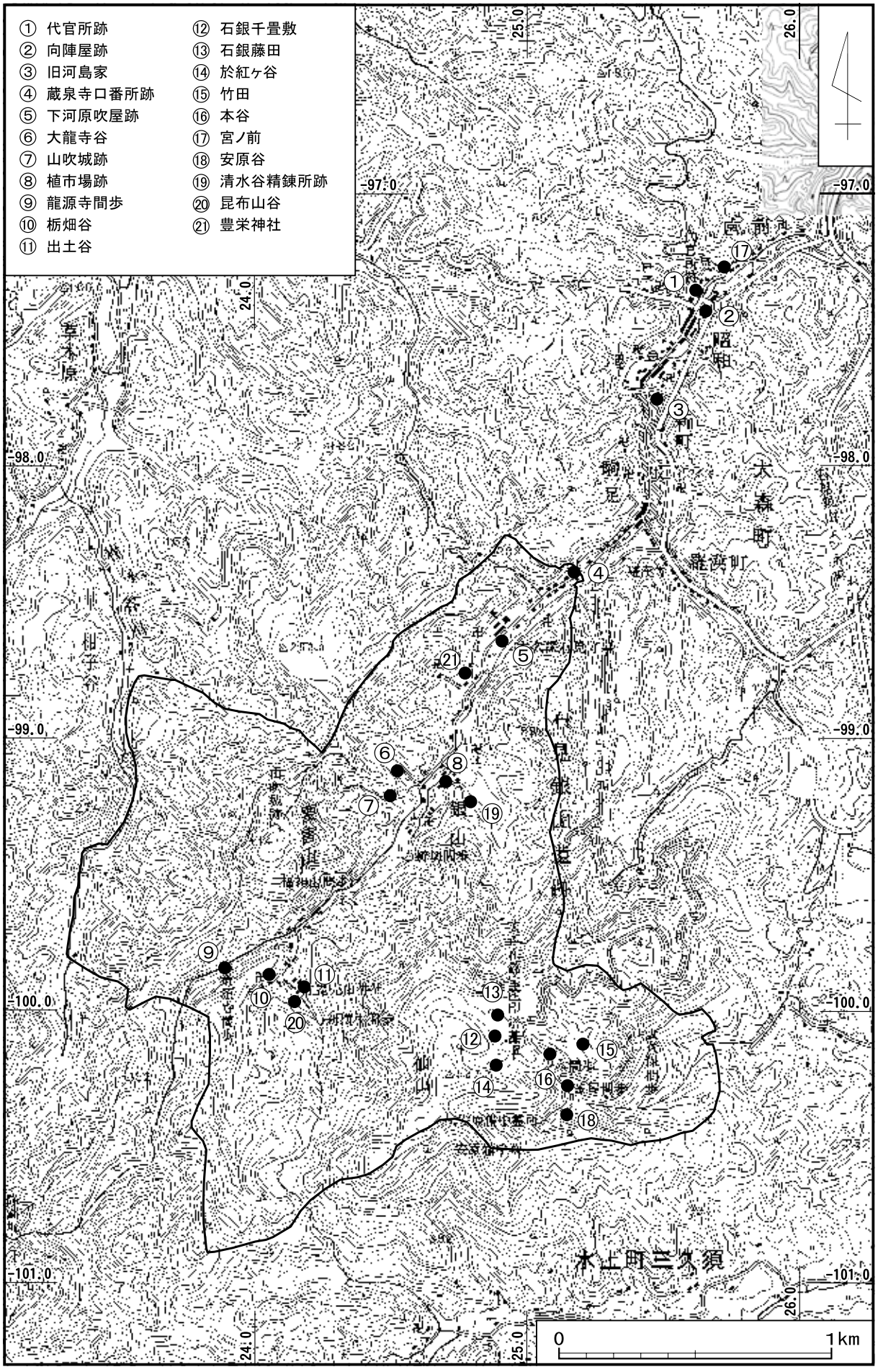


Fig. 2　石見銀山遺跡調査地点位置図 (S＝1／25,000)

第２章　昆布山谷地区の調査

第１節　調査地の周辺環境

昆布山谷は仙ノ山の西側を南北方向に延びる谷である。「銀山柵内」の範囲の中では南西部に位置し、栃畑谷に接している。谷の入口には佐毘売山神社が所在し、谷筋や周辺の尾根上には長楽寺跡や虎岸寺跡などの寺跡や墓地が点在している。昆布山谷の付近に点在する墓石には、紀年銘が天正年間 (1573 ～ 1593 年) まで遡るものも含まれており、昆布山谷が 16 世紀代から利用されていたことが窺われる。

文献史料には天文年間 (1532 ～ 1555 年) に昆布山谷での活動記録があることから、昆布山谷への居住が石見銀山の開発当初から始まっていたことが窺え、近代においても藤田組によって開発されるなど、石見銀山の開発初期から大正期の休山に至るまで利用されていた谷である。平成 22 年度から実施している発掘調査によっても江戸時代の前半期から近代に至るまでに、盛衰はあるものの継続的に利用されていた様相が確認できている。以上のように、昆布山谷は石見銀山の開発から隆盛、近代における再開発のいずれにも深く関わっており、石見銀山における鉱業活動や生活を知る上で重要な谷といえる。

第２節　調査の概要

第１項　調査の経緯と成果 (Fig. 3)

昆布山谷地区の近辺では、これまでに佐毘売山神社を挟んで東側に位置する出土谷地区や、西側に隣接する栃畑谷地区で発掘調査を実施しており、16 世紀後半に遡る遺構・遺物や、18 世紀後半の銅製錬にも関わる遺構が検出されている。昆布山谷地区の発掘調査は、平成 22(2010) 年度から開始し、平成 28(2016) 年度で７年目である。これまでに第１～７地点の調査を実施し、谷筋の広い範囲で江戸時代後半から幕末と、近代の遺構･遺物が見つかっている。特に、第５・６・７地点においてはそれぞれで岩盤加工遺構が検出され、谷筋に露出した岩盤を加工しながら宅地を造成していたことが明らかとなっている。

本年度は第５地点、第６地点、そして新たに設定した第８地点の発掘調査を実施した。第５地点は平成 26(2014) 年度から調査に着手した地点で、調査区に広がる平坦面上からは江戸時代後半から近代にかけて利用された３棟の礎石建物跡が検出されている。また、調査区内の一部に下層確認トレンチを設定して深く掘り下げたところ、調査区の西部に位置する岩盤加工遺構 (ＳＸ 02) が 17 世紀前半頃には利用されていたことや、現在の地形が形成されるよりも前に活発に利用されていたことなどが明らかとなった。平成 27(2015) 年度にはＳＸ 02 の東側に幅２ｍ程度のトレンチを設定し、ＳＸ 02 全体の検出を試みた。発掘調査によってＳＸ 02 の広い範囲は検出できたが、最下部付近から岩盤の一部を利用したＳＸ 17 ～ 19 が見つかったことや、最下部付近では複数面の硬化面があり、活発な利用の痕跡が確認されるなど、範囲の限られた調査では十分な成果が得られなかった。そのため、調査範囲を広く設定した上で、十分な期間を設けて調査を実施することとした。本年度の発掘調査では、Ⅰ区の広い範囲を調査対象とし、地形の形成や土地利用の変遷に係る資料が得られた。

第６地点は昨年度から調査に着手した地点で、昨年度の発掘調査で見つかった岩盤加工遺構 (ＳＸ 20) の北側に、別の岩盤加工遺構 (ＳＸ 25) が所在することが確認されていた。本年度の調査では、ＳＸ 25 の検出と記録を行なった。また、ＳＸ 25 は一部が地下に埋没していることが判明したため、トレンチを設定して全体の検出に努めたが、かつて機能していた道路面が検出されたため、掘り下げを中止した。

第８地点は本年度から新たに着手した調査地点で、かつての道に関連する遺構の検出を目的に、谷筋の山道沿いにトレンチを設定して調査を行なった。発掘調査によって道と平坦面を区画するための石垣遺構 (ＳＷ 06) が検出された。なお、第８地点の発掘調査に当たっては、島根大学考古学研究室と共同調査を行なった。

第２項　調査範囲の設定

平成 28 年度は第５地点 (大森町ニ 270 番地１) と第６・８地点 (大森町ホ 359 番地、ホ 363 番地２、

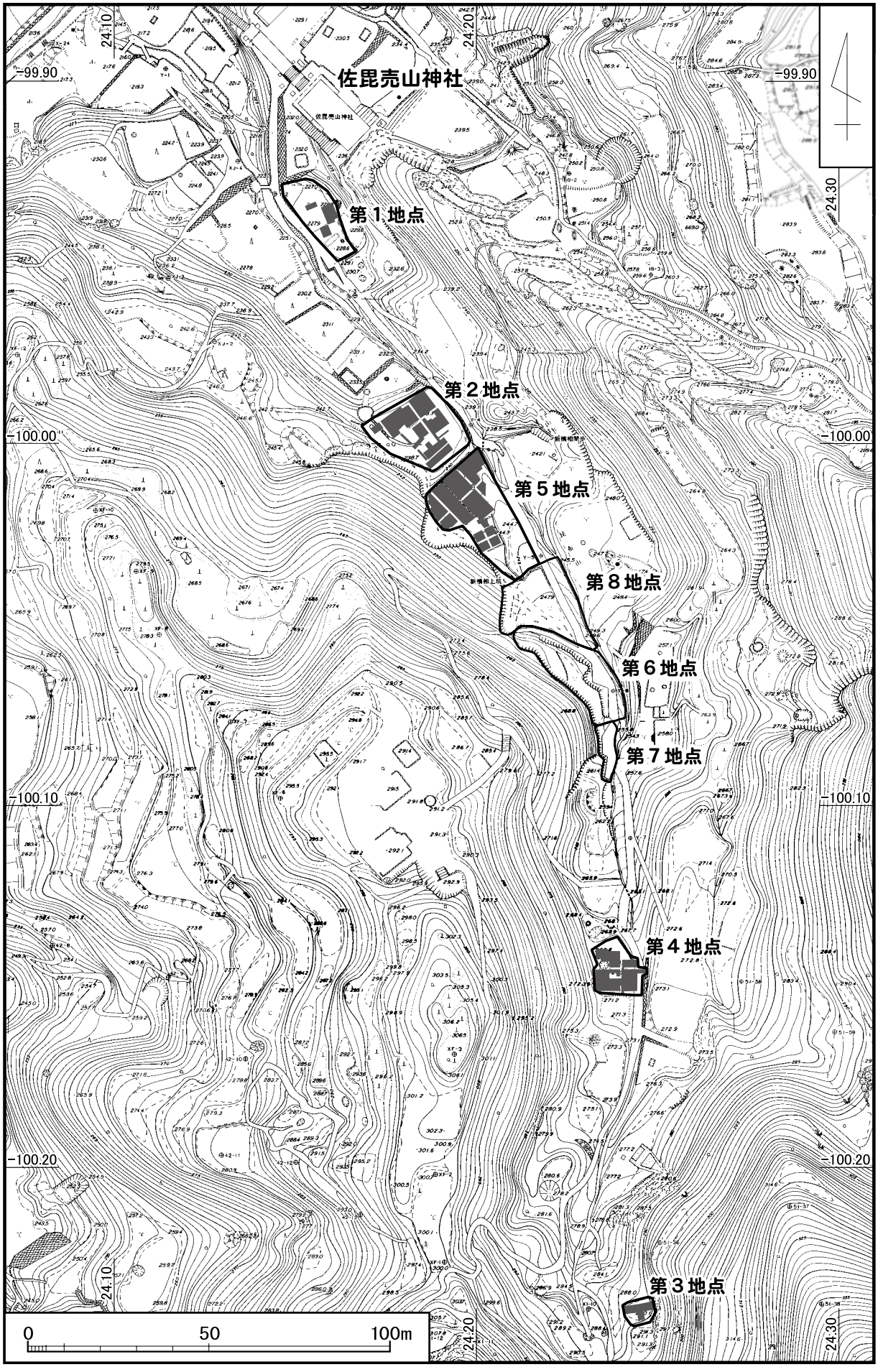


Fig. 3　昆布山谷地区調査地点位置図 (S＝1／1,500)

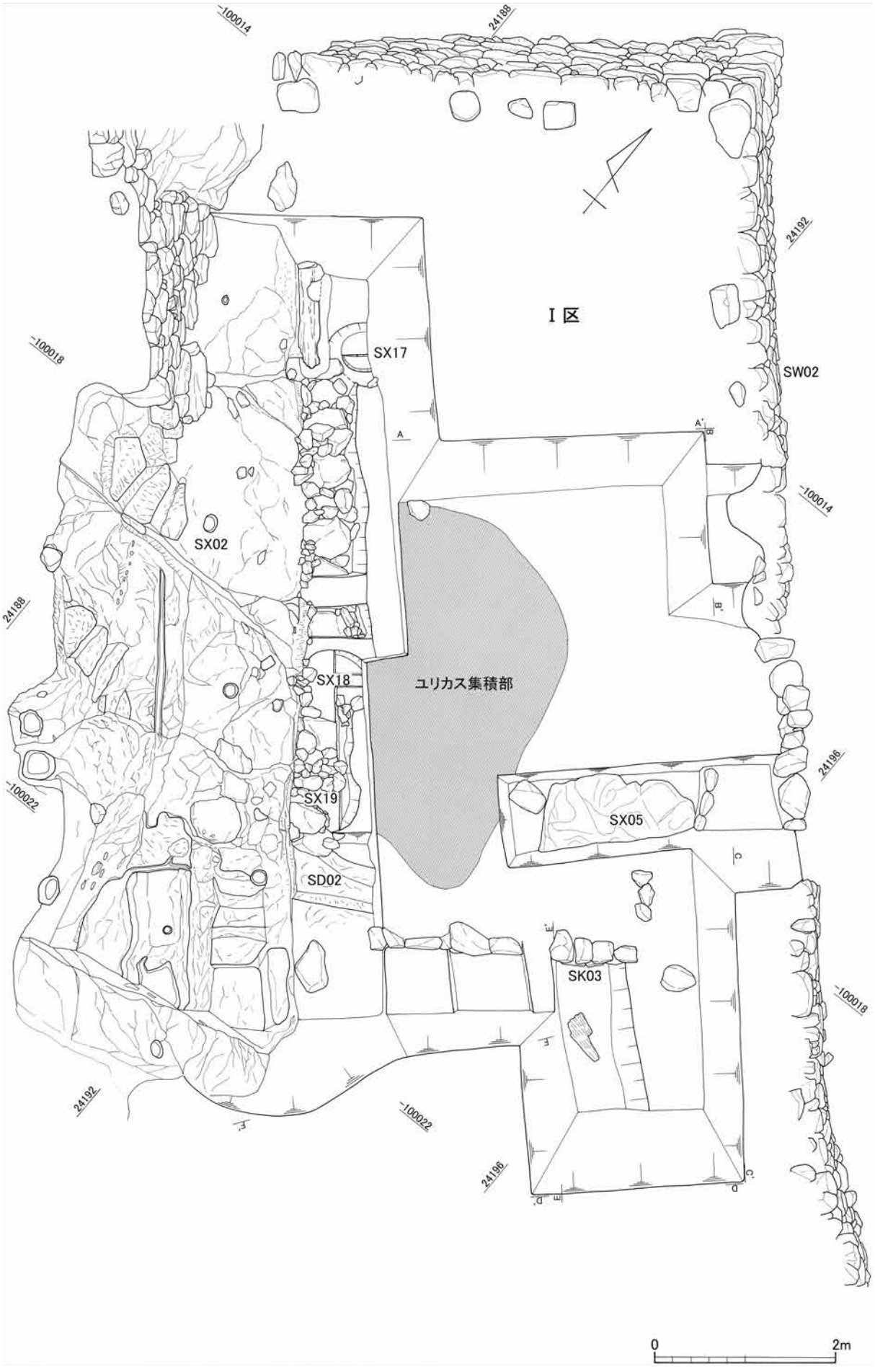


Fig. 4　昆布山谷地区第５地点検出遺構配置図 (Ｓ＝１／ 60)

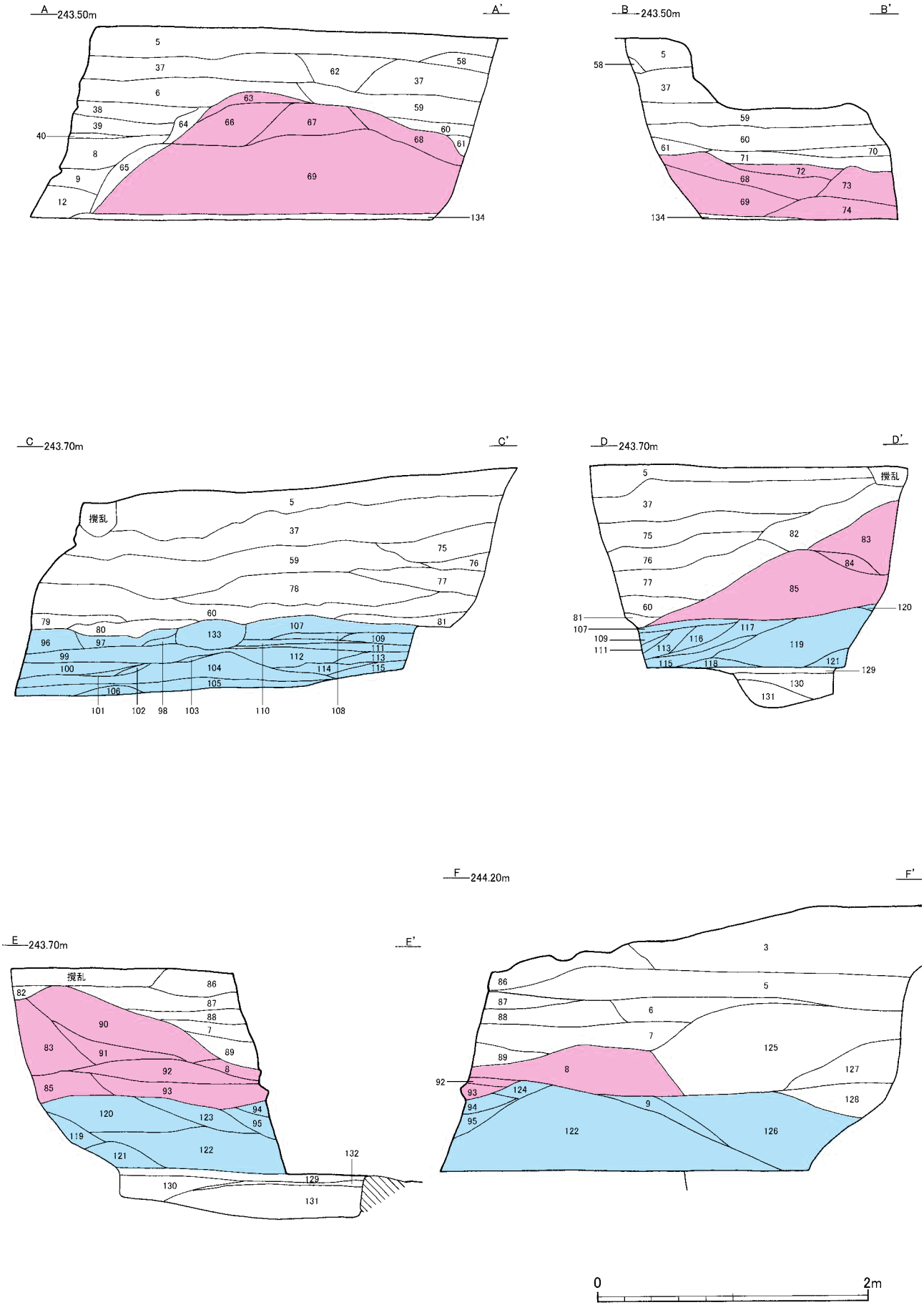


Fig. 5　昆布山谷地区第５地点土層断面図（Ｓ＝１／40)

3 2.5 Y 2/1 黒色土
5 5 Y 5/2 灰オリーブ色土（小礫を多く含む）
6 5 Y 6/3 オリーブ黄色土（小礫を多く含む）
7 5 Y 5/1 灰色土（目の粗い砂質土）
8 5 Y 4/1 灰色土（しまりのよい砂質土）
9 2.5 GY 2/1 黒色土
12 2.5 Y 5/1 黄灰色土（緻密な砂質土）
37 10 YR 3/1 黒褐色土
38 2.5 Y 7/2 灰黄色土（2.5Y 7/6 明黄褐色土の粘質ブロックを含む）
39 2.5 Y 5/2 明灰黄色土（小～中型のズリを多く含む）
40 2.5 Y 8/1 灰白色土（粘質）
58 7.5 YR 3/3 暗褐色土（粘性ややあり、しまり弱い。基質は粘土～シルト質。2～10ミリ程度の小礫を含む。造成土）
59 7.5 YR 3/2 黒褐色土（粘性あり、しまりややある。粘土～シルト質。1センチ未満の砂利と3センチ程度の小礫を僅かに含む。造成土）
60 10 YR 2/3 黒褐色土（粘性ややあり、しまり弱い。シルト質。堆積層内に炭化物のブロックがみられる。造成土）
61 10 YR 2/3 黒褐色土（粘性なく、しまりやや弱い。粘質～シルト質。60 層よりやや明るい黒褐色土で砂利が少なく粒子が均一。造成土）
62 7.5 YR 3/3 暗褐色土（粘性ややあり、しまり弱い。シルト質。周辺の層と比較して砂利等が非常に少ない。土坑埋土か？）
63 10 YR 4/3 にぶい黄褐色土（粘性しまりともにない。基質は2～10ミリ程度の砂利。ズリ廃棄層）
64 7.5 YR 6/6 橙色土（10YR7/4 にぶい黄橙色土の粘土ブロックが層状にはいる）
65 10 YR 3/2 黒褐色土（粘性しまりともにない。3ミリ程度の砂利がほとんどを占める。廃棄物層）
66 10 YR 3/3 暗褐色土（粘性しまりともにない。5～15センチのズリ層。ズリ廃棄層）
67 10 YR 3/3 暗褐色土（粘性しまりともにない。66 層より明るい暗褐色土。1～15センチのズリ層。ズリ廃棄層）
68 10 YR 6/2 灰黄褐色土（粘性しまりともに弱い。10センチ程度のズリを含む。ズリ廃棄層）
69 10 YR 3/3 暗褐色土（粘性しまりともにない。1～15センチのズリが 100% 含む。ズリ廃棄層）
70 10 YR 2/3 黒褐色土（粘性なく、しまり弱い。10センチ程度の礫を多く含む）
71 10 YR 4/2 灰黄褐色土（粘性なく、しまりやや弱い。2センチ未満の小礫を 80% 以上含む）
72 10 YR 4/4 褐色土（粘性しまりともにない。3センチ程度の小礫を 80% 以上含む。ズリ廃棄層）
73 10 YR 4/3 にぶい黄褐色土（粘性しまりともにない。1～5センチ程度の礫が 100%。ズリ廃棄層）
74 10 YR 3/4 暗褐色土（粘性しまりともにない。1センチ程度の小礫を 30% 以上含む。ズリ廃棄層）
75 10 YR 3/3 暗褐色土（粘性しまりともに弱い。3センチ程度の小礫と10センチの礫を 80% 以上含む。造成土）
76 10 YR 3/4 暗褐色土（粘性しまりともに弱い。2～20ミリ程度の砂利を 80% 以上含む。造成土）
77 10 YR 4/3 にぶい黄褐色土（粘性しまりともに弱い。1～5センチ程度の小礫を 80% 以上含む。造成土）
78 10 YR 3/2 黒褐色土（粘性弱く、しまりやや強い。5～10センチ程度の礫と、1～10ミリ程度の砂利を 80% 以上含む。造成土）
79 10 YR 3/3 暗褐色土（粘性しまりともに弱い。3ミリ程度の砂利を 40% 含む。造成土）
80 10 YR 6/6 明黄褐色土（粘性強く、しまりやや強い。シルト質～粘土質で粒子は均一である。造成土）
81 10 YR 4/2 灰黄褐色土（粘性しまりともに弱い。5ミリ程度の砂利を 50% 含む。造成土）
82 10 YR 2/2 黒褐色土（粘性しまりともにない。2～10センチ程度のズリの廃棄層）
83 10 YR 5/6 黄褐色土（粘性しまりともにない。7.5 YR 2/1 黒色のズリ含む）
84 10 YR 5/3 にぶい黄褐色土（粘性しまりともにない。2ミリ程度の砂利を 90% 程度含む。ユリカスか？）
85 10 YR 3/2 黒褐色土（粘性しまりともにない。2～10センチ程度のズリ層だが、中には50センチを超えるズリも有る）
86 7.5 YR 3/2 黒褐色土（粘性なく、しまり強い。5ミリ程度の砂利を 10% 含む）
87 7.5 YR 3/2 黒褐色土（粘性なく、しまり強い。10センチ大の礫を少しと、1センチ程度の砂利を 60% 含む）
88 7.5 YR 4/3 褐色土（粘性なく、しまり強い。5～10センチ程度のズリを多く含む）
89 7.5 YR 3/3 暗褐色土（粘性なく、しまり強い。10センチ以上の礫を多少含む）
90 7.5 YR 2/3 極暗褐色土（粘性しまりともにない。5～20センチ程度のズリの廃棄層）
91 10 YR 3/4 暗褐色土（粘性弱く、しまりややある。5～10ミリ程度の砂利を 80% 以上含む）
92 10 YR 5/3 にぶい黄褐色土（粘性しまりともにない。1～5センチ程度のズリを 100% 含む。選鉱過程のズリの堆積か？）
93 7.5 YR 2/1 黒色土（粘性しまりともにない。1～3センチのズリがほぼ 100% 含む。選鉱過程のズリの堆積か？）
94 7.5 YR 5/6 明褐色土（粘性しまりともにない。基質は5ミリ程度のズリを 20% 含む砂質土で、10センチ大のズリも多少含む）
95 7.5 YR 2/2 黒褐色土（粘性しまりともにない。2～5センチ大のズリがほぼ 100% 含む。選鉱過程のズリの堆積か？）
96 7.5 YR 2/2 黒褐色土（粘性しまりともにない。粒子粗い砂質土。ユリカス層）
97 10 YR 3/2 黒褐色土（粘性しまりともにない。粒子粗い砂質土。ユリカス層）
98 10 YR 2/3 黒褐色土（粘性なく、しまりやや強い。粒子粗い砂質土。ユリカス層）
99 10 YR 4/2 灰黄褐色土（粘性なく、しまりやや強い。粒子粗い砂質土。ユリカス層）
100 10 YR 2/1 黒褐色土（粘性しまりともにない。1～5センチ程度の礫がほぼ 100% 含む。選鉱過程のズリの堆積か？）
101 10 YR 3/3 暗褐色土（粘性なく、しまりやや強い。粒子粗い砂質土。ユリカス層）
102 10 YR 3/2 黒褐色土（粘性なく、しまりやや強い。粒子粗い砂質土。ユリカス層）
103 7.5 YR 3/2 黒褐色土（粘性なく、しまりやや強い。粒子粗い砂質土。ユリカス層）
104 10 YR 3/2 黒褐色土（粘性なく、しまりやや強い。粒子粗い砂質土。3センチ程度の礫を少し含む。ユリカス層）
105 10 YR 3/2 黒褐色土（粘性なく、しまりやや強い。粒子粗い砂質土。ユリカス層）
106 10 YR 4/3 にぶい黄褐色土（粘性しまりともにない。粒子粗い砂質土。ユリカス層）
107 10 YR 4/2 灰黄褐色土（粘性しまりともにない。粒子粗い砂質土。ユリカス層）
108 10 YR 4/3 にぶい黄褐色土（粘性しまりともにない。5ミリ程度の礫を 80% 以上含む。ユリカス層）
109 10 YR 2/1 黒色土（粘性しまりともにない。5ミリ程度の礫を 80% 以上含む。ユリカス層）
110 10 YR 3/2 黒褐色土（粘性なく、しまり強い。粒子均一な砂質土。ユリカス層）
111 10 YR 3/2 黒褐色土（粘性なく、しまり強い。粒子均一な砂質土。110 層よりやや明るい黒褐色土。ユリカス層）
112 10 YR 2/2 黒褐色土（粘性なく、しまり強い。粒子均一な砂質土。ユリカス層）
113 10 YR 5/3 にぶい黄褐色土（粘性なく、しまり強い。粒子均一な砂質土。ユリカス層）
114 10 YR 3/3 暗褐色土（粘性なく、しまり強い。粒子均一な砂質土。上面にマンガンによる沈着が見られる。ユリカス層）
115 10 YR 4/2 灰黄褐色土（粘性なく、しまり強い。5ミリ程度の小礫を 30% 含む。ユリカス層）
116 10 YR 4/3 にぶい黄褐色土（粘性なく、しまり弱い。粒子粗い砂質土。ユリカス層）
117 10 YR 5/3 にぶい黄褐色土（粘性なく、しまり弱い。1～5センチの礫が 100% 含む。選鉱のズリの堆積か？）
118 10 YR 5/4 にぶい黄褐色土（粘性なく、しまり弱い。粒子粗い砂質土。ユリカス層）
119 10 YR 4/3 にぶい黄褐色土（粘性しまりともにない。1センチ未満の小礫と3～5センチの礫が 100% 含む。選鉱のズリの堆積か？）
120 10 YR 5/8 黄褐色土（粘性しまりともにない。1～15センチの礫がほぼ 100% 含む。選鉱過程のズリの堆積か？）
121 10 YR 7/4 にぶい黄橙色土（粘性しまりともに強い。シルト質～粘質土）
122 10 YR 6/6 明黄褐色土（5～30センチのズリがほぼ 100% 含む。ズリ層）
123 10 YR 4/2 灰黄褐色土（粘性しまりともにない。粒子粗い砂質土。ユリカス層）
124 10 YR 4/6 赤色土（粘性しまりともにない。5ミリ程度の礫が 100% 占める。被熱による変色か？）
125 10 YR 3/2 黒褐色土（粘性しまりともにない。15センチを超える大礫を多く含む。ズリ層か？）
126 10 YR 5/3 にぶい黄褐色土（粘性しまりともにない。5センチ大の礫を多く含む。ズリ層か？）
127 10 YR 4/3 にぶい黄褐色土（粘性なく、しまり弱い。2センチ程度の礫を多く含む）
128 10 YR 4/3 にぶい黄褐色土（粘性なく、しまり弱い。1センチ未満の砂利を多く含む。127 層よりもやや明るい黄褐色土）
129 10 YR 2/1 黒色土（粘性しまりともに強い。黄褐～黒色の互層状の粘質。SK03 埋土）
130 7.5 YR 3/1 黒褐色土（粘性しまりともにない。粒子粗い砂質土。ユリカス層。SK03 埋土）
131 7.5 YR 4/3 褐色土（粘性しまりともにない。10センチ程度の礫を多く含む。SK03 埋土）
132 7.5 YR 3/2 黒褐色土（粘性なく、しまり非常に強い。マンガンの沈着有り。SK03 埋土）
133 10 YR 4/2 灰黄褐色土（粘性なく、しまりやや強い。5ミリ程度の砂利を少し含む。SK03 埋土）
134 10 YR 3/2 黒褐色土（粘性しまりともにない。1センチ程度の礫を 30% 含む）

ホ 365 番地) を対象として調査を実施した。第 5 地点ではＳＸ 02 の東側で、平成 26 年度に設定したＩ区に相当する範囲を対象とした。平成 27 年度の調査ではＳＸ 02 の東側に幅 2 m程度のトレンチを設定していたが、本年度の調査ではそのトレンチをさらに東側へと拡張し、南北約 8.2 m、東西約 4.0 mの調査範囲を設定した。

第 6 地点は、平成 27 年度の調査によって岩盤加工遺構の所在が確認されていた地点である。昨年度は調査期間の都合もあり、所在確認に止まっていたが、本年度は範囲を設定して発掘調査を行なった。また、第 6 地点で検出された岩盤加工遺構が現地表面より下へ続くことが確認されたため、岩盤加工遺構の下端部から東に向けて長さ約 5 m、幅約 1 mのトレンチを設定し、調査を行なった。

第 8 地点は本年度より新たに設定した調査地点で、第 5 ・第 6 地点に挟まれた平坦面と山道である。調査に着手する前は平坦面上で居住に関わる遺構の検出を目的とする調査を計画していたが、平成 28 年 7 月 3 日に発生した豪雨によって谷筋の小河川が氾濫し、山道の一部が削られるなどの被害が出た。その結果、道筋にかつての道路の痕跡とみられる石列が露出した。第 8 地点においては､その石列が顕著に露出しており、地下における道の残存状態が良好であることも判明したことから、道路面に第 1 トレンチを設定して発掘調査を実施した。第 1 トレンチは調査の進展に応じて順次拡張し、最終的には東西 2.3 ～ 2.8 m、南北約 9.5 mとなった。また、調査によって検出されたＳＷ 06 と平坦面の関連を確認するために、第 1 トレンチの西壁から東西約 4.1 m、南北約 80㎝の第 2 トレンチを設定し、調査を行なった。

第 3 節　第 5 地点

第 1 項　調査の概要

昆布山谷地区第 5 地点は谷の入口から約 150 m 登ったところに所在する。調査地点の南側には新横相上坑が、山道を挟んで東側には新横相間歩と呼ばれる坑口がある。平成 26 年度から調査を開始し、本年度で 3 年目となった。本年度の調査では、平成 26・27 年度の発掘調査で検出されていたＳＸ 02 の前面に広がる平坦面であるＩ区において、利用状況や利用開始時期、平坦部の形成過程を明らかとすることを目的として調査を実施した。また、発掘調査によって確認された堆積層の内、調査区北壁の一部の土層剥取りを実施した。

第 2 項　層序 (Fig. 5)

本年度は調査範囲を広げたことによって、調査区の東西方向の確認が可能となったため、その成果を基に第 5 地点Ｉ区の堆積の様相を整理する。第 1 ・第 3 遺構面ではそれぞれで遺構が検出されており、これまでの認識の通り遺構面がある。これまでの認識では第 3 遺構面の後に第 2 面があり、ズリなどを利用して造成を行ないながらＩ区の高まりが漸次形成されてきたと捉えていた。しかし、Ｉ区の東西方向における堆積状況を確認したところ、Ｉ区は第 3 遺構面が機能しなくなった後に、鉱山活動によって排出されるユリカスやズリの廃棄場となっており、廃棄物の上を造成して第 1 遺構面を形成していることが明らかとなった。第 1 遺構面が完成するまでにどの程度の期間がかかっていたのか、造成は一度に行われたのか複数回に分けて漸次積み上げられたのか検討の余地はあるが、最終的に石垣 (ＳＷ 02) を築いて強度を確保していることから計画的な整備とみることができ、造成の開始から完了までにあまり時間差はないと考えられる。本年度確認された堆積層を整理すると、大きく以下の 3 つに分類できる。

【造成による堆積層】

図中上位の白色の部分で、Ｉ区がズリの廃棄場となっていた後に形成された堆積層である。堆積層の多くは水平に堆積しており、積み上げられたズリの上を整備して平坦面として利用する目的で造成されたとみられる。昨年度まではＩ区石垣の構築年代を 18 世紀後半以降としていたが、2 面としていた 9 層内から Fig. 6 -24 が出土したことにより、19 世紀以降に下る可能性がある。

【ズリの廃棄層】

図中の赤色の部分で、ズリとみられる岩石の破砕物によって構成される堆積層である。Ｉ区の広い範囲に堆積しており、一部はドーム状になっている。第 3 遺構面上の標高 242.2 ～ 242.3 m辺りから堆積が始まっ

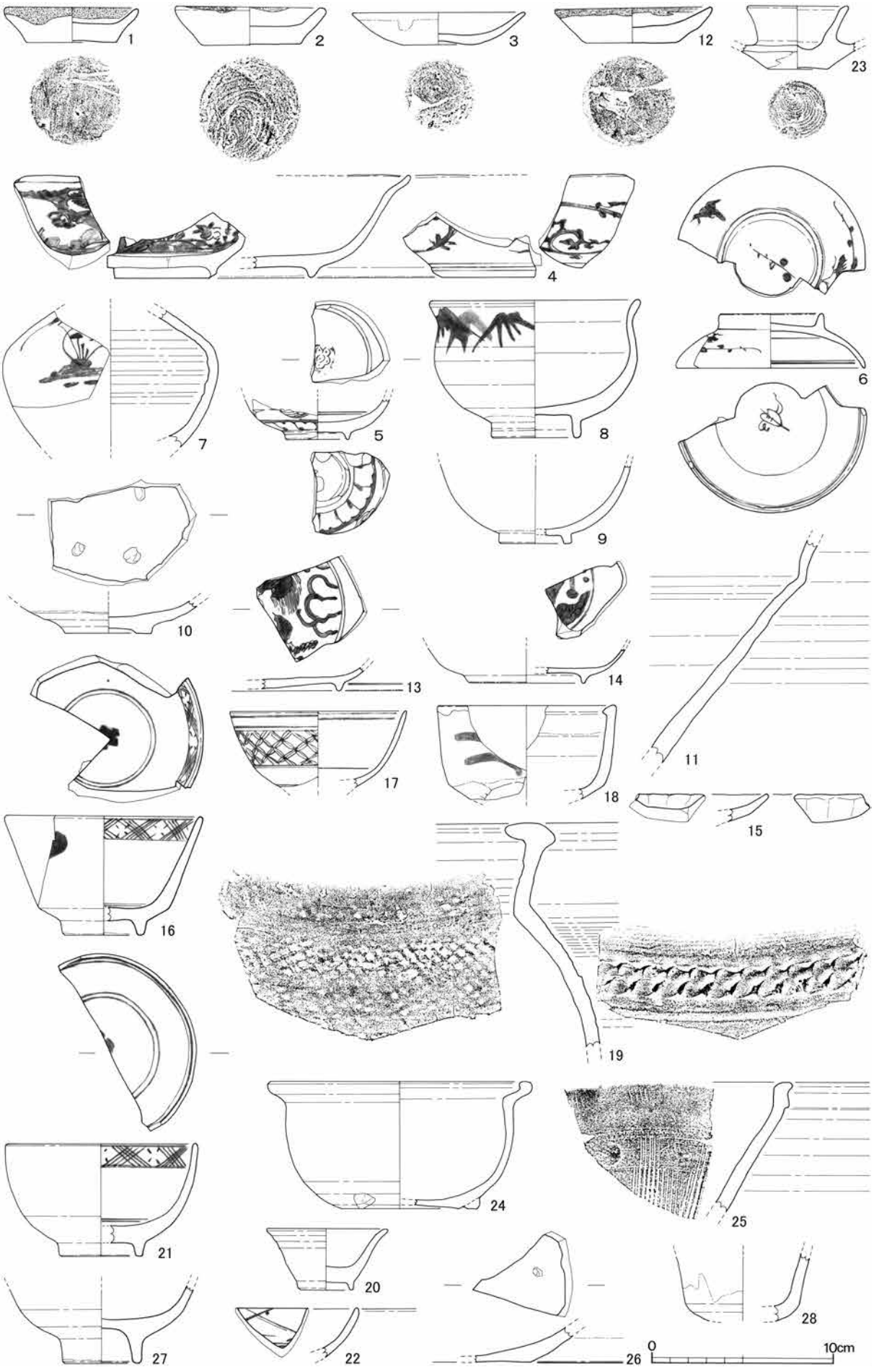


Fig. 6　昆布山谷地区第５地点出土遺物実測図Ⅰ（Ｓ＝１／３）

Tab. 2　昆布山谷地区第５地点出土遺物一覧表

挿図番号	出土地点	種　別	器　種	大きさ (cm)			色　調	成形・調整・文様	備　考
				口径	器高	底径			
1	Ⅰ～Ⅱ区　石垣裏込	土師質土器	皿	7.3	2.0	5.0	にぶい橙色	スス付着	
2	3～4層	土師質土器	皿	8.1	2.3	5.4	淡黄色		
3	3～4層	在地系陶器	皿	(9.5)	1.8	4.0	透明釉		
4	3～4層・6～7層	肥前磁器	皿		5.7		透明釉		
5	3～4層	肥前磁器	碗		(2.2)	(3.3)	透明釉		
6	3～4層	肥前磁器	蓋	(10.4)	3.0	つまみ径 5.6	透明釉		
7	7．8～38.39層	肥前磁器	瓶		(7.5)		透明釉		
8	3～4層	肥前陶器	皿	11.5	7.6	4.7	透明釉	鉄絵	
9	3～4層	肥前陶器	碗		(4.3)	(4.0)	透明釉		
10	3～4層	肥前陶器	皿		(1.8)	4.7	灰釉	胎土目	
11	3～4層	石見系陶器	鉢		(12.3)		長石釉		
12	6～38層	土師質土器	皿	8.7	2.0	5.0	橙色	スス付着	
13	6～7層	青花	皿		(1.3)		透明釉		
14	6～38層	青花	皿		(1.9)	(6.3)	透明釉		
15	6～38層	肥前磁器	皿		(1.5)		白磁釉		白磁
16	6～38層	肥前磁器	碗	(10.8)	6.6	4.4	(内) 透明釉 (外) 青磁釉	四方襷文	外青磁
17	6～38層	肥前磁器	碗	(9.6)	(4.2)		透明釉		
18	6～7層	肥前陶器	火入れ	(9.4)	(5.2)		灰釉		
19	6～7層	肥前陶器	甕		(12.4)		褐釉	タタキ	
20	7．8～38.39層	白磁	坏	(6.6)	3.4	3.0	白磁釉		中国か
21	8～38.39層	肥前磁器	碗	(10.5)	6.2	(4.4)	(内) 透明釉 (外) 青磁釉	四方襷文	外青磁
22	7．8～38.39層	肥前磁器	皿		(2.7)		透明釉		
23	7．8～38.39層	肥前陶器	灯明皿	5.4	3.5	3.2	サビ釉		
24	7．8～38.39層	石見系陶器	鍋	(14.2)	7.0	(6.6)	褐釉		
25	7．8～38.39層	須佐	すり鉢		(7.2)		サビ釉		
26	2面下層	石見系陶器	鍋		(2.0)		褐釉	胎土目	
27	ズリ層	肥前陶器	碗		(4.2)	4.2	灰釉		
28	2面下層 サンプル⑩層	肥前陶器	坏		(3.7)		灰釉		
挿図番号	出土地点	種　別	器　種	大きさ (cm)			重量 (g)	色　調	備　考
				現存長	現存幅	現存厚			
29	3～4層	銭貨	寛永通寶	2.4	2.4		1.9		
30	北端表採	銅製品	キセル (吸口)	8.9	1.4	1.2	11.0		
31	8～38.39層	銅製品	刀装具 (ハバキ)	3.3	2.0	1.9	14.6		
32	6～7層	鉄製品	タガネ	13.7	4.1	3.6	290		
33	M－1	木製品	円形板	25.0	8.9	1.2			

ており、最高点は 243.4 mと現地表面付近まで積み上げられていた。堆積状態より、Ⅰ区は第３遺構面上で選鉱などの活動が行われなくなった後に、ユリカスやズリの廃棄場になっていたことが窺われる。

【ユリカスの堆積層】

図中の青色の部分で、ユリカスが廃棄されて形成された堆積層である。第３遺構面上の標高 242.38 mから 243.00 mまでの約 60㎝にわたって堆積している。第３遺構面上には広い範囲にユリカスが堆積しており、これは第３遺構面上で検出されたＳＫ 03 などで選鉱が行われた後に周囲に廃棄するなどして集積したと考えられる。

第３項　ユリカス・ズリの廃棄層について

第３遺構面上に堆積したユリカスは粒子の大きさや色調によって細かく分層することができ、粒子の大きさは選鉱における作業過程の違いを、色調は掘り出された鉱脈の違いをそれぞれ反映している可能性がある。そのため、肉眼的・理化学的な分類・分析によって、選鉱過程の詳細な復元や利用していた鉱脈の違いを明らかにできることが期待される。また、出土したユリカスには緑錆を吹いているものが含まれるほか、付近では緑錆のあるカラミも多く出土していることから、銀銅鉱床である永久鉱床の鉱石が製錬されていた可能性がある。

ズリについても同様に大きさや色調によって分類が可能であり、掘り出された岩質の違いを反映しているとみられる。

第４項　検出遺構 (Fig. 4)

【ＳＫ 03】

ＳＫ 03 は第３遺構面から掘り込まれた遺構で、調査区南端部でその一部が検出された。東西３mで、南北は約 1.8 mまで確認したが、南側が調査範囲外へ続いていたため、全体の検出はしていない。北壁には 20 ～ 30㎝程度の礫を２段積み上げた石積みがある。東壁は素掘りだが、壁面を叩き締めて硬化させている。検出状況より、水溜めとして使用していた可能性がある。ＳＫ 03 の埋土や周囲にはユリカスが大量に堆積していることから、比重選鉱関連の設備と想定される。ただし、本年度の調査では全体の検出はしておらず、遺構の規模や全体の形状も確定していないため、来年度に本格的な調査を行なった上で詳細な報告をしたい。

第５項　出土遺物 (Fig. 6・7、Tab. 2)

【陶磁器類】

陶磁器としては主に 18 世紀から 19 世紀にかけての資料が出土した。１は土師質土器の灯明皿で、Ⅰ区東の石垣 (ＳＷ 02) の裏込めから出土した。２～ 26 はいずれも造成土内から出土した。２は土師質土器の灯明皿である。３は在地系陶器の皿で、内面のみ透明釉がかかっている。４は肥前磁器の皿である。口縁部は輪花で、体部内面には風景の文様が、体部外面には

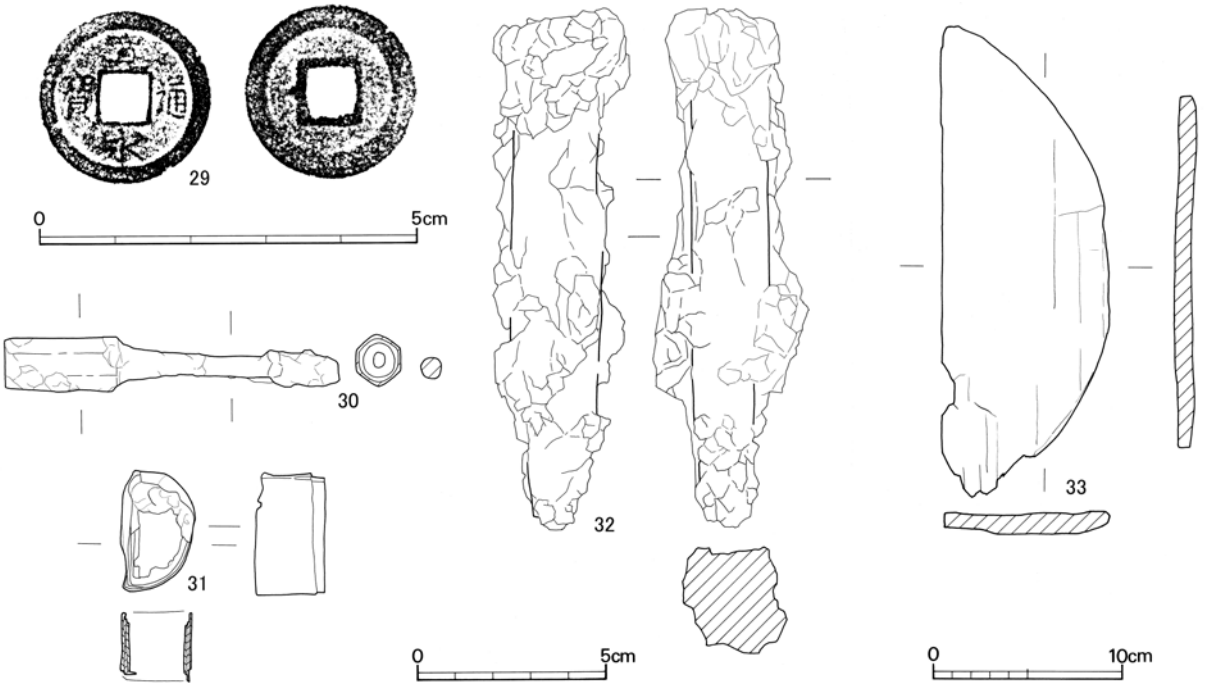


Fig. 7　昆布山谷地区第５地点出土遺物実測図Ⅱ（Ｓ＝１／１、１／２、１／４）

唐草文がある。５は肥前磁器の碗で、見込みには手描きの五弁花文がある。６は広東碗の蓋で、外面には植物文、内面には口縁部に２条、見込みに１条の圏線と、見込みに簡略化された宝物文がある。７は瓶の体部で、外面に植物の文様がある。８は唐津の碗で、底部が露胎し、口縁が外反している。外面に鉄釉による笹の施文がある。９は京焼風の碗である。10 は内面に胎土目のある唐津の皿である。11 は石見系陶器の鉢である。12 は土師質土器の灯明皿で、内面と口縁部にススが多く付着している。13・14 は青花で、景徳鎮の皿である。15 は白磁で、型押し整形の菊皿である。16・21 は肥前で、外青磁の碗である。器形は異なるが文様は共通しており、内面の口縁部に四方襷文が、見込みに２条の圏線とコンニャク印判による五弁花文がある。17 は肥前磁器の碗で、外面には格子文がある。18 は唐津の火入れで、口縁部と体部外面にのみ釉がかかっている。19 は唐津の甕である。20 は伊万里の白磁の小杯である。22 は肥前磁器の皿である。23 は唐津系の灯明皿である。24 は石見系陶器の鍋で、第２面の上面から出土した。Ｉ区の造成年代を示す資料として注目される。25 は須佐の擂鉢で、擂目は 11 本で１単位である。26 は石見系陶器の鍋である。27 は廃棄されたズリ内から出土した、唐津の呉器手碗である。本資料の出土により、ズリは 17 世紀後半以降に廃棄された可能性がある。28 はユリカス内から出土した唐津の坏である。

【金属製品・木製品】

29・31・32 は造成土内から出土した。29 は寛永通寳である。31 は刀装具で、銅製のハバキである。32 は鉄製のタガネである。30 は第５地点Ｉ区の北端部で表採した資料で、断面六角形の銅製キセルの吸い口である。

33 は第３遺構面上のユリカス集積部付近で出土した。木製の円形版で、桶などの底の一部とみられる。選鉱作業で使用していた道具の可能性もある。

第４節　第６地点

第１項　調査の概要 (Fig. 8)

第６地点は平成27年度に設定した調査地点である。昨年度の調査終了間際に周囲の環境整備を実施した結果、第６地点の北部で新たな岩盤加工遺構の所在が明らかとなっていた。本年度の調査では、第６地点北部で確認されていた岩盤加工遺構の調査を実施した。発掘調査によってＳＸ 25 が検出され、谷筋から尾根上へ上る道の様相が明らかとなった。

第２項　層序 (Fig.12)

ＳＸ 25 は表面が斜面から流れた土砂で覆われていたものの、深く埋没してはおらず、表面を覆っていた腐葉土を除去する程度で検出された。一方、ＳＸ 25 の下に設定したトレンチでは埋没していたＳＸ 25 の続きが検出されたほか、複数の硬化面を含む堆積層が確認でき、ＳＸ 25 南端部が埋没して現地表面が形成されるまでの利用状況の一部が明らかとなった。Fig.12 の 12 層はＳＸ 25 直上に分厚く堆積しており、埋土には 40㎝程度の大きな礫も含まれることから、水害等による堆積と判断される。12 層は上面が一部硬化していることから、水害が発生した後には十分な復旧をしておらず、上面を道としていたとみられる。後述するが、同様の状況は第８地点の第１トレンチでも確認されている。また、８層・10 層も上面が硬化しており、道として利用されていた可能性がある。

トレンチ東部では長さ約 50㎝、幅約 35㎝の石が立てられた状態で出土した。トレンチの周囲の地表面にも並んだ石の一部が露出していることから、第８地点で検出されたＳＷ 06 と同様の遺構が所在する可能性が高い。立石東側の埋土はトレンチ埋土とは異なり、しまりの弱い砂質土であったことから、水害等によって流された土砂が堆積している可能性がある。

第３項　検出遺構 (Fig. 9 ～ 11)

【ＳＸ 25】

ＳＸ 25 は、第６地点の北半部に所在する岩盤に加工された遺構で、平成 27 年度の調査によってその所在が確認されていた。本年度の調査で岩盤に堆積した土砂を除去した結果、階段状遺構・道状遺構 (ＳＦ 01)・溝状遺構 (ＳＤ 05)・岩窟状遺構 (ＳＸ 27)・柱穴 (ＳＰ 09 ～ 24) などが一体となった遺構であることが判明した。遺構の規模は、検出された範囲では長軸約 17 m、短軸が約 2.8 m、現地表面からの比高は最大で 5.8 mである。以下では、ＳＸ 25 を構成する各遺構について個別に記載する。

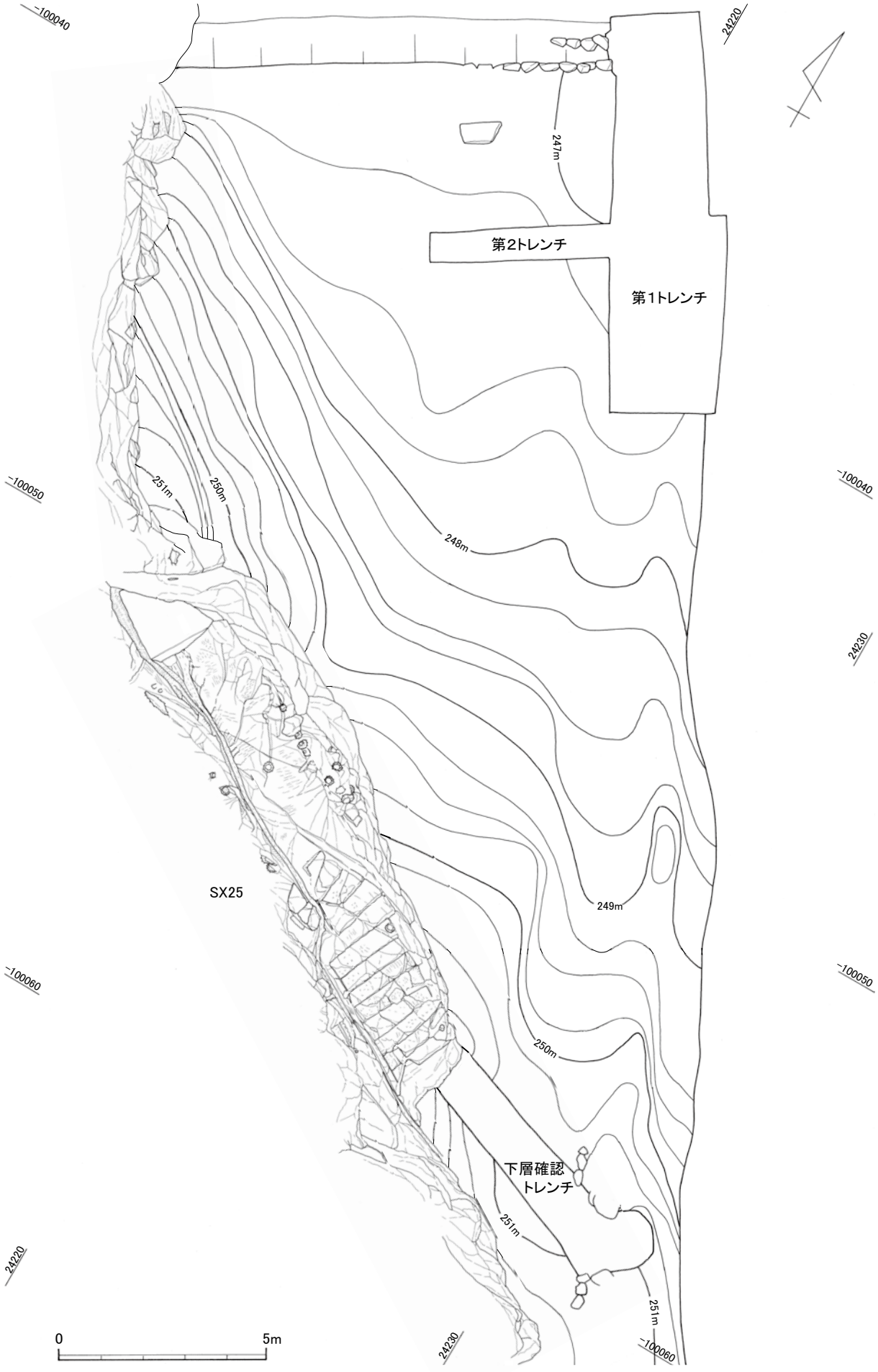


Fig. 8　昆布山谷地区第６地点・第８地点地形測量図 (Ｓ＝１／ 130)

①階段状遺構

階段状遺構はＳＸ 25 の南半部にあり、昆布山谷の道から尾根上へと上るための階段である。昆布山谷地区では、第５・６・７地点で岩盤に加工した階段状遺構が検出されているが、ＳＸ 25 の階段状遺構はこれまでに検出されていたものに比べて非常に大きい。検出された範囲においては長軸で約 9.0 m、短軸で約 2.4 mだが、地下に埋没した部分は全体を検出していないため、さらに範囲が広がる可能性が高い。現地表面から最高部までの比高は 2.5 mで、ＳＸ 25 東側のかつての道路面も含めると 3.0 mである。ステップは 19 段あり、下端部の５段と上端部の３段を除いて形・大きさともに長方形に揃っているが、15 ～ 19 段目は東側の一部が崩落している。また、今回検出された中で最も低い位置にある段はＬ字型になっており、東方向に続くようである。一段あたりの大きさは長軸が約 1.7 m、短軸が 35 ～ 45㎝、一段あたりの高さは約 15 ㎝である。上から６～ 10 段目はステップの東側が岩盤の端部まで至っておらず、側桁階段状になっている。

②道状遺構 (ＳＦ 01)

階段状遺構の上で、勾配が緩やかでステップが加工されていない範囲である。検出された範囲は長さ 7.8 m、幅 1.6 ～ 1.8 mで、北端部が崖状に崩れている。検出した当初は道のつながり方が問題であったが、崩落部よりも北側に道があることや、崩落部の下に柱穴 (ＳＰ 24) があることなどから、本来は橋が架かっていてさらに北側に道がつながっていた可能性がある。

③溝状遺構 (ＳＤ 05)

ＳＤ 05 は階段状遺構と道状遺構 (ＳＦ 01) の西部に位置する遺構で、雨水やＳＸ 25 の西側から流れ込んでくる水などを流すための溝と考えられる。幅は上場が 13 ～ 15㎝で下場が約 11㎝、深さは場所によるが概ね 12㎝で、一部には 20㎝と深い箇所もある。

④段状遺構 (ＳＸ 26)

ＳＸ 25 の西壁沿いで検出された。ＳＸ 26・27 はいずれも、昨年度検出されたＳＸ 23･24 に類似する。階段や道・溝としての機能とは無関係で、実用的な要素はない。加工の範囲は水平方向が 1.2 m、垂直方向が 23㎝である。自然にできた岩盤の窪みを利用しており、台座となる部分が加工されている。段は２段あり、奥側の段には丸彫りの地蔵が２体置かれていることから、信仰に関連する遺構の可能性が高い。また、ＳＸ 25 の埋土からは同様の地蔵が１体と段におかれた地蔵の破片 (Fig.13-40・41) が出土していることから、本来は３体の地蔵が置かれていたと見られる。

⑤岩窟状遺構 (ＳＸ 27)

ＳＸ 27 は階段状遺構上端付近の壁沿いで検出された、岩盤の一部を掘り窪めた岩窟状の遺構である。高さ約 70㎝、幅約 40㎝、奥行 30 ～ 78㎝の範囲が長方形に加工されている。また、奥壁には縦 54㎝、幅 10㎝、深さ約４㎝の長方形の掘り込みがある。機能としてはＳＸ 26 と同様で、実用目的ではなく信仰に関連する遺構と考えられる。

⑥柱穴 (ＳＰ 09 ～ 24)

ＳＸ 25 の階段状遺構、道状遺構、西壁に設けられており、いずれも直径が 15 ～ 25㎝、深さが 20 ～ 30㎝と小さい柱穴である。階段状遺構の東側に設けられたＳＰ 09・10 は検出位置より手すりの痕跡とも考えられるが、ＳＰ 10 よりも北にはうまくつながらないが、ＳＸ 25 の東側が一部崩落していることから、本来は手すりの穴が掘られていた可能性もある。ＳＰ 12 ～ 14 は道状遺構を横断するように並んでいる。ＳＰ 16 ～ 23 は道状遺構東端の南北３mの狭い範囲に８基の柱穴が集中している。直線に並んでおらず、囲いにもなっていないことから、どのように利用されていたのかは検討を要するが、一度にまとめて掘られたのではなく、何らかの必要に応じてしだいに増えていった可能性もある。ＳＰ 24 はＳＸ 25 の北端部で、崖状に落ち込んだ箇所に掘られており、ＳＰ 09 ～ 23 に比べて一回り大きい。ＳＸ 25 より北方向には崖状の落ち込みを挟んで道が続いていることから、元々は道と道をつなぐ橋が架けられており、ＳＰ 24 には橋脚が立っていた可能性もある。

第４項　出土遺物 (Fig.13、Tab.3)

【陶磁器類・瓦】

34 は端反の坏で、青花の可能性がある。口縁部の内外に圏線があるほか、外面に植物の文様がある。35 は唐津の碗で、外面に鉄絵の文様がある。36 は肥前磁器の徳利で、体部中央と高台の外面にそれぞれ圏線があり、体部には草花文がある。頸部はなくなって

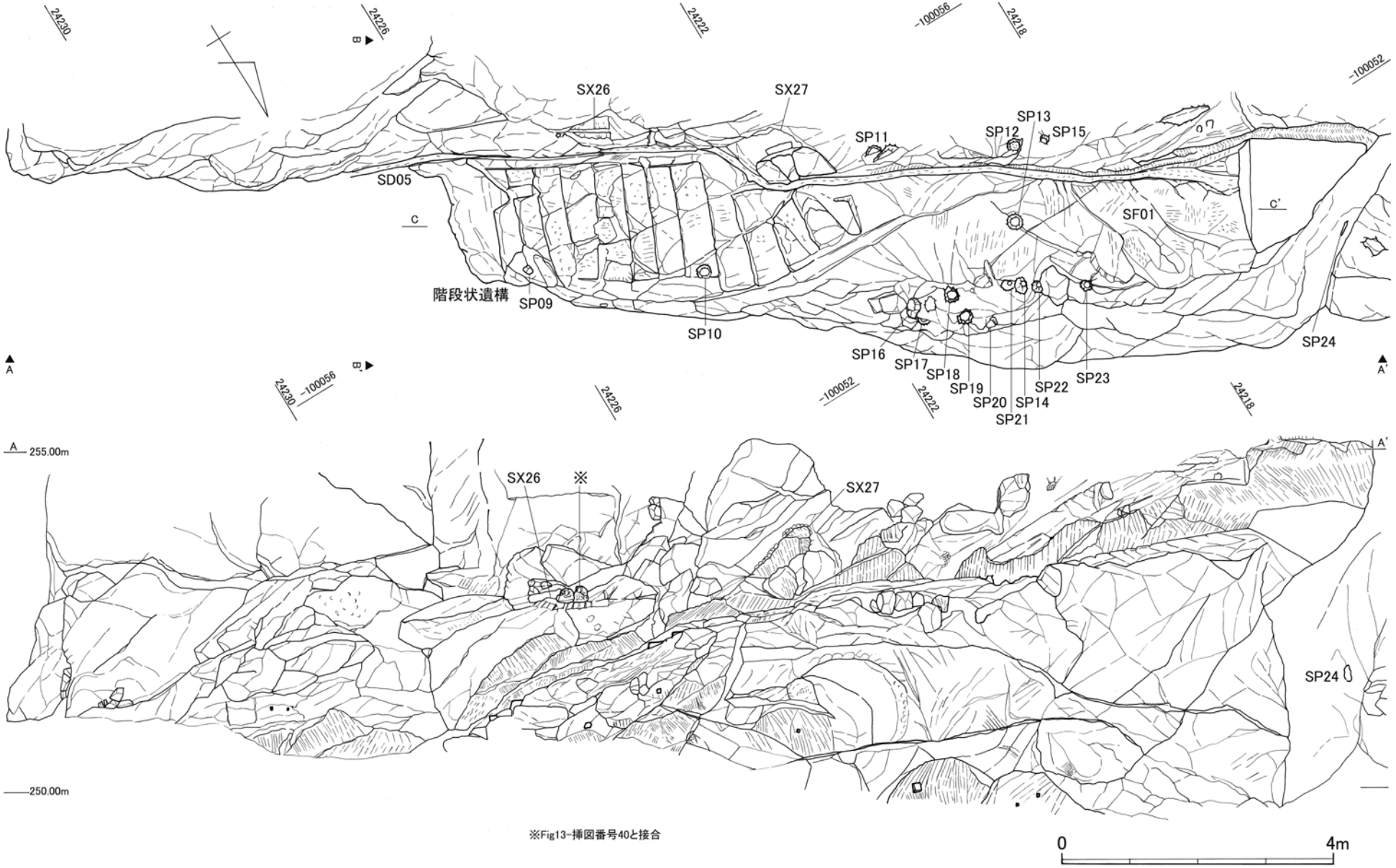


Fig. 9　昆布山谷地区第６地点検出遺構平面図・立面図（Ｓ＝１／80)

いるが、本来は長い鶴首がつくとみられる。37 は石見系陶器の灯明皿である。38 は燻瓦で、瓦頭に均整唐草文と「大」のスタンプがある。また、背部には釘穴が２つある。

【石造物】

石造物としては地蔵が４体分確認された。確認された４体の内、１体が浮き彫り、３体が丸彫りである。いずれもＳＸ 25 の周辺で出土したが、丸彫りの地蔵の内２体は段状遺構 (ＳＸ 26) の中に納まっていたため、取上げなかった。浮き彫りの地蔵は白色砂岩製、丸彫りの地蔵は全て緑色凝灰岩 (福光石) 製である。

39 は浮き彫りの地蔵で、胸部から上が彫り込まれている。側面は上下左右とも研磨されて平らになっているが、四隅を鑿で彫り込んで隅丸方形になっている。裏面には文字のような彫り込みがある。40・41 は丸彫りの坐像である。１は首が欠損しているが、それ以外は良好に残っている。ＳＸ 26 に納まっていた２体も１と同様に首が欠失しており、何らかの事由によって破壊された可能性も考えられる。本来はＳＸ 26 の中に置かれていた可能性が高い。40 は蓮華座部分のみだが、ＳＸ 26 に置かれたものと接合したため、何らかの理由で破損したのちに埋没したとみられる。

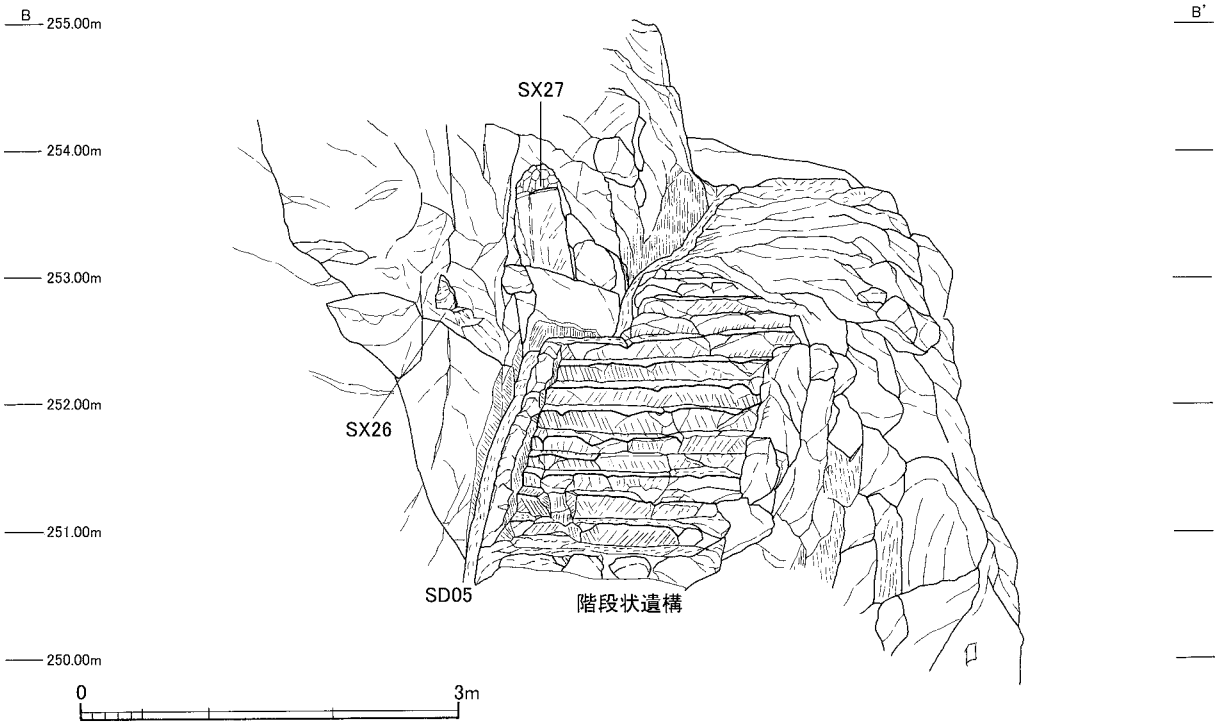


Fig.10　昆布山谷地区第６地点検出遺構立面図 (Ｓ＝１／ 60)

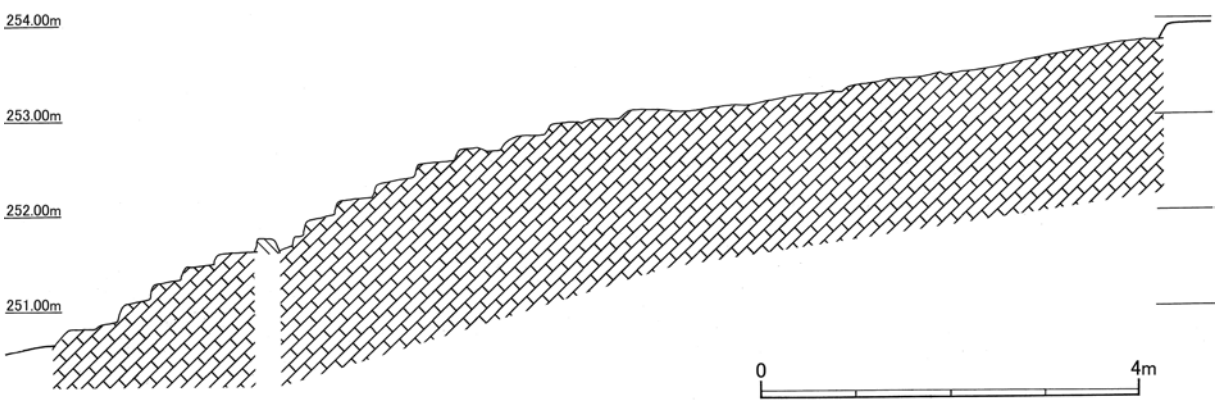


Fig.11　昆布山谷地区第６地点検出遺構断面図 (Ｓ＝１／ 80)

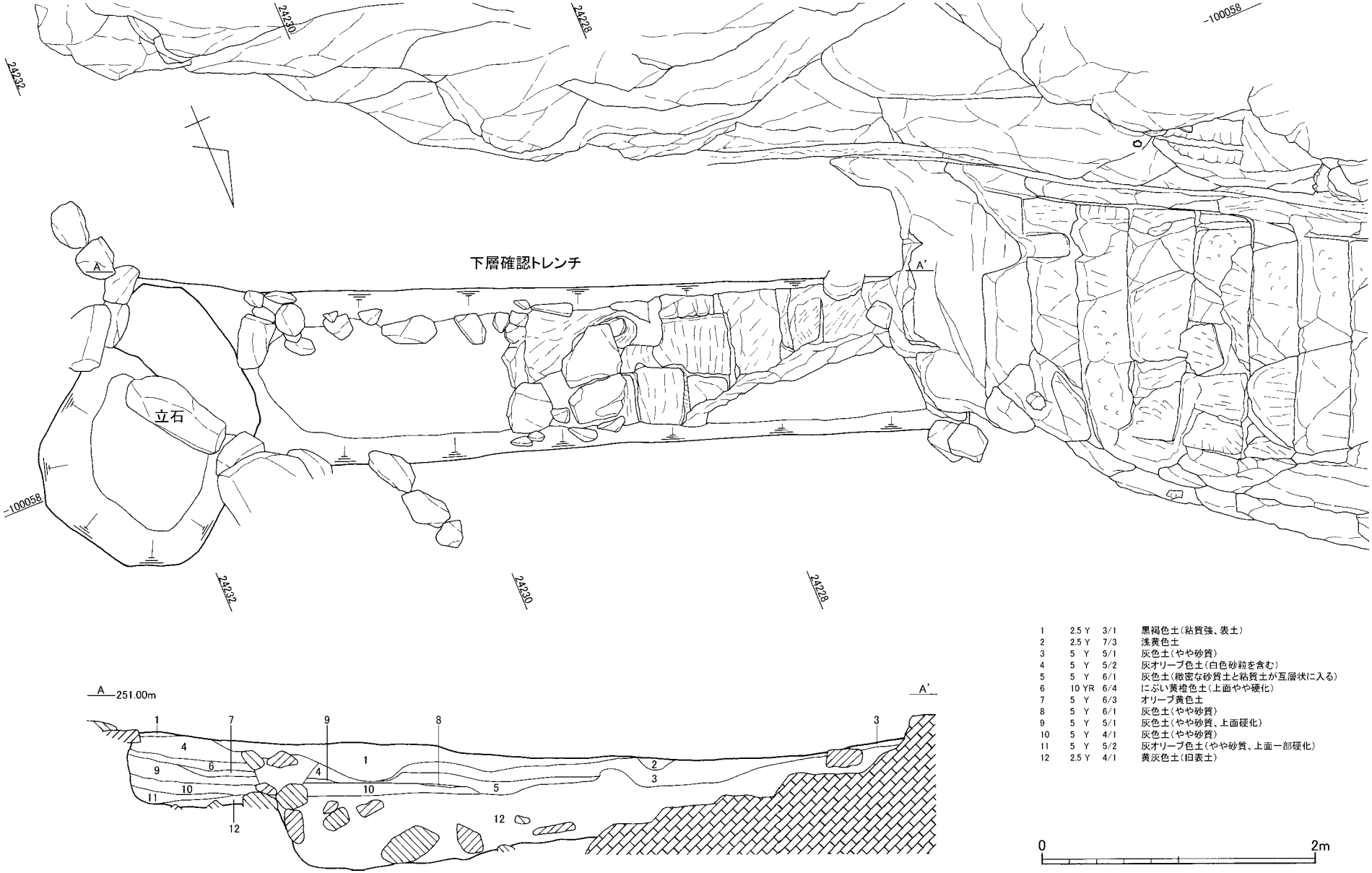


Fig.12　昆布山谷地区第６地点トレンチ平面図・断面図（Ｓ＝１／40)

第５節　第８地点

第１項　調査の概要

第８地点は本年度より新たに設定した調査地点である。第２節でも触れたように、豪雨によって遺構が露出した箇所を中心にトレンチを設定して調査を行なった。調査によって石垣遺構ＳＷ06が検出され、道と平坦面との区割りの様相が窺われる資料が得られた。

第２項　層序 (Fig.15)

調査開始当初は、現地表面の直下でかつての道が検出されると想定していたが、調査深度は最大で２ｍを超えるなど、予想に反して調査量は膨大なものとなった。埋土はほとんどが水害などで流入した土砂とみられ、石垣が構築されてから今日に至るまでに水害が何度も発生していたようである。また、近代には水害によって埋まった箇所を道として利用していたことも確認された。発掘調査によって硬化面は５面確認されたが、埋土からは近代の遺物が出土していることから、その多くが近代以降に堆積したと判断される。

第１面は９層上面である。９層は上面が硬化しており、道路面として機能していた時期があると想定される。ただし、９層はトレンチの南端部で一部が確認されたのみで、ほとんどは後世の水害によって流されてしまっている。

第２面は11層上面である。上面が硬化しており、道路面として機能していた時期もあると想定される。９層と同じくトレンチ南端部に一部が残存しているのみで、ほとんどは水害等によって流失している。

第３面は20層・22層の上面である。20層と22層の間には巨大な石があるため分層したが、本来は同一の堆積層であった可能性も考慮される。いずれも上面が硬化しており、道路として利用されていたことが想定されるが、南半部は第４面である23層と一続きになっている。これは23層が道路面として機能していた頃に発生した水害による土砂が一部残存し、その上面を道路として利用していたためと推測される。

第４面は23層上面で、上面の硬化した整地面である。整地層内からは江戸時代の遺物が出土している。

第５面は23層下面で、ＳＷ06の構築面である。一部に平坦な石が敷いてあることから、本来は石敷きの道路であった可能性もある。第５面上面では18世紀後半に比定できる陶磁器類 (Fig.18-46) が出土したことから、江戸時代後半には道として整備されており、ＳＷ06も構築されていたと考えられる。

近代以降に堆積したとみられる23層よりも上層には、水害による土砂が分厚く堆積しているが、江戸時代に機能していた面にはほとんど水害痕跡が認められないことから、江戸時代においては災害後に復旧が行われていたが、近代以降には十分な復旧が行われなくなった可能性がある。

第３項　検出遺構

【ＳＷ06】(Fig.16)

ＳＷ06は第８地点の山道沿いで検出された石垣遺構で、石垣の隅角部を境として北半をＳＷ06-①、南半をＳＷ06-②とする。本来は道と平坦面を区画していた石垣と考えられるが、主に近代以降に発生した水害等によって完全に埋まっており、一部に天端石が見える程度であった。前述のように、平成28年７月３日に発生した豪雨によって山道の土砂が流されたことによって地表面上に一部が露出し、その存在が明らかとなった。本年度発掘調査を実施した範囲は、第８地点に設定した東西約2.5ｍ、南北約9.5ｍであるが、昆布山谷の谷筋には、石垣の一部が露出している箇所がいくつか確認できており、本来は昆布山谷の広い範囲に石垣があったと想定される。確認できた範囲では長さ約7.9ｍ、幅約1.5ｍ、高さは最大で1.9ｍ程度の規模であったが、最上部の石が一部なくなっていることから、本来の高さは最大で2.2ｍ程度であったとみられる。

ＳＷ06-①の積み方は、切込接ぎ風の乱積みだが、基底部は石の加工や積み方が丁寧である。積み上げられた石は一辺が40～60㎝程度のものが多く、隙間に10～20㎝程度のやや小ぶりな石を詰めている。石の表面には工具の痕跡があり、大きさ・形を揃え、表面を平滑にする意図が認められる。石垣の東側には階段を一連で付けており、道から平坦面へ上がる目的とみられる。階段のステップは４段が残っているが、最上段では壁面に裏込め石が露出していることから、本来は５段であったと推察される。一段あたりの高さは約24㎝だが、道からつながる一段目は約40㎝と高くなっている。ステップの広さは一段目が東西40㎝、

南北 54㎝、二段目が東西 50㎝、南北 36㎝、三段目が東西 60㎝、南北 44㎝、五段目が東西 60㎝、南北 50㎝程度となっており、上の段ほど石垣の反りに合わせて東西幅が大きくなっている。

ＳＷ 06-②は、石と石の接ぎ目に隙間がほとんどなく、精緻に積み上げられている。北端部の隅石は算木積みで、面は切込み接ぎで石を多角形に加工している。特徴的な加工としては、算木積みされる石の形に合わせて鍵形に加工された積み石がある。このような加工は大森地内では城上神社でみられ、技術的な系譜が想定される。ＳＷ 06-②の下部では土壁の基礎である竹製の木舞が出土しており、昆布山谷の平坦面には

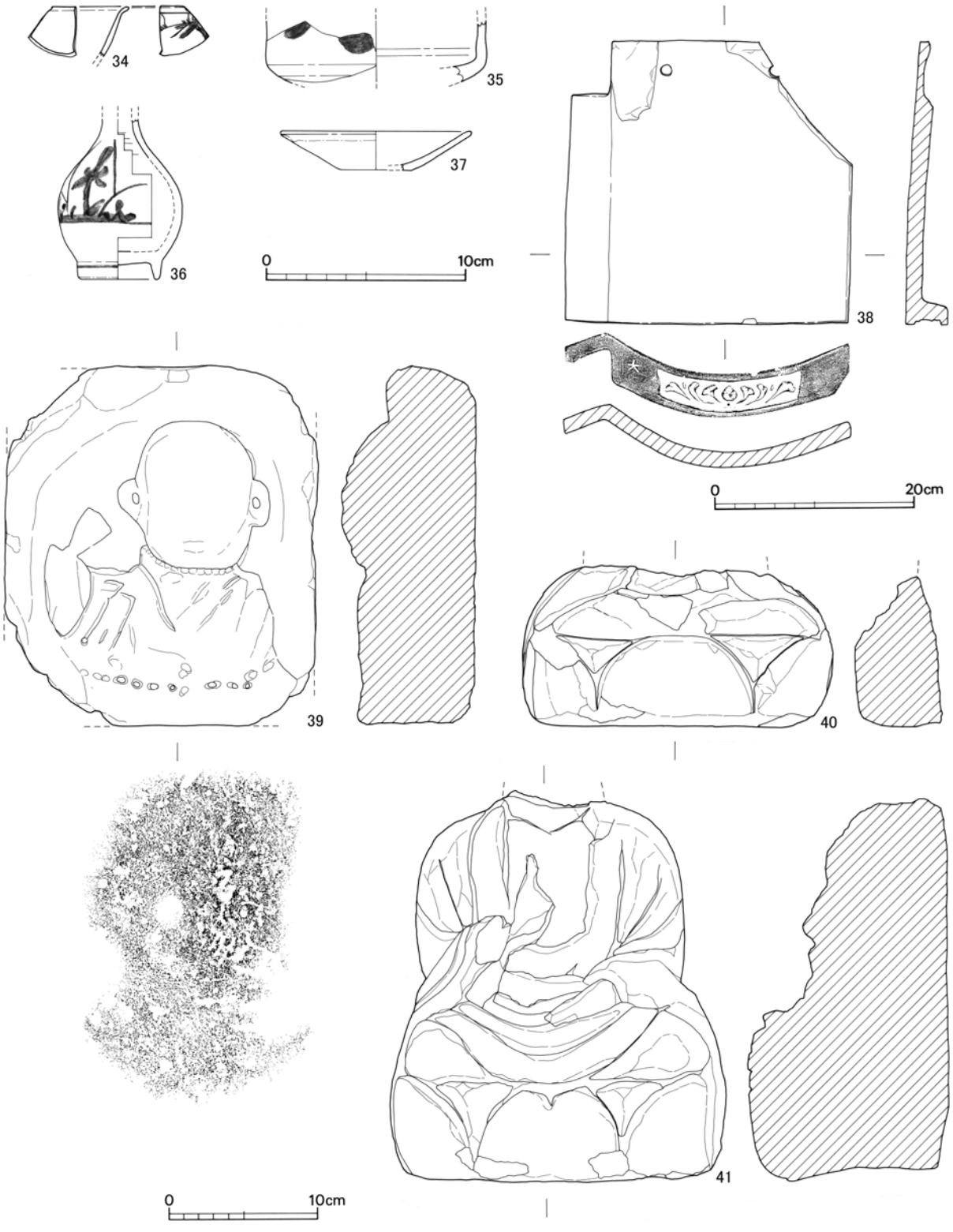


Fig.13　昆布山谷地区第６地点出土遺物実測図（Ｓ＝１／３、１／４、１／６）

かつて土壁を持つ建物があったと考えられる。基底部では平らな石をかませており、沈み込みを防ぐ目的とみられる。また、ＳＷ06-②南部の平坦面上には礎石とみられる平らな石が１基検出されており、平坦面上にあった建物の痕跡と見られる。

ＳＷ06-①とＳＷ06-②は石の積み方や構造が異なっていることに加えて、石垣に切合い関係が認められることから、検出された当初は築造に時期差がある

Tab. 3　昆布山谷地区第６地点出土遺物一覧表

挿図番号	出土地点	種　別	器　種	大きさ (cm)			色　調	成形・調整・文様	備　考
				口径	器高	底径			
34	表土	青花	小坏		(2.5)		透明釉		
35	表土	唐津	碗		(3.1)		長石釉	鉄絵	
36	ＣＳ－５	肥前磁器	瓶		(8.1)	(3.7)	(外) 透明釉		
37	ＣＳ－２・ＣＳ－３	石見系陶器	灯明皿？	(9.4)	2.0	(3.6)	長石釉		
挿図番号	出土地点	種　別	器　種	大きさ (cm)			重量 (g)	色　調	備　考
				現存長	現存幅	現存厚			
38	表採	瓦	軒瓦	28.6	28.8	6.4	2320	暗灰色	
39	表土	石製品	地蔵	24.0	20.8	9.0	5420	灰白色	
40	表土	石製品	地蔵	10.8	20.8	6.0	1690	灰色	
41	表土	石製品	地蔵	26.4	22.5	13.5	8850	灰色	

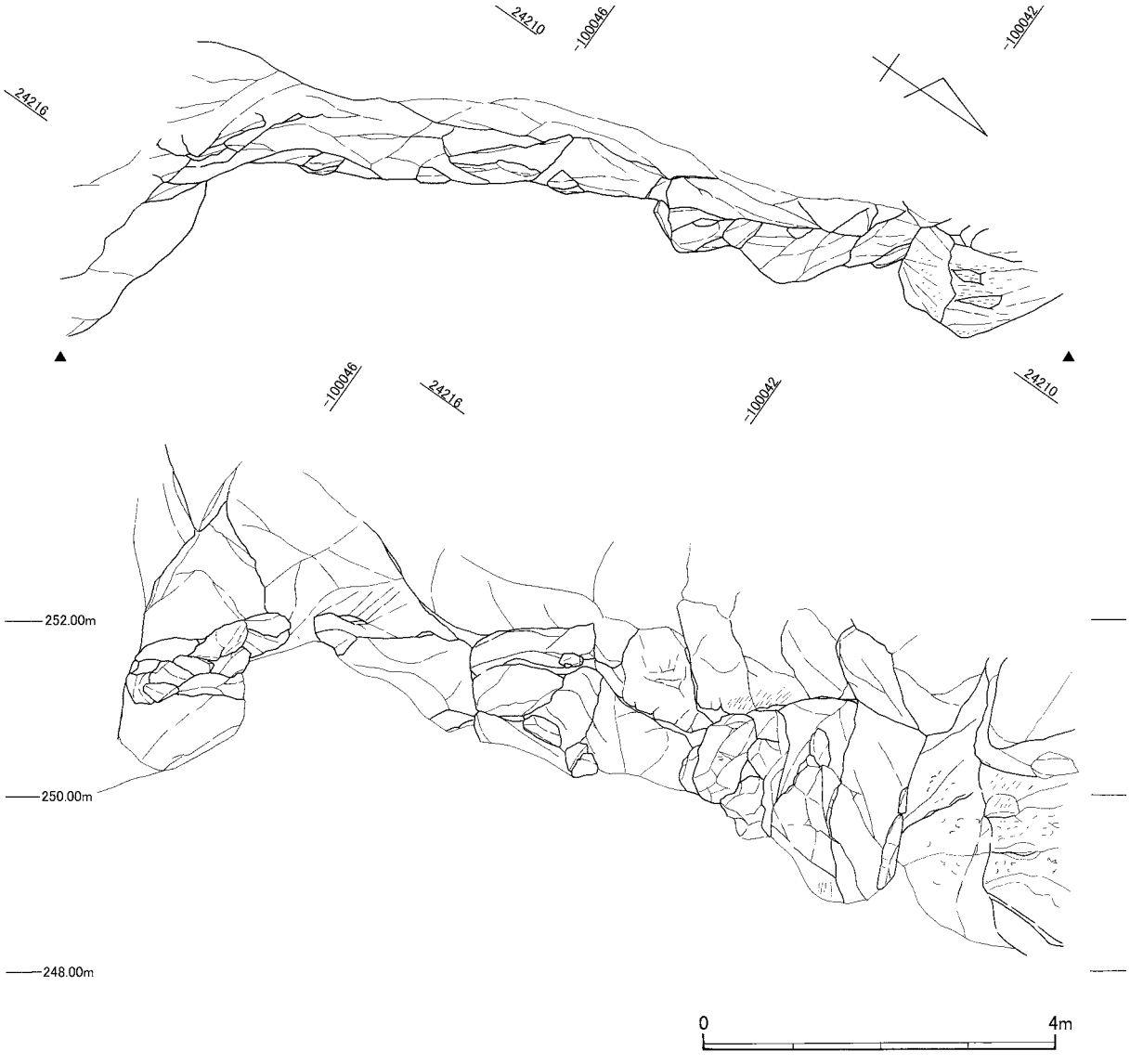
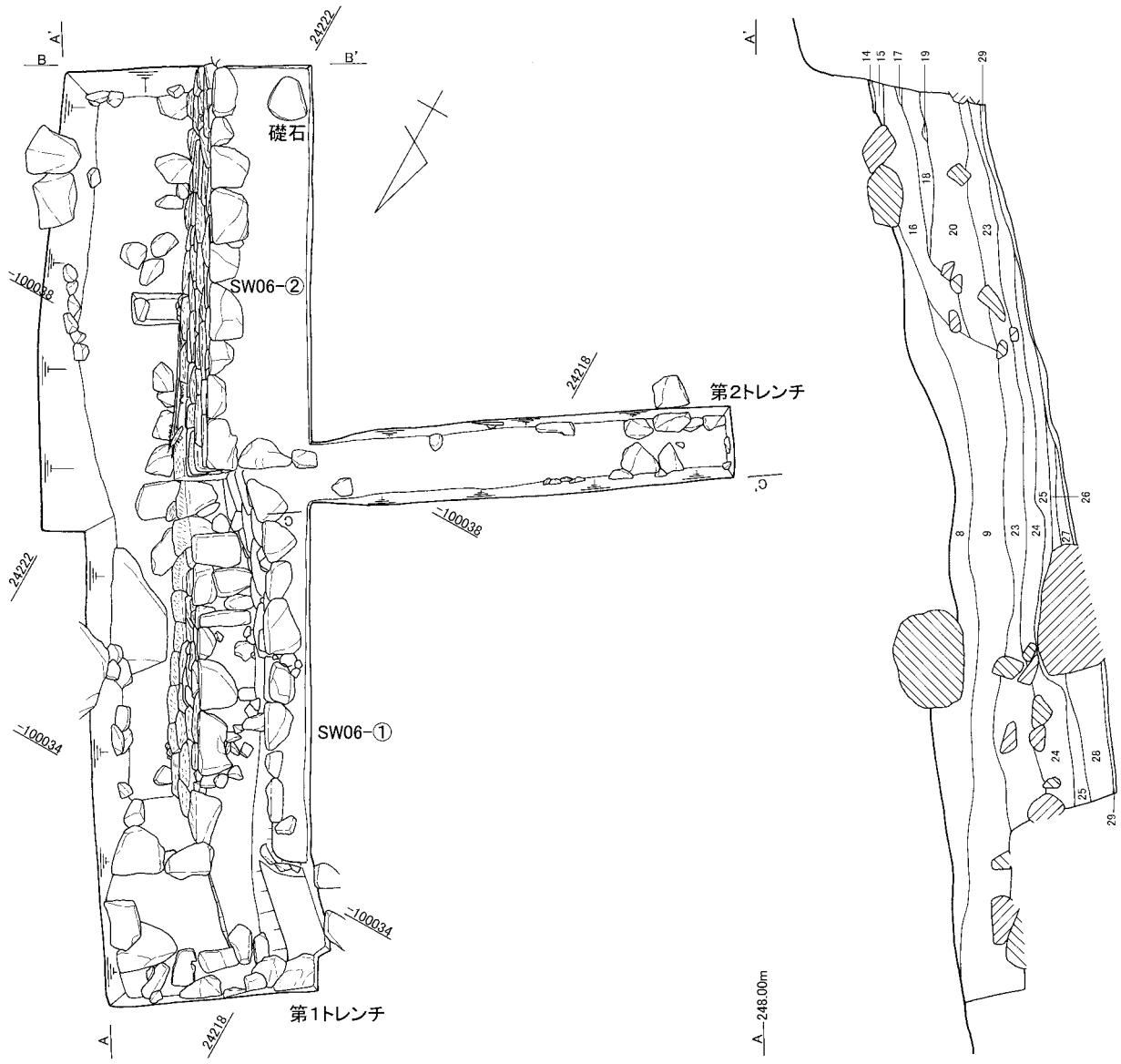


Fig.14　昆布山谷地区第８地点岩盤平面図・断面図 (Ｓ＝１／80)



1	10 YR	1.7/1	黒色土（表土）
2	10 YR	3/2	黒褐色土（しまりない）
3	2.5 YR	4/2	暗灰黄色土
4	10 YR	6/6	明黄褐色土（粘質、整地層か？）
5	2.5 Y	7/6	明黄褐色土（粘質、整地層か？）
6	2.5 Y	5/2	暗灰黄色土（やや砂質で、礫を多く含む）
7	10 YR	3/1	黒褐色土（1～2センチ大の小礫を多く含む）
8	7.5 YR	2/1	黒色土（しまりのない土、1～2センチ大の小礫を少し含む）
9	2.5 Y	4/2	暗灰黄色土（やや砂質、2センチ大の小礫を多く含む、洪水層）
10	2.5 Y	6/3	にぶい黄色土（やや砂質、1センチ大の小礫を含む）
11	2.5 Y	6/2	灰黄色土（ややシルト質、均一）
12	2.5 Y	7/4	浅黄色土（粘質で、一部マンガンを含む）
13	2.5 Y	5/2	暗灰黄色土（やや目の粗い砂質土、洪水層か？）
14	2.5 Y	6/4	にぶい黄色土（緻密な砂質土）
15	5 Y	5/1	灰色土（砂質土で上面硬化、一時期道路面として機能か？）
16	10 YR	4/1	褐灰色土（ややしまっている）
17	10 YR	6/4	にぶい黄橙色土（粘質、上面硬化、一時期道路面か？）
18	5 Y	4/2	灰オリーブ色土（やや目の粗い砂質土）
19	2.5 Y	7/4	浅黄色土（粘性の強い粘質土）
20	2.5 Y	5/3	黄褐色土（しまりがあり、やや粘質）
21	2.5 Y	5/2	暗灰黄色土（やや粘質）
22	2.5 Y	4/2	暗灰黄色土（固くしまる）
23	2.5 Y	5/2	暗灰黄色土（粘性の強い粘質土）
24	2.5 Y	6/3	にぶい黄色土（粘性の強い粘質土）
25	2.5 Y	7/3	浅黄色土（粘性の強い粘質土）
26	5 Y	5/1	灰色土（粘性が強く上面やや硬化、木簡検出面）
27	5 Y	6/2	灰オリーブ色土（粘性がやや強い粘質土）
28	5 Y	6/3	灰オリーブ黄色土（やや粘質、上面硬化）
29	10 YR	4/2	灰黄褐色土（小礫を含み上面硬化、整地面か？）

0 2m

Fig.15　昆布山谷地区第８地点トレンチ平面図・土層断面図（Ｓ＝１／70）

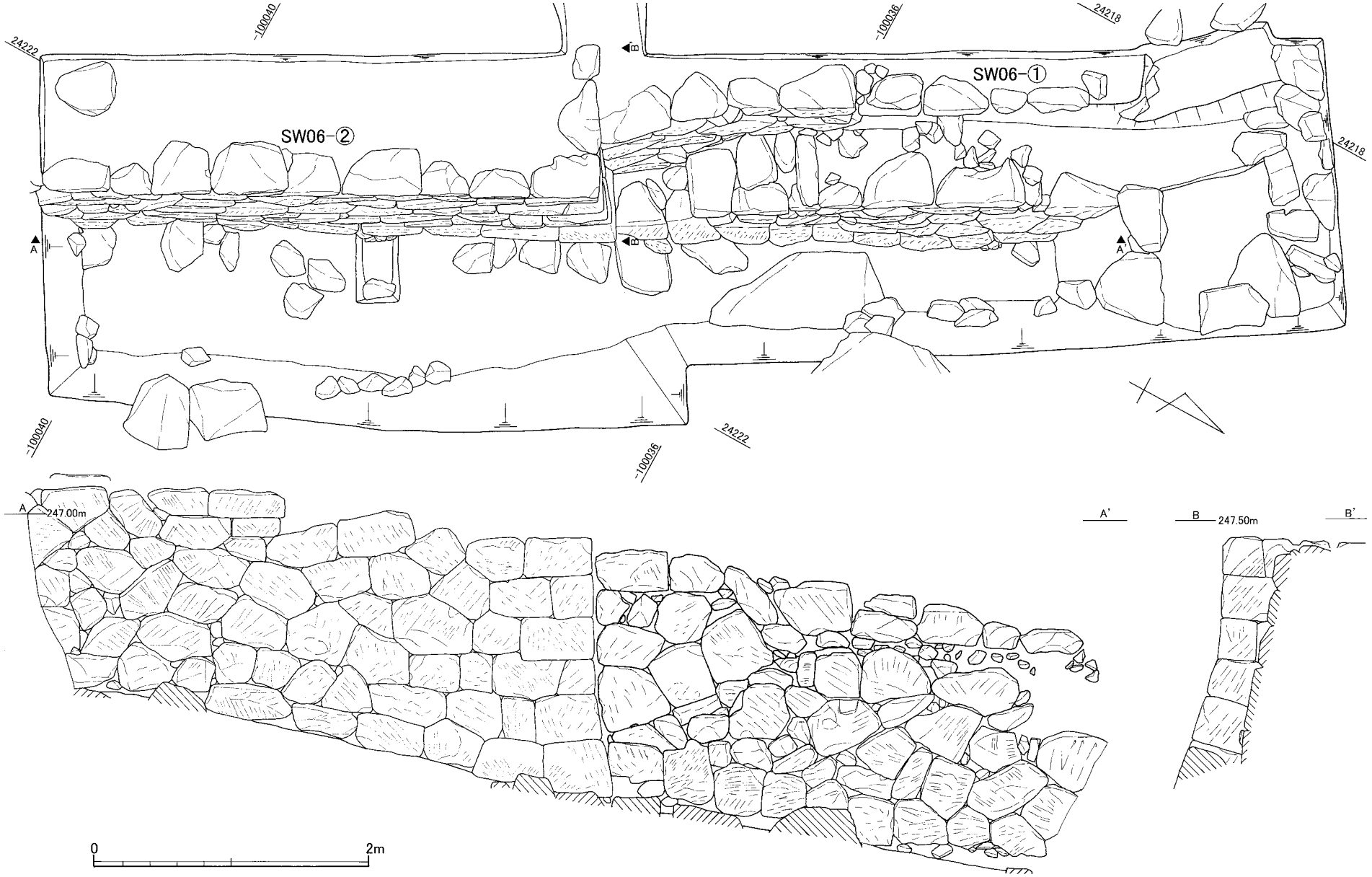


Fig.16　昆布山谷地区第８地点ＳＷ 06 平面・立面図 (Ｓ＝１／ 40)

ものと認識していた。しかし、北半と南半で石垣の面が揃っていることや、８区の東西方向に設定した第２トレンチではＳＷ06の続きがほとんど検出されず、ＳＷ06-①が構築される前にＳＷ06-②による土地区画が行われてはいなかったなどの理由から、ＳＷ06-①とＳＷ06-②は構築された順番による前後関係はあるものの、ほぼ同時期に構築されたと考えられる。

第８地点で出土した遺物は多くが近代に比定でき、江戸時代の資料は最下部から18世紀後半の肥前磁器などが多少出土した程度であった。そのため、ＳＷ06は江戸時代の後半には構築されており、幕末までは災害等があったとしても復旧して使用していたが、近代に入ると災害後の復旧は限定的となり、最終的には現在の地表面まで埋没してしまったと考えられる。

第４項　出土遺物

【陶磁器類】(Fig.18、Tab.4)

43は肥前磁器の皿である。高台の畳付けが釉剥ぎされ、砂粒が付着している。44は肥前系の瓶である。45・46はトレンチの底部から出土した資料で、45は唐津の香炉である。46は肥前磁器の外青磁の碗で、内面口縁部に四方襷文がある。43は17世紀中頃から後半頃の古い資料だが、最下部からは18世紀後半とみられる46が出土していることから、江戸後期までは最下面が道として機能していたと考えられる。

42・47～53は表土から出土した。42は石見焼の鉢である。47は青花の皿である。48は肥前磁器の碗で、口縁内部に雷文帯が、外面には植物の文様がある。49は肥前磁器の蓋物である。本来は合子や小壺のようなものと見られるが、小片のため器形の復元が難しい。外面に鳥の文様がある。50は肥前磁器で、陶胎染付の碗である。51は唐津系とみられる小碗で、外面の銅緑釉が口縁の内部まで及んでいる。52は石見系陶器の瓶である。53は唐津系の鉢で、内外とも藁灰釉で白色の器体に銅緑釉を流しかけている。

【木舞】(Fig.17)

ＳＷ06-②沿いの、第25層上面から出土した。幅約３㎝に割られた竹を縦横にして組まれた状態で出土した。割竹の表面には波状に変色した部分があり、縄などで縛っていた痕跡とみられる。割竹は最大で長さ145㎝だが、片側が破損していることから本来はもっと長かったとみられる。竹の周りには粘土が多く堆積しており、土壁の痕跡の可能性がある。

平坦面上の建物が崩落した後に埋没したと考えられる。出土層位より、明治時代に崩落したとみられるが、

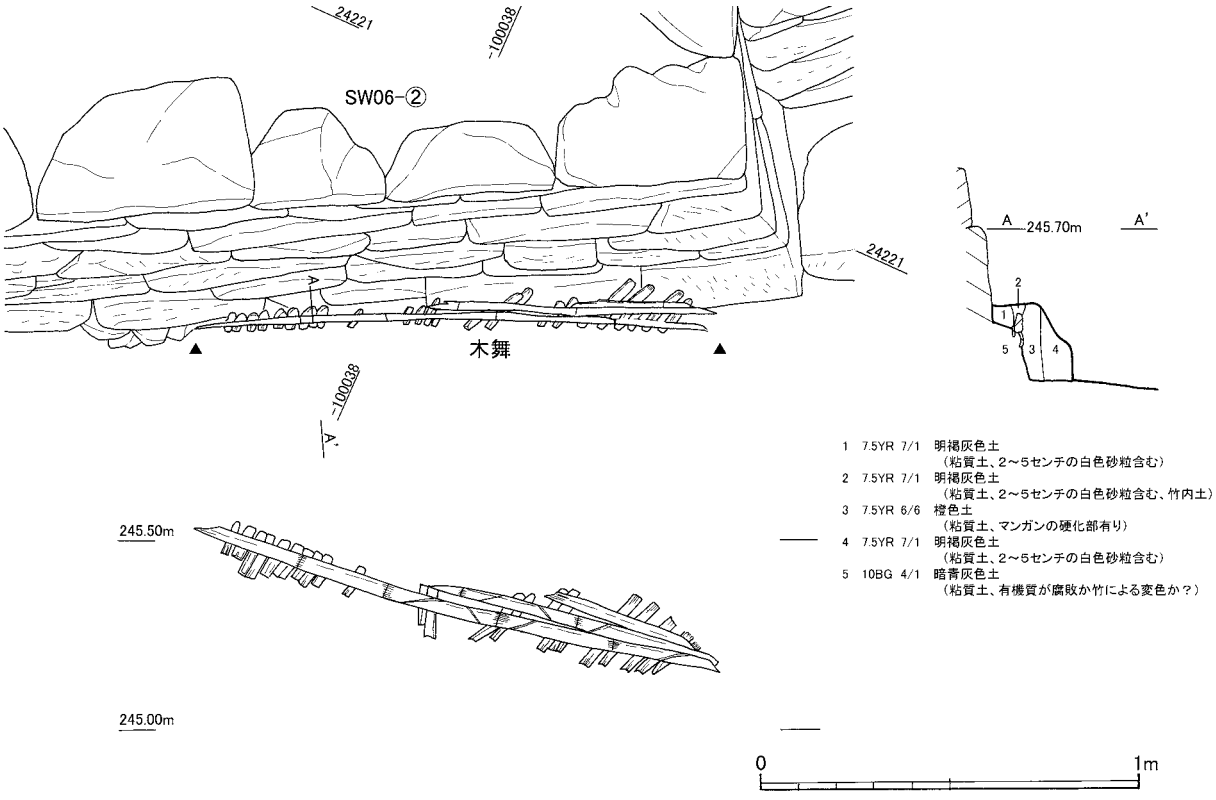


Fig.17　昆布山谷地区第８地点出土木舞平面・立面・土層断面図（Ｓ＝１／20)

建物として利用されていた時期は江戸時代の終わり頃とみられる。本資料の出土により、第８地点の平坦面には土壁を持つ建物があったことが想定でき、昆布山谷の景観を復元する上で非常に重要な資料といえる。なお、石見銀山遺跡での木舞の出土は３例目で、これまでに石銀藤田地区と宮の前地区で出土している。

第６節　小結

本年度は第５・６・８地点の発掘調査を実施した。調査成果としては、①第５地点Ｉ区の利用方法の変遷や、形成の過程が明らかとなったこと、②第６地点において岩盤加工遺構ＳＸ 25 が検出されたこと、③第８地点では道と平坦面を区画する石垣ＳＷ 06 が検出されたことなどが挙げられる。

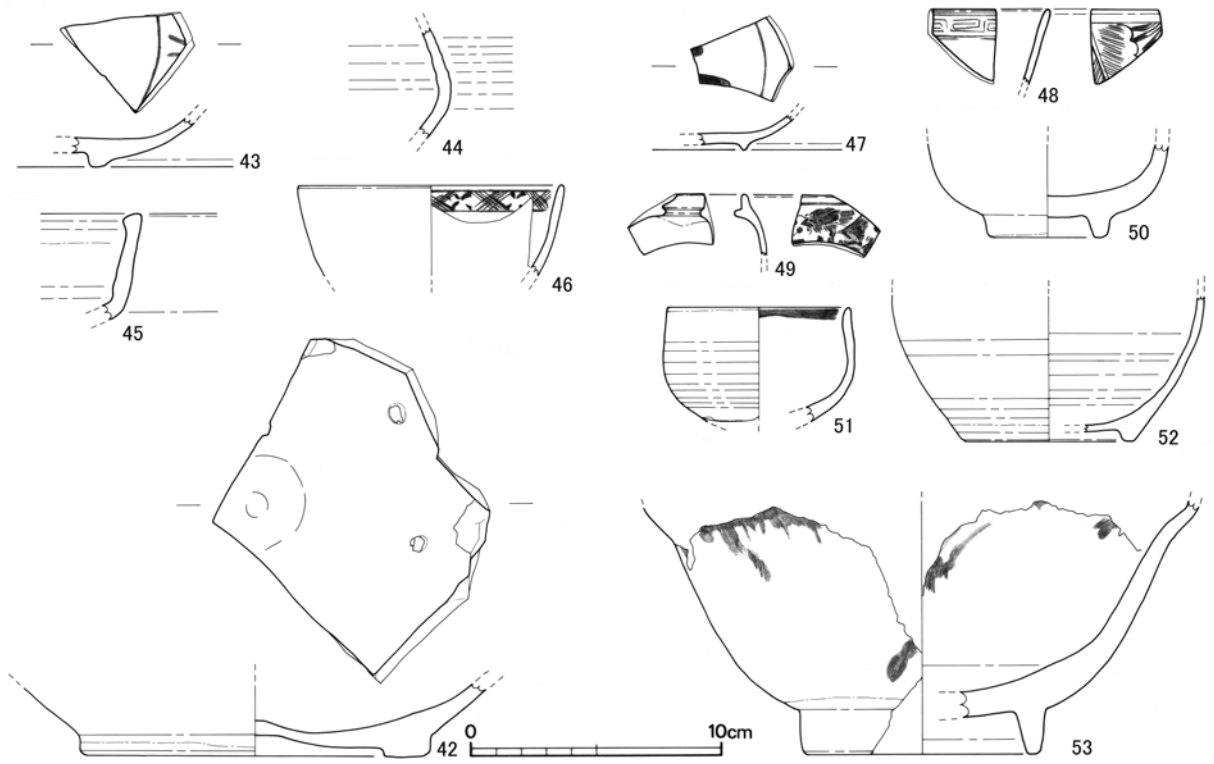


Fig.18　昆布山谷地区第８地点出土遺物実測図（Ｓ＝１／３）

Tab. 4　昆布山谷地区第８地点出土遺物一覧表

挿図番号	出土地点	種　別	器　種	大きさ (cm)			色　調	成形・調整・文様	備　考
				口径	器高	底径			
42	表土	石見焼	鉢		(2.9)	(13.4)	長石釉	胎土目	
43	ＭＴ－２	肥前磁器	皿		(1.9)		透明釉		
44	ＭＴ－６	肥前系磁器	瓶		(4.5)		灰釉		
45	ＭＴ－７	唐津	香炉？		(4.3)		灰釉		
46	ＭＴ－ 11	肥前磁器	碗	(10.4)	(3.6)		(内) 透明釉 (外) 青磁釉	四方襷文	外青磁
47	南半拡張部表土	青花	皿		(1.4)		透明釉		
48	南半拡張部表土	肥前磁器	碗		(3.0)		透明釉	雷文	
49	南半拡張部表土	肥前磁器	蓋物？		(2.4)		透明釉		
50	南半拡張部表土	肥前磁器	碗		(3.8)	4.2	灰釉		
51	南半拡張部表土	唐津系	小碗	(7.2)	(4.6)		銅緑釉 灰釉		
52	南半拡張部表土	石見系陶器	瓶		(5.8)	(6.6)	長石釉		
53	南半拡張部表土	唐津系	鉢		(9.9)	(8.9)	藁灰釉 銅緑釉		

第３章　宗岡家地点の調査

第１節　調査の概要

第１項　宗岡家の概要

宗岡家地点は大森の町並みでも南方に当たる駒の足地区にあって、表通りに西面する。宗岡家は江戸初期の銀山役人を代表する一人である宗岡弥右衛門を初代として、代々組頭を務めた家系であるが、６代目の宗岡喜三兵衛が寛政２(1790) 年に銀山附役人を罷免されて一度大森を離れている。

現在の宗岡家住宅は、宗岡家の８代目宗岡長蔵が文政６(1823) 年に同心として再雇用されて川本村 (現在の邑智郡川本町) から大森に戻ってきた以降に、阿部半蔵より購入して居住していた住居である。1850 年頃に作成された可能性がある家相図が残っており、この頃に改修が行われて現在の姿になったと想定される。宗岡家住宅には昭和 40 年代まで居住していたが、平成 16(2004) 年に大田市に寄付された。主屋が道路より控えた位置に建てられるという、武家屋敷の典型的な構造をしており、建物自体も古相をよく残していることから、大田市の指定文化財となっている。

第２項　発掘調査の経過と成果 (Fig.20・21)

宗岡家地点においては、平成 18(2006) 年に表通りに面した空地の発掘調査を実施し、庭の施設とみられる遺構が検出されたほか、下層では 17 世紀初頭の遺物包含層及び遺構が確認された。平成 26(2014) 年度からは、宗岡家住宅の活用を目的とした保存修理事業にあたって、建物の保存修理に必要な情報を得ることを目的とした発掘調査を継続して実施しており、本年度はその３年目である。

平成 26 年度の発掘調査では敷地の東半部の発掘調査を実施し、家相図に記載があるものの現在は残っていない建物の基礎 (ＳＢ 01) や、露地や石列などの庭に関連する施設の跡 (ＳＸ 04・05)、宗岡家が建てられる前に利用されていた水溜状の遺構 (ＳＸ 03) が検出された。ＳＸ 03 は遺構内の土壌の科学分析によって、便槽やゴミ穴として利用されていた可能性が提示されている。また、調査区内に設定した下層確認トレンチにより、宗岡家を建てる際に造成が行なわれ、それ以前は河川の自然堆積によって地形が形成されていたことが確認された。

平成 27(2015) 年度の調査では主屋と離れに面した庭の調査を行なった。宗岡家の構築面からは明確な遺構が検出されなかったものの、調査区中央部に設定した下層確認トレンチでは江戸時代初期頃の土地区割に関わる可能性のある遺構ＳＷ 02 が検出され、江戸期における地割の変遷を考える上で重要な資料が得られた。また、現在の地表面に至るまでに複数の硬化面が確認できたことから、江戸期を通じて造成や整地が頻繁に行なわれていたことが明らかとなった。

第３項　平成 28 年度の発掘調査の概要 (Fig.22)

主屋の床下 (Ⅵ区) と土間 (Ⅶ区) を対象として発掘調査を実施した。Ⅵ区では、平成 27 年度の工事で床がなくなった段階で、現存建物とは関係のない礎石が床下にあることが確認されており、現存建物よりも古い建物の痕跡と想定されていた。そのため、建物の位置と規模を確認することと、関連する遺構の検出を目的として調査を実施した。Ⅶ区においては、カマドなど宗岡家住宅の設備に関する遺構を検出することを目的とした。

発掘調査ではⅥ・Ⅶ区に合計 12 本のトレンチを設定して掘り下げを行なった。トレンチ幅は 30㎝を基本としたが、遺構の検出状況に応じて適宜拡張した。また、発掘調査終了後に保存修理工事の過程において、地表面の掘削を伴う現状変更行為が２回発生したためそれぞれ立会調査を実施した。調査箇所は宗岡家の敷地の東端部と、宗岡家北側の大音寺小路沿いである。なお、宗岡家東部の掘削は浄化槽埋設に伴うため、以下では浄化槽トレンチとする。

発掘調査によって、Ⅵ区とⅦ区の一部では宗岡家住宅よりも古い建物遺構ＳＢ 03 が検出され、Ⅶ区では大カマドや石敷き遺構、溝遺構などの宗岡家の設備に関連する遺構が検出された。

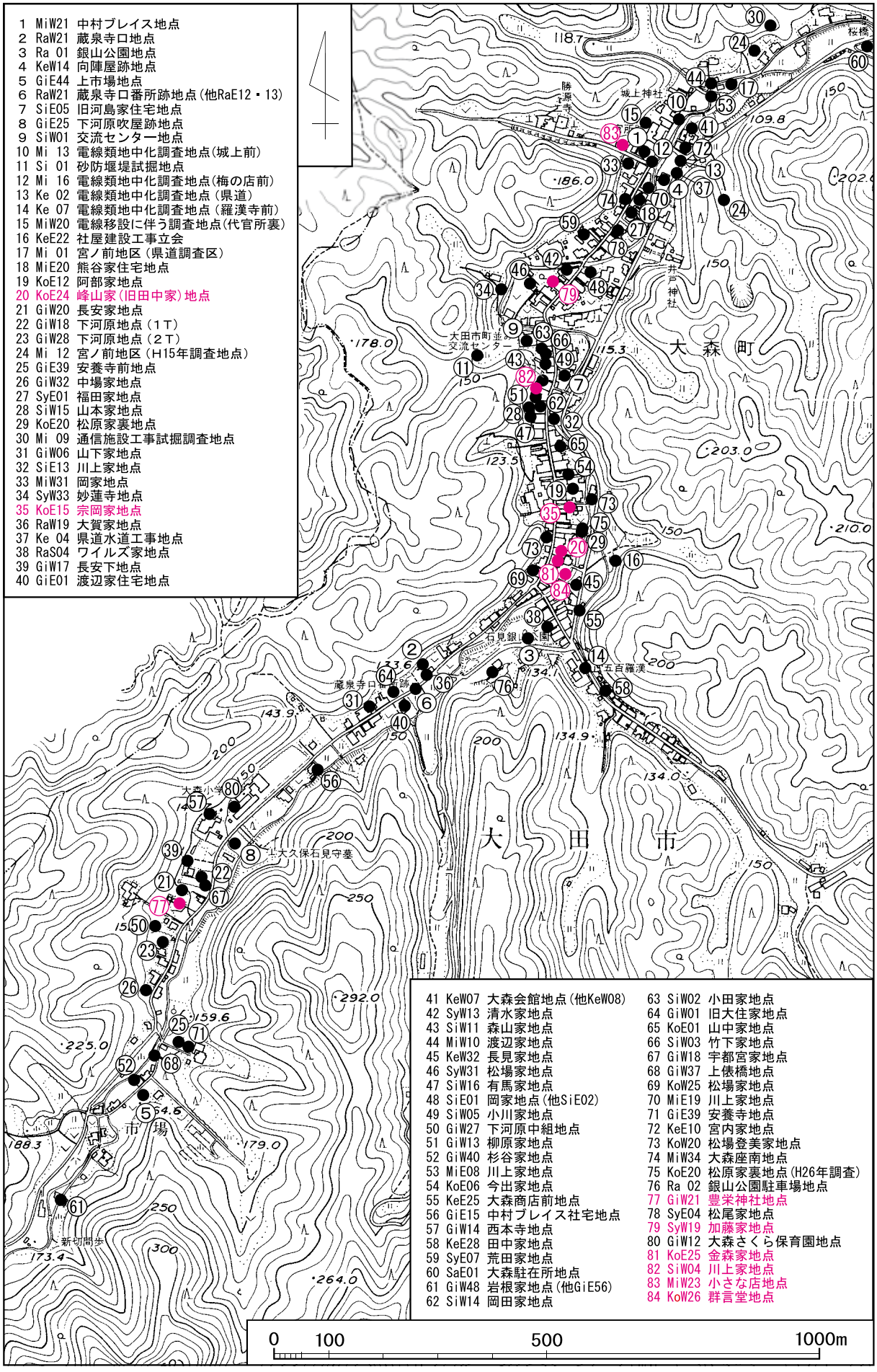


Fig.19　大森銀山伝建地区内調査・試掘・立会地点(S＝1／10,000)

Fig.20　宗岡家地点調査区配置図 (S＝1／1,000)

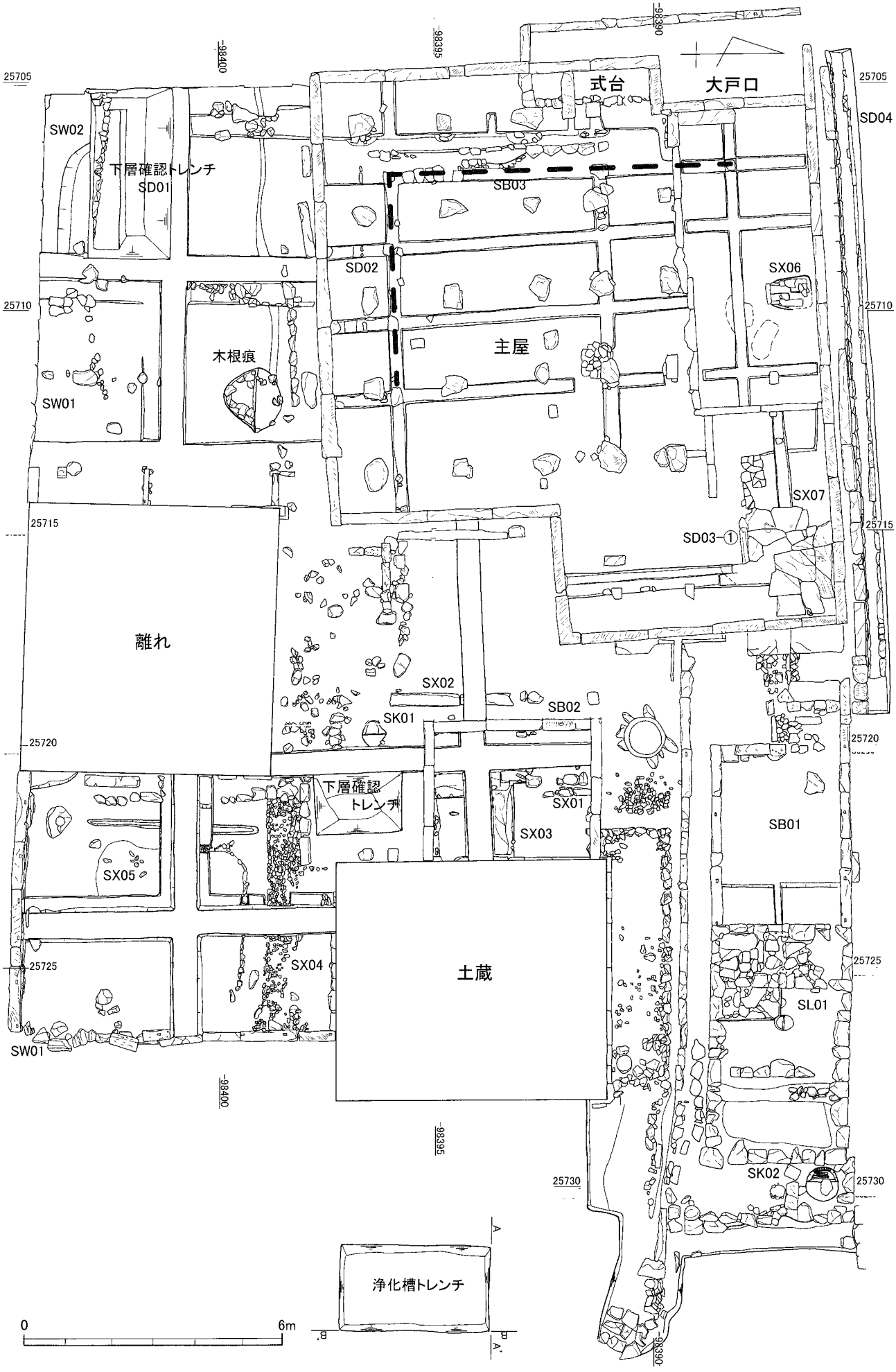


Fig.21　宗岡家地点遺構配置図（S＝1／120）

第２節　調査の成果

第１項　堆積層 (Fig.23・28)

第１・２・12・14 層は土間に関連する堆積層である。第１層は土間のタタキ面で、第２層は土間の造成土である。第 12 層と第 14 層は焼土層で、土間面で移動式カマドなどを用いた際の痕跡とみられる。

第３・４・８層は、宗岡家住宅が建てられた際の整地層とみられる。これら以外に宗岡家に関連する堆積層としては、防湿や消毒のための石灰とみられる第６層や、宗岡家住宅が建てられた後で床下への吹き込みなどによって二次的に堆積したとみられる第７・11 層がある。

第３トレンチの南端部で確認された第 10 層は、宗岡家住宅の整地層である第８層よりも下位にある。そのため、宗岡家住宅が建つ以前の堆積層と見られ、今年度検出された前身建物遺構 (ＳＢ 03) に関連する可能性がある。

10 トレンチでは炭化物層である第５層が確認されており、寛政 12(1800) 年に発生した大森大火に関連する堆積層である可能性も考慮される。これまでの発掘調査では宗岡家の敷地内から大森大火に関わる堆積層は確認されていないが、宗岡家住宅の北側に位置する阿部家付近から出火しているため、大きく焼けてはいないものの多少の影響はあった可能性がある。

浄化槽トレンチでは、上半部は造成によるとみられる土質の均一な堆積層で、下半部は川砂や円礫を多く含む河川による堆積層であることが確認された。平成 26 年度の発掘調査では、宗岡家住宅が建てられた際に土地を造成していることが下層確認トレンチによって判明していたが、今回確認された造成土も同様の性格とみられる。

第２項　検出遺構 (Fig.22)

遺構としては、Ⅵ区では宗岡家が建てられる以前の住居遺構ＳＢ03と、その周囲を囲む溝遺構ＳＤ02が、Ⅶ区では台所の排水溝とみられる石樋溝ＳＤ03、大カマドの下部構造とみられるＳＸ06、台所の石敷き遺構とみられるＳＸ07がそれぞれ検出された。明確な遺構ではないが、Ⅵ区中央部においては焼土が集中している箇所があり、移動式のカマドを使用した痕跡とみられる。

また、発掘調査終了後に実施した立会調査では、宗岡家北側の道路から石積みの溝ＳＤ04が検出された。このことにより、ＳＤ03は元々ＳＤ04とつながっていたが、住宅の改装などによって水抜きが不要になった際に、その接続部が埋められていたことも判明した。

【ＳＢ03】

ＳＢ03はⅥ区の東西５m、南北８mの範囲で検出された礎石建物跡である。検出された礎石は一部のみだが、本来は一間あたりが約 1.7 m (５尺７寸) で、東西５間半、南北５間の建物であったと推察される。検出された礎石は一辺が 30㎝程度で、宗岡家住宅の礎石と比べて小さいことから、宗岡家住宅よりも小さな建物であったと推察される。ＳＢ03の西側と南側には幅が 20 ～ 30㎝程度の素掘りの溝 (ＳＤ02) があり、ＳＢ03に伴う雨落ち溝とみられる。礎石と溝の間には幅 60㎝程度の隙間があり、犬走り状になっていたとみられる。ＳＢ03の南西部には、性格は不明であるが上面を平らにした石を６個程度並べた箇所がある。宗岡家が建つ前の様相が窺われる資料としては、文政３(1820) 年に作成されたとされる屋敷図が残っており、それには東西５間半、南北５間で、北西隅が凹んだ鍵形の建物が記載されている。ＳＢ03においても北西隅の礎石は他の礎石に比べて小さいことから、建物ではなく屋根を支えるためのものであったとすれば、建物の形が文書に記載されたものと同様であることから、今回検出されたＳＢ03は文書に記載された建物に該当する可能性がある。

【ＳＤ03】(Fig.25)

ＳＤ03はⅦ区東半の台所の石敷遺構 (ＳＸ07) の横、及び下から検出された緑色凝灰岩 (福光石) 製の石樋の溝で、排水のための溝とみられる。東西方向 (ＳＤ03-①) と南北方向 (ＳＤ03-②) からなっており、ＳＤ03-①は長さ 80㎝、幅 18㎝、深さ５㎝程度である。ＳＤ03-②は大きさの異なる２つの溝がつながっており、南側は長さ 156㎝、幅約 20㎝、深さ 10㎝で、北側は全体を検出していないが長さ 36㎝以上、幅 36㎝、深さ 13 ～ 16㎝である。ＳＤ03-②はＳＸ07の下で暗渠になっており、石樋溝の下部構造と、長さ 30㎝、幅 10㎝程度の割石を並べた上部構造とで構成

されている。これはＳＤ 03-②が建物の北へ向かってやや下がっているため、ＳＸ 07 を敷く際に高さを調節したためとみられる。また、ＳＤ 03-②の北端部はＳＤ 04 とつながっている。ＳＤ 03 とＳＤ 04 との接続部は家屋の改修などによってＳＤ 03 が機能しなくなった際に埋められており、ＳＤ 04 の壁面にその痕跡が認められる。

【ＳＤ 04】(Fig.27)

宗岡家住宅の北側にある大音寺小路に伴う側溝で、立会調査の際に検出された。溝の幅は上場が約 30㎝、下場が約 20㎝で、割石を石垣状に積み上げ、最上部には延石を載せている。底面に石などは敷かれておらず、地面を硬化させているのみである。壁面は南北で高さが異なっており、北側は 50 ～ 60㎝程度、南側は 90 ～ 100㎝程度で、本来は宗岡家住宅が道よりも高い場所に位置していたようである。延石は長さ 60 ～ 100㎝程度、厚さ 10㎝、幅 26 ～ 30㎝程度のものがほとんどだが、一部には長さ２m程度の大きなもの

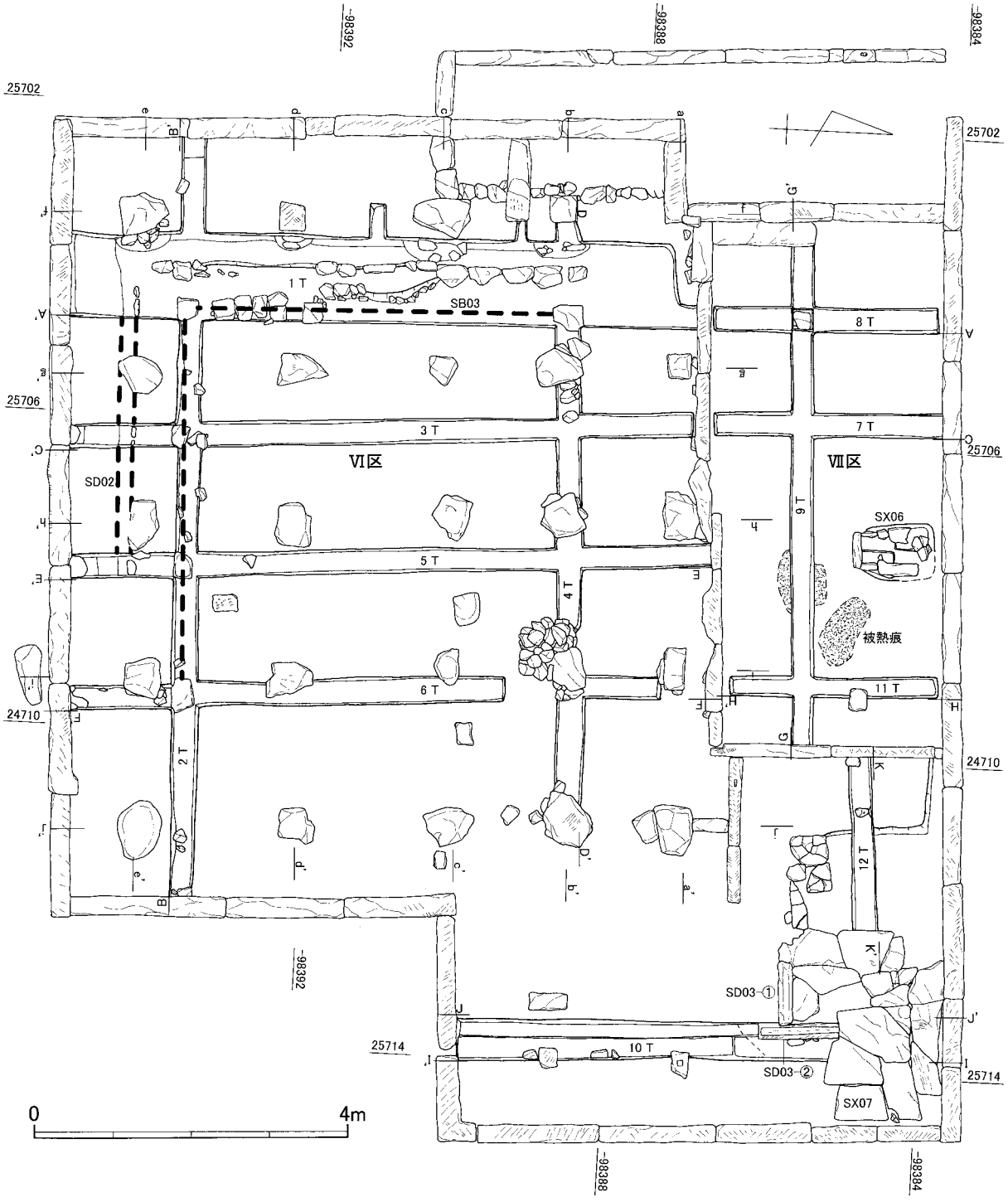
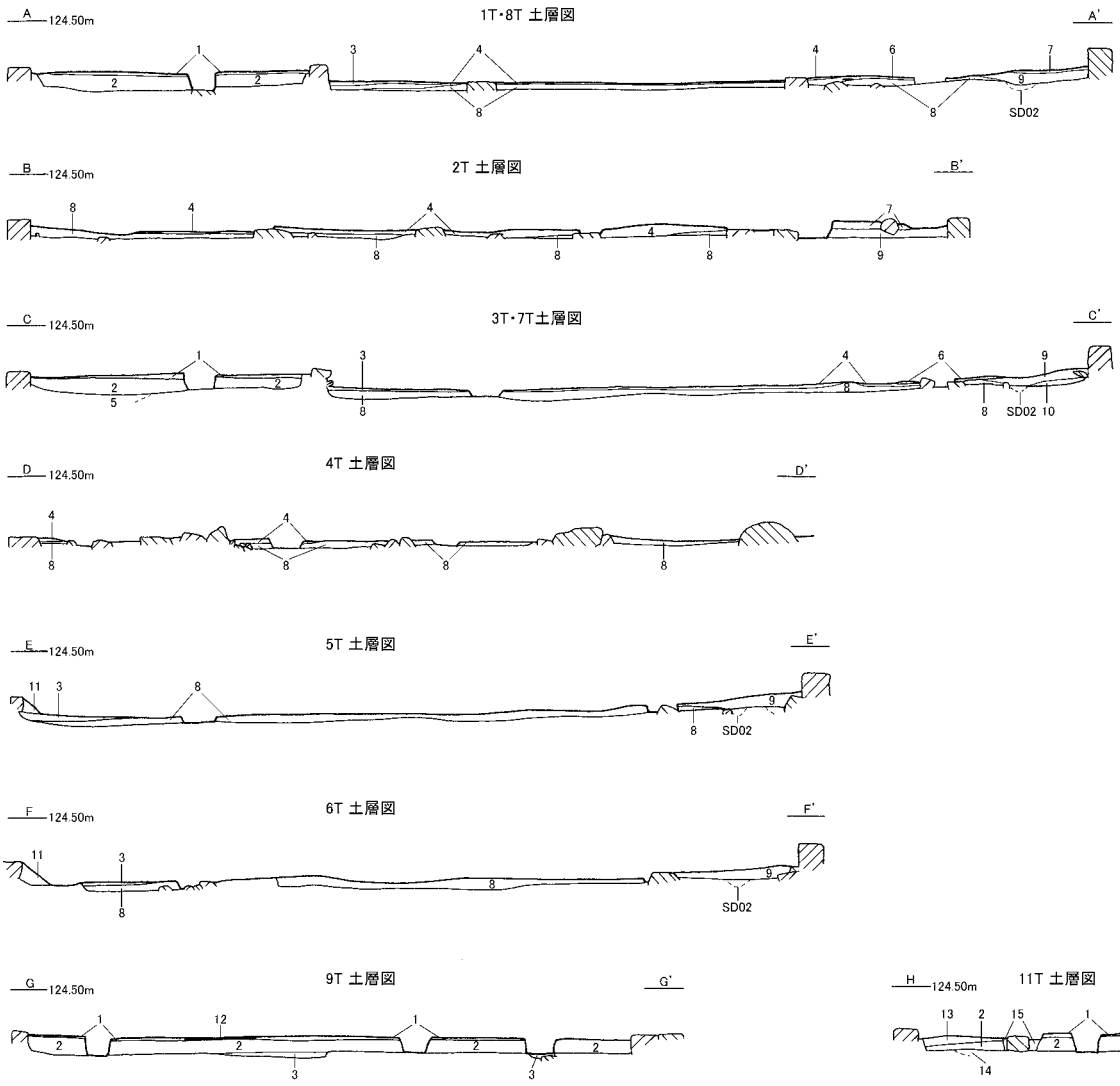
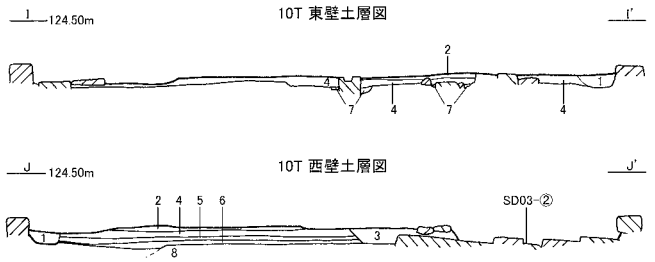


Fig.22　宗岡家地点VI・VII区遺構配置図 (Ｓ＝１／ 80)



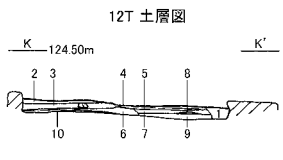
1～9T 土色

1	10 YR 7/8	黄褐色土(タタキ面)
2	10 YR 3/2	黒褐色土(礫を含む、タタキ面の造成土)
3	7.5 YR 6/8	橙色土(整地土、粘質で固くしまる)
4	7.5 YR 7/8	黄橙色土(整地土、粘質でよくしまる、硬化)
5	7.5 YR 6/8	橙色土(整地土、粘質でよくしまる)
6	2.5 Y 8/1	灰白色土(石灰か？)
7	2.5 Y 7/6	明黄褐色土(床下の堆積土)
8	7.5 YR 3/3	暗褐色土(造成土か？)
9	10 YR 5/2	灰黄褐色土
10	10 YR 6/6	明黄褐色土(固く、しまっている)
11	7.5 YR 3/2	黒褐色土(やわらかく、しまりない)
12	2.5 YR 5/8	明赤褐色土(焼土)
13	10 YR 7/4	にぶい黄橙色土(固く、しまっている)
14	2.5 YR 3/6	暗赤褐色土(焼土)
15	5 YR 5/1	褐灰色土(緻密)



10T 土色

1	2.5 Y 4/2	暗灰黄色土(やわらかい土)
2	7.5 YR 7/6	橙色土(上面やや硬化)
3	2.5 Y 3/2	黒褐色土
4	2.5 Y 4/2	暗灰黄色土
5	10 YR 4/2	灰黄褐色土(上面硬化、炭化物含む)
6	7.5 YR 3/2	黒褐色土
7	10 YR 3/3	暗褐色土(やわらかい土)
8	10 YR 7/6	明黄褐色土(整地層、粘質)



12T 土色

1	10 YR 3/2	黒褐色土(やわらかい土)
2	5 Y 7/6	黄色土(タタキ、固くしまる)
3	10 YR 3/2	黒褐色土(礫を含む、タタキ面の造成土)
4	2.5 YR 4/3	オリーブ黄色土(ややしまる)
5	10 YR 7/6	明黄褐色土(整地層、粘質)
6	7.5 YR 6/6	橙色土(整地層、粘質)
7	7.5 YR 3/3	暗褐色土
8	7.5 YR 8/2	灰白色土(やや粘質)
9	10 YR 3/1	黒褐色土(造成土)
10	10 YR 3/2	黒褐色土(造成土)

0 4m

Fig.23　宗岡家地点Ⅵ・Ⅶ区トレンチ土層断面図(Ｓ＝１／80)

も含まれていた。積み石は多くが一辺30～40㎝だが、２段目には一辺が50㎝程度の大きな石や20㎝未満の小さい石も使用している。石垣の構築には少なくとも３段階あったとみられ、まず最下段の石が置かれた段階、次に最下段から延石の間を積み上げた段階、最後に延石が置かれた段階である。ＳＤ04は宗岡家住宅の建設時にはすでに存在していたとみられることから、遅くとも19世紀前半には存在していたと想定される。埋土から遺物は出土せず、昭和時代に廃棄されたとみられるビニールが多少出土した程度であった。

ＳＤ04の廃絶時期について聞き取りを行ったところ、昭和30～40年頃までは道の側溝として機能してい

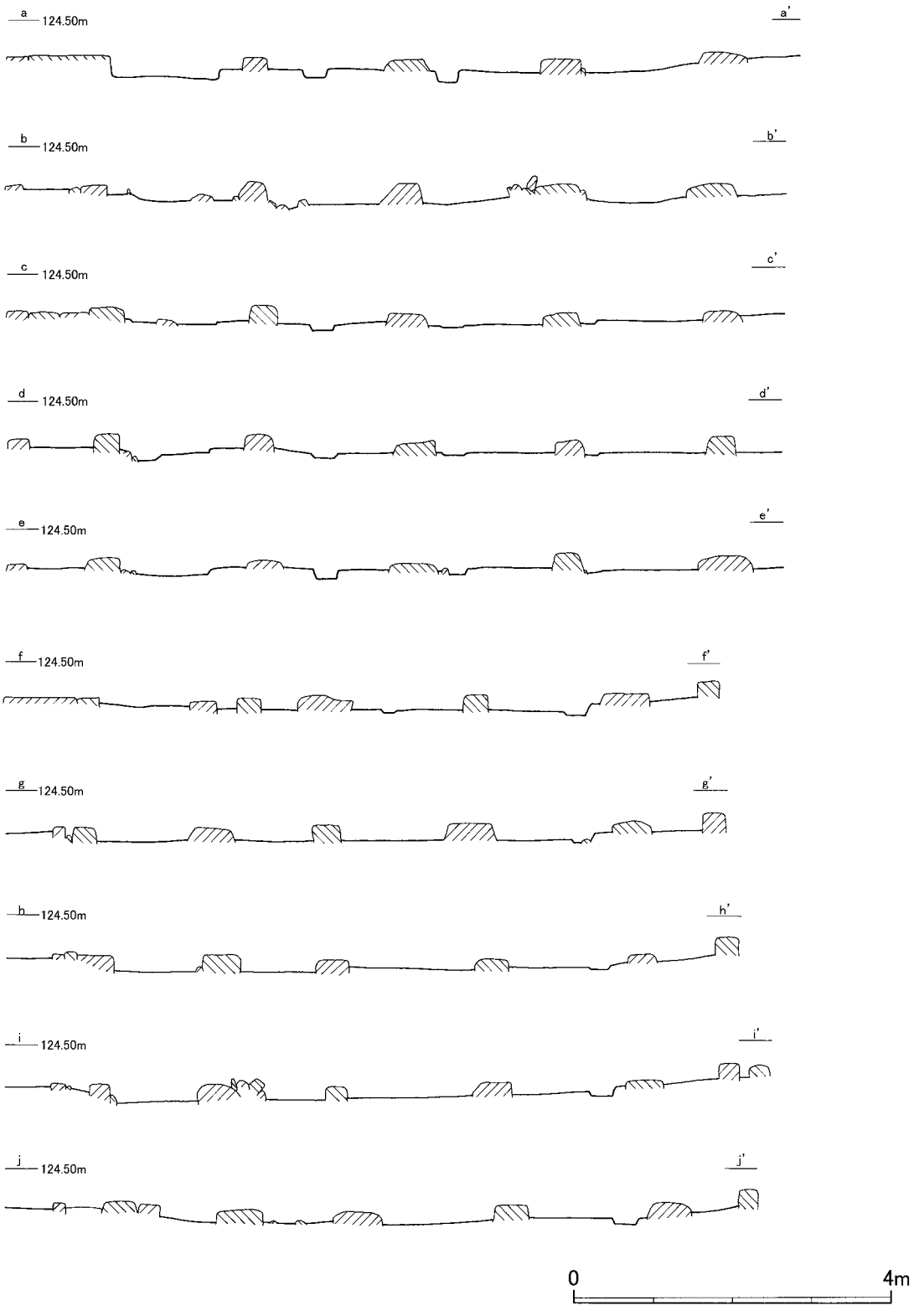


Fig.24　宗岡家地点Ⅵ区礎石断面図（Ｓ＝１／80）

たが、道路のかさ上げなどによって埋められたとの情報が得られている。

検出された範囲における東端部付近には石の積み方が他と異なっている個所が一か所認められる。これは宗岡家のⅦ区で検出されたＳＤ 03-②の延長線上にあることから、ＳＤ 03-②が使用されなくなった際に埋められた痕跡とみられる。

【ＳＸ 06】(Fig.26)

Ⅶ区の北端部で、土間のほぼ中央部から検出された。土間に設けた土坑の中に、切石と割石を長方形に並べている。大きさは、掘り方が東西 73㎝、南北 115㎝で、石を並べた範囲は東西 62㎝、南北 100㎝である。石組の内部には灰層と炭層が堆積していることから火に関連する遺構とみられ、検出された位置や大きさから、大カマドの下部構造と推定される。検出状況より、焚口は 1 か所で、南側に向けて設けられていたようである。

【ＳＸ 07】(Fig.25)

Ⅶ区東半部で検出された、土間の一角に扁平な割石を敷き詰めた石敷状の遺構である。石敷は一部が壊れているが、掘方から本来は東西 3.7 m、南北 2.1 mの規模であったとみられる。ＳＸ 07 の南側にＳＤ 03-①が接していることから、水回りに関連する施設の可能性がある。

第３項　出土遺物 (Fig.29 ～ 31、Tab. 5)

出土遺物としては、Ⅵ・Ⅶ区のいずれでも陶磁器片が出土した。

【Ⅵ区】

54 は肥前磁器の皿である。内面体部には花の文様が、外面体部は唐草文が見られる。また、外面に 1 本、底面に 1 本、見込みに 2 本の圏線がある。55 は瓦質土器で、鍋の可能性がある。56・58 は紅皿で、56 の外面には陽刻による蛸唐草文がある。69 は肥前磁器の輪花の坏で、外面に花の文様がある。70 は瀬戸 (新製焼) 皿で、内面に梅の木が描かれている。内面の口縁部と、畳付けの内外に圏線がある。72 は肥前磁器で、口錆びの輪花皿である。内面の広範囲に文様がある。73 は在地系陶器で、小杯形のミニチュア陶器である。74 は陶器の蓋で、つまみが桃の形になっている。内面には布に押し当てて成形した痕跡がある。75 は在地系陶器の鍋蓋で、外面上部にコバルトで施文された文様と文字がある。

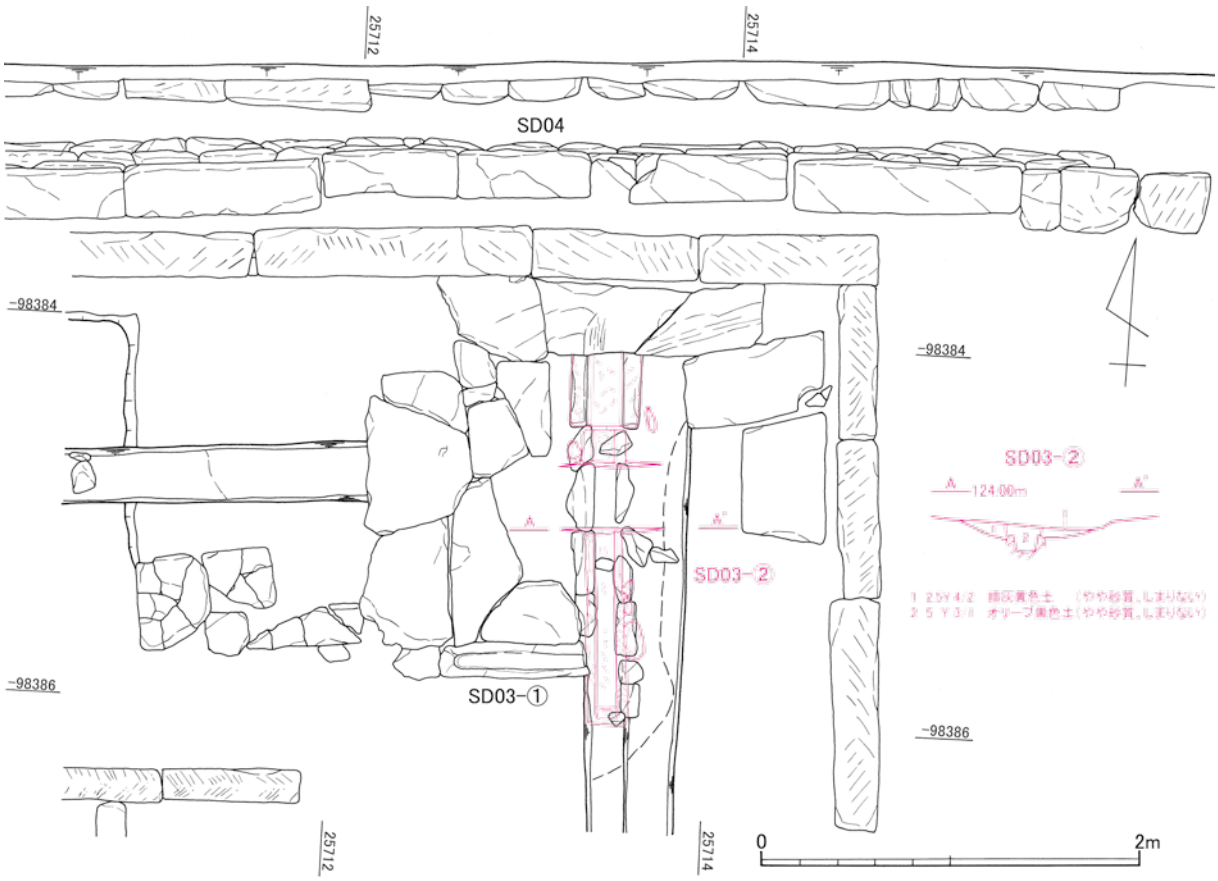


Fig.25　宗岡家地点Ⅶ区東半実測図 (Ｓ＝１／ 40)

【Ⅶ区】

57 は唐津の皿である。59 は唐津の皿で、見込みに砂目がある。60 は土師質土器の皿で、底面に糸切の痕跡がある。体部に 1 つ穿孔がある。61・62 はいずれも皿だが、産地の判別が難しい。61 は外面に黒色、赤色、金色で描かれた文様がある。62 は内面に銅版転写によるとみられる緑色の文様がある。64 は陶器の土瓶である。内面は無釉で、外面は全体に緑色の釉をかけ、白色の釉で施文している。また、一部にススが付着している。65 は素焼きの陶器で、上部には突起が付き、内面が屈曲する。また、突起は被熱しており、ススが付着している。コンロの一部とみられる。66・67 も素焼きの陶器で、65 と同じくコンロの一部とみられる。66 には口縁部に指でひねって作ったとみられる突起がある。68 はサナである。63 は仏飯具で、外面には金メッキが施されている。

【調査区外出土遺物】

76 ～ 79 は S D 04 から出土した。76 は瀬戸 (新製焼) の皿で、内面外面ともに植物の文様が描かれ、底面には文字のスタンプがある。また、内面外面の口縁部と、畳付けの内外にそれぞれ圏線がある。77 は肥前磁器の皿で、外面には唐草文が、内面には植物と網目の文様がある。78 は肥前磁器の皿で、体部がやや立ち上がる深い器形である。内面外面ともに文様はない。底部は蛇の目凹形高台である。79 は擂鉢で、須佐の可能性がある。小片のため擂り目の単位は不明だが、擂り目の上端部はナデて整えられている。

80 ～ 83 は浄化槽トレンチで出土した。80 は肥前磁器の広東碗で、外面に松の文様がある。内面には口縁部と見込み付近に圏線がある。見込みにも文様があるがモチーフは不明である。81 は肥前磁器の外青磁の碗で、内面口縁部に簡略化された四方襷文がある。82 は肥前磁器の広東碗蓋である。外面には松の文様が、つまみ内部には山水文とみられる文様がある。内面には圏線が口縁部付近に 2 条と見込み付近に 1 条あり、モチーフは分からないが見込みにも文様がある。83 は須佐の鉢である。

【金属製品・石製品】(Fig.31)

84 は指輪で、内面に星の文様と「K 12」の文字がある。長楕円形の合金を丸めて円形にしている。85

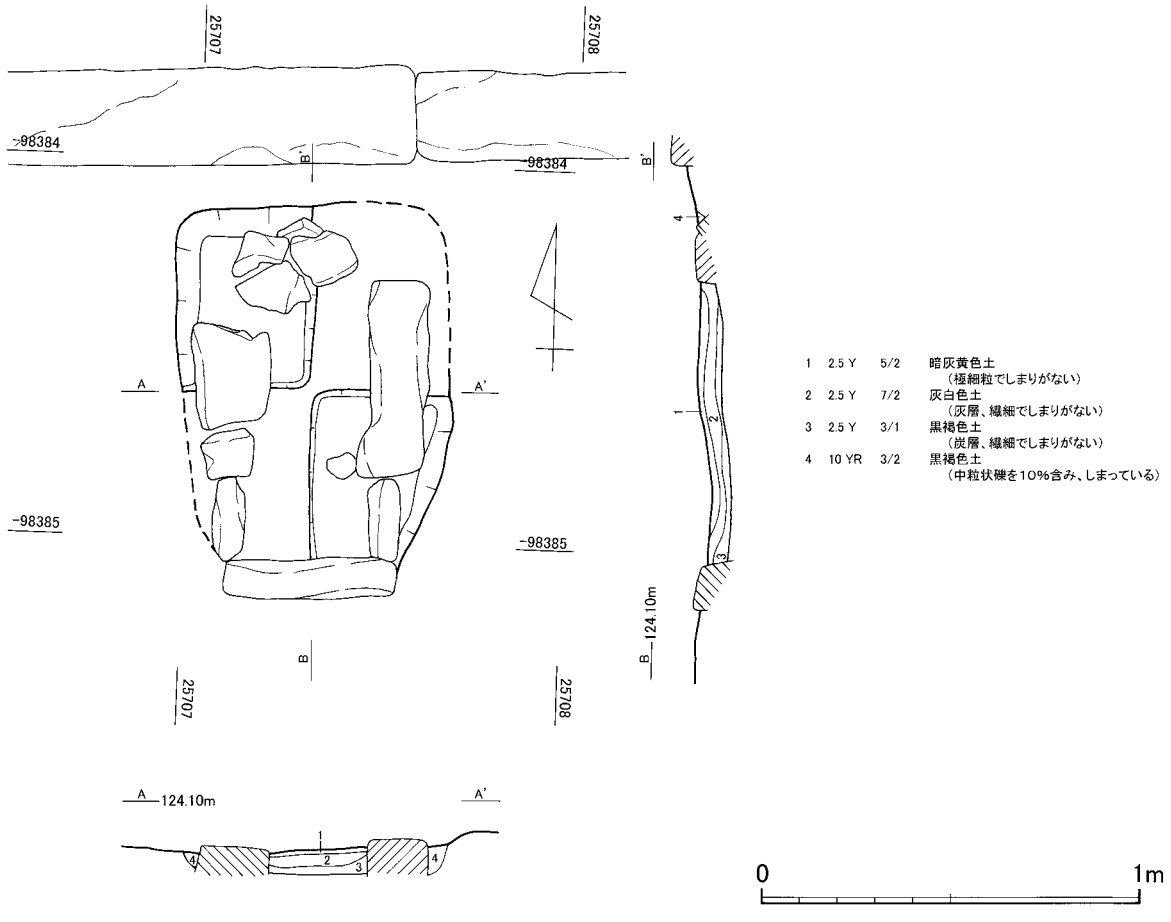


Fig.26　宗岡家地点Ⅶ区ＳＸ 06 平面・断面図 (Ｓ＝１／ 20)

～87はいずれも和釘である。88～92は古銭で、いずれも寛永通宝である。89・90・92は新寛永で、91は古寛永の可能性がある。88は強く錆びているため判断できなかった。93は粘板岩製の石製品で、一部に溝が掘り込まれている。元は硯とみられるが、二次的に加工して別の用途に転用されたものと見られる。

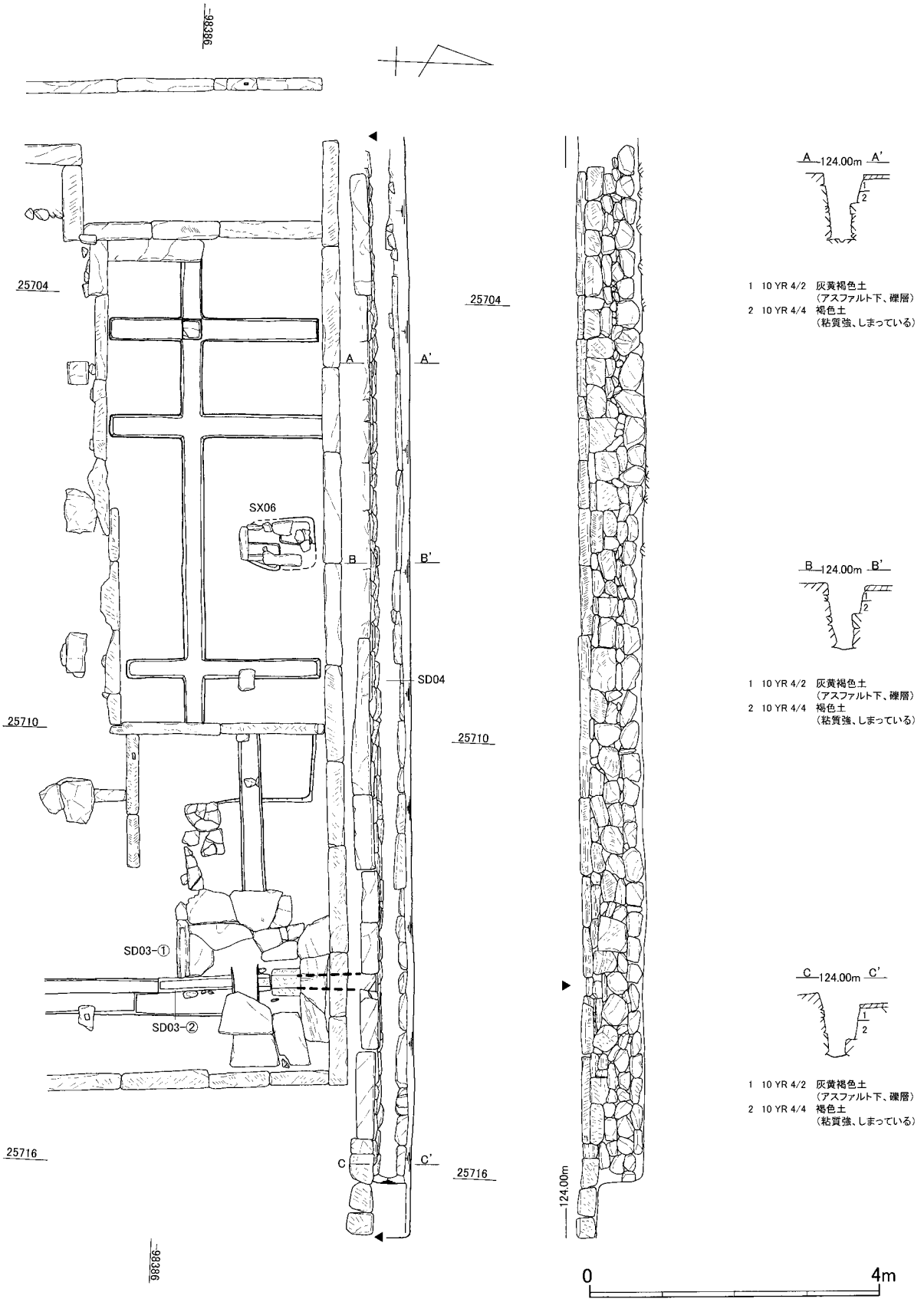


Fig.27　宗岡家地点北側ＳＤ04平面・立面・土層断面図（Ｓ＝1／80）

第３節　小結

本年度は宗岡家主屋にあたるⅥ区・Ⅶ区の発掘調査を実施した。Ⅵ区からは礎石建物跡（ＳＢ03）が検出された。ＳＢ03には礎石の他に溝や石列も伴っており、家の周りには犬走りと素掘りの溝があったことが判明した。また、ＳＢ03の南西隅には上面を平らにした割石をいくつか並べた箇所もあった。先述したように、ＳＢ03は宗岡家住宅に関連する遺構ではないことから、宗岡家よりも古い建物に関連する遺構を考えられる。宗岡家が建つ前には福本家の所有地となっており、建物の大きさ・形が記載された略図も残されている。それによると、東西五間半、南北五間で北西隅が凹んだ鍵形の建物が記載されており、ＳＢ03がそれに該当する可能性がある。

Ⅶ区西半では大カマドの下部構造とみられるＳＸ06が検出された。ＳＸ06は土間面を土坑状に掘り窪めた後に石を配置する構造で、１つの焚口が南に向かって設けられていたことが判明した。Ⅶ区東半では水回りに関連する可能性があるＳＤ03・ＳＸ07が検出された。ＳＤ03・ＳＸ07と同様の遺構は、大森地内では岡家地点や渡辺家地点で検出されている。岡家地点では座敷側の石樋溝に沿ってカマドが造りつけられていた。宗岡家地点ではＳＤ03-①沿いでカマドの痕跡を確認できなかったが、家相図にはカマドの記載がある。そのため、本来はＳＤ03-①沿いにカマドが造られていたが、後世の改修などによって撤去された可能性がある。また、Ⅶ区中央部には移動式のかまどを使用したとみられる焼土の集中箇所が確認された。

宗岡家地点の発掘調査は平成26年度から開始し、保存修理の進捗と合わせながら調査範囲を設定して実施してきた。平成26・27年度は敷地の東半に当たる庭の調査を実施し、かつて所在していた建物の跡（ＳＢ01）や、内露地や石列などの庭に関連する遺構が検出された。また、調査区の一部に下層確認トレンチを設けて深く掘り下げたことによって、宗岡家住宅が建てられた際に造成が行われており、それ以前は河川などによる自然堆積であったことが判明している。また、下層からは江戸時代初期の地割に関連する遺構が検出されたほか、下層から現在の地表面に至るまでには、土地の造成・整地の痕跡とみられる硬化面がいくつも確認されるなど、江戸時代を通じての地割の変遷を考える上で重要な資料が多く得られている。本年度は主屋の床下及び土間の調査を実施し、宗岡家住宅の設備に関連する遺構に加えて、宗岡家住宅の前身建物跡が検出された。

以上のように、３年にわたる発掘調査によって、宗岡家住宅の保存修理に直接関連する成果のみでなく、土地の形成や利用履歴に係る資料が得られるなど、町並みの形成や変遷を明らかとする上でも重要な成果が多く得られた。

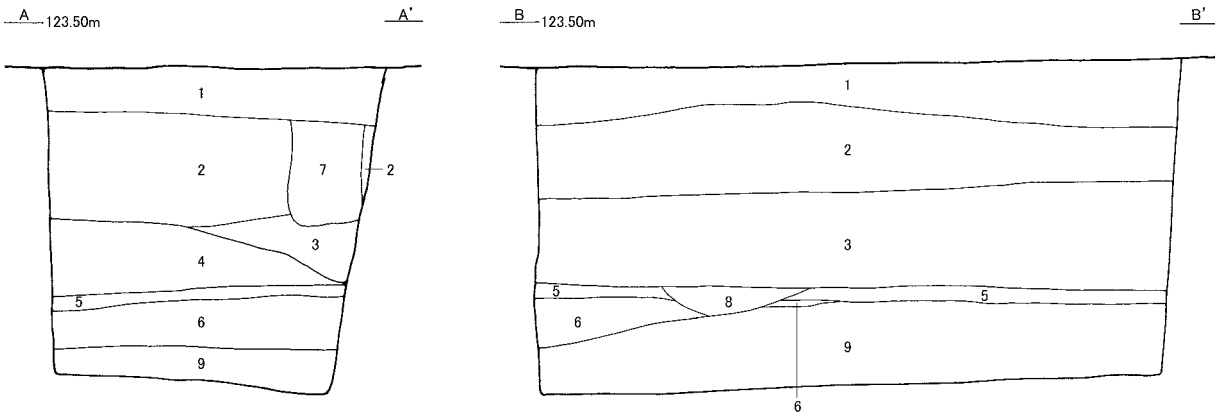


Fig.28　宗岡家地点浄化槽トレンチ土層断面図（Ｓ＝１／40）

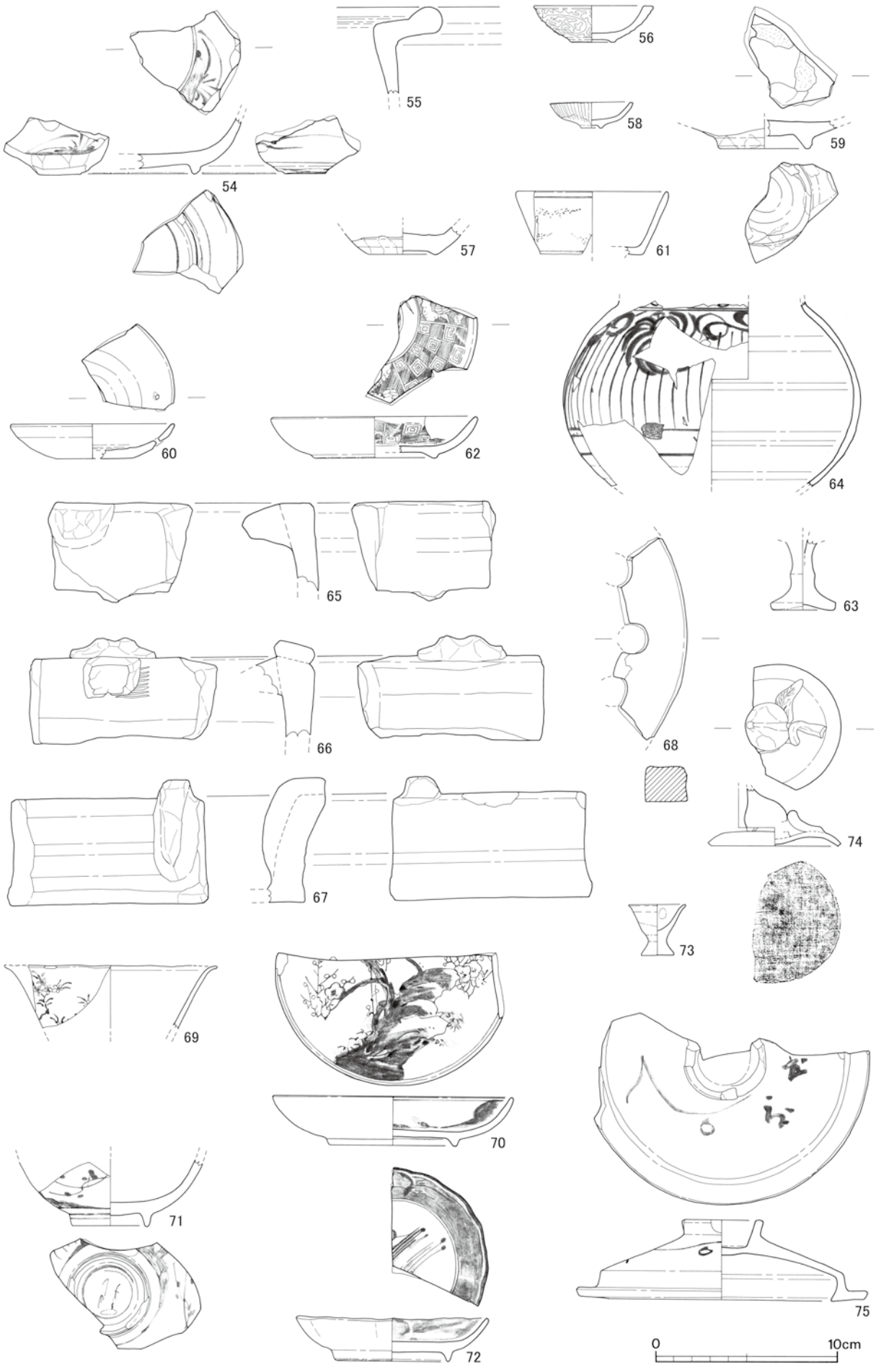


Fig.29　宗岡家地点出土遺物実測図Ⅰ（Ｓ＝１／３）

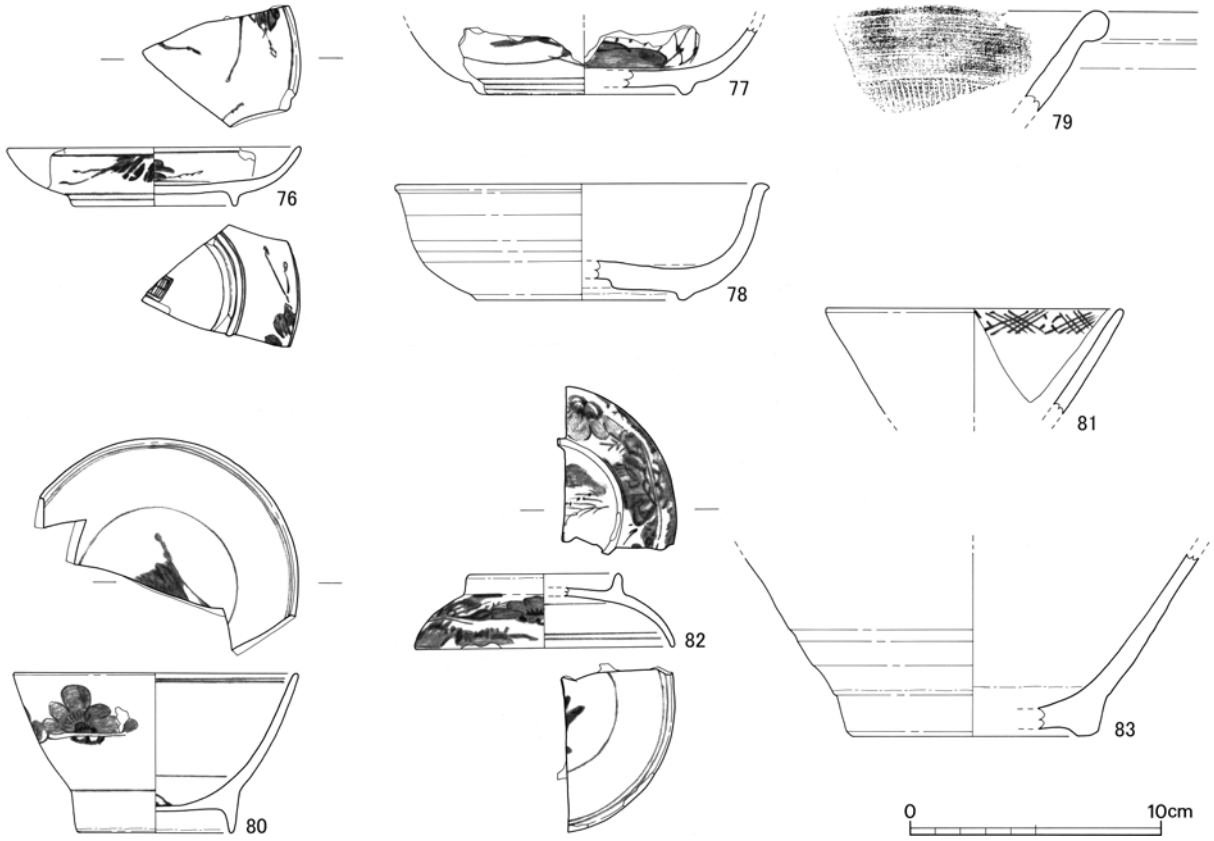


Fig.30　宗岡家地点出土遺物実測図Ⅱ（Ｓ＝１／３）

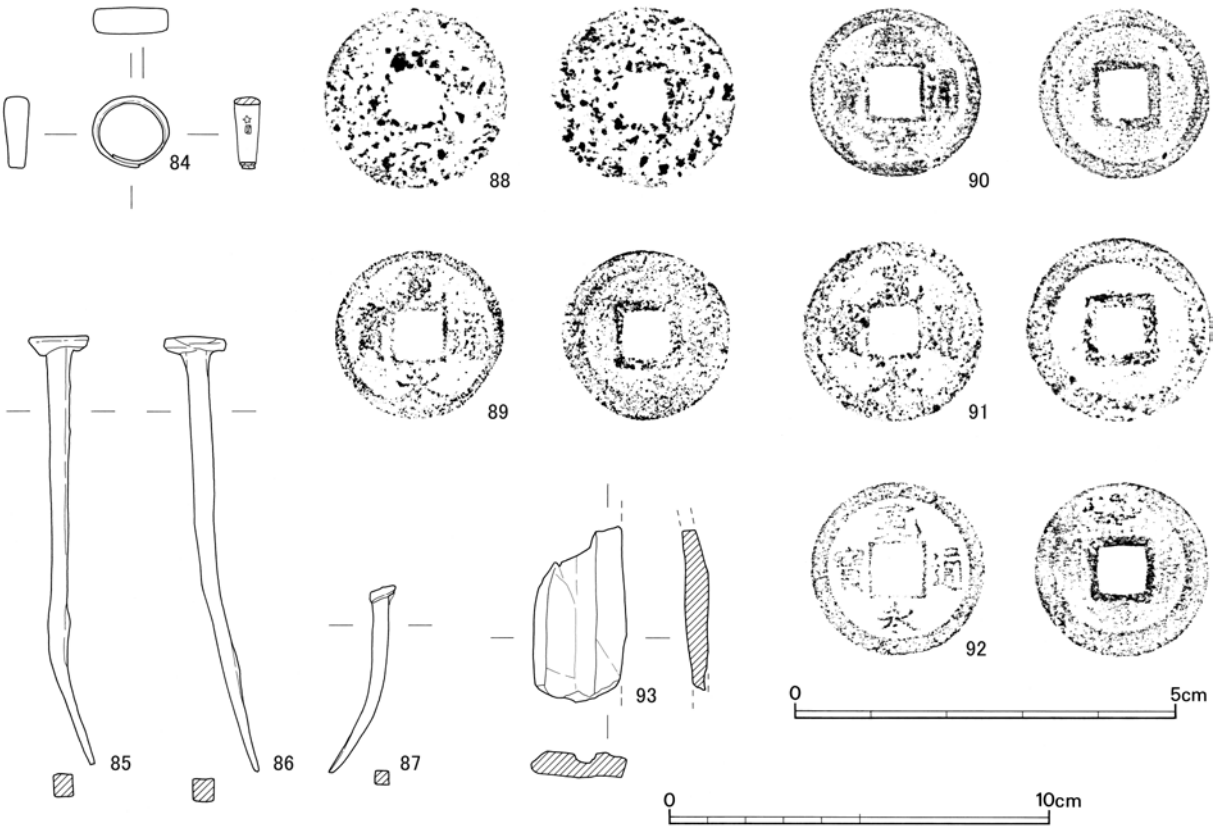


Fig.31　宗岡家地点出土金属・石製品実測図（Ｓ＝１／１、１／２）

Tab. 5　宗岡家地点出土遺物一覧表

挿図番号	出土地点	種　別	器　種	大きさ (cm)			色　調	成形・調整・文様	備　考
				口径	器高	底径			
54	主屋土間	肥前磁器	皿		(3.1)		透明釉		
55	主屋土間	瓦質土器	鍋		(4.8)		黒色		
56	台所床下　埋土	肥前磁器	紅皿	6.6	2.0	2.2	透明釉	型押し成形	
57	主屋床下　3T	肥前陶器	皿		(1.5)	(3.6)	灰釉		
58	主屋床下　2T　東端部	肥前磁器	紅皿	4.3	1.5	1.0	透明釉		
59	主屋床下2T西端部表土	肥前陶器	皿		(1.6)	(5.0)	灰釉	砂目	
60	4T	土師質土器	皿	(9.0)	1.9	(4.2)	浅黄橙色		穿孔あり
61	7T	不明磁器	坏	(8.2)	(3.5)		透明釉	上絵付	
62	7T	不明磁器	皿	(11.1)	2.3	(6.5)	透明釉		
63	7T	不明磁器	仏飯器		(3.9)	3.2	金彩 透明釉		
64	7T	不明陶器	土瓶？		(10.2)		銅緑釉 長石釉	スス付着	
65	7T	土師質土器	焜炉？		(5.5)		淡黄色		
66	7T	土師質土器	焜炉？		(5.8)		淡黄色		
67	7T	土師質土器	焜炉？		6.8		淡黄色		
68	7T	土製品	サナ	現存長 11.2	現存幅 4.2	現存厚 2.0	灰白色		82.9 g
69	10 T　1面直上	肥前磁器	坏	(11.7)	(3.5)		透明釉	輪花	
70	10 T　1面上層	瀬戸	皿	(13.1)	2.7	2.9	透明釉		
71	10 T　2面上	肥前磁器	碗		(3.7)	(4.0)	透明釉		
72	10 T	肥前磁器	皿	(10.4)	2.4	(6.1)	透明釉	口サビ 輪花	
73	10 T　石垣内	在地系陶器	ミニチュア	(3.2)	2.8	1.8	長石釉		
74	10 T	焼締陶器	蓋	(7.0)	(3.2)		黄灰色	布目	
75	10 T　石垣内	在地系陶器	蓋	(15.6)	4.4	つまみ径 (4.4)	長石釉		
76	SD04　埋土	瀬戸	皿	(11.5)	2.3	(6.4)	透明釉		
77	SD04　埋土	肥前磁器	皿		(2.2)	(8.0)	透明釉		
78	SD04　埋土	肥前磁器	皿	(14.6)	4.7	(8.2)	透明釉	蛇ノ目凹形高台	
79	SD04	須佐？	すり鉢		(4.0)		サビ釉		
80	浄化槽立会　2層	肥前磁器	碗	(11.2)	6.4	(6.0)	透明釉		
81	浄化槽立会　3層以下	肥前磁器	碗	(11.7)	(4.2)		(内) 透明釉 (外) 青磁釉	四方襷文	外青磁
82	浄化槽立会　3層以下	肥前磁器	蓋	(10.2)	3.0	つまみ径 (8.9)	透明釉		
83	浄化槽立会　3層以下	須佐	鉢		(7.3)	(9.5)	灰釉		
挿図番号	出土地点	種　別	器　種	大きさ (cm)			重量 (g)	色　調	備　考
				現存長	現存幅	現存厚			
84	主屋床下　5T	金属製品	指輪	1.9	2.0	0.7	3.1		
85	主屋床下　表採	鉄製品	釘	11.5	0.5	0.6	16.4		
86	主屋床下　表採	鉄製品	釘	11.7	0.5	0.6	16.7		
87	主屋床下　表採	鉄製品	釘	5.3	0.4	0.4	3.3		
88	主屋清掃時採集	銭貨	不明	2.5	2.5		3.2		
89	主屋床下　5T	銭貨	寛永通寶	2.3	2.3		2.7		
90	2 T	銭貨	寛永通寶	2.3	2.3		3.8		
91	10 T	銭貨	寛永通寶	2.5	2.5		3.6		
92	10 T	銭貨	寛永通寶	2.4	2.4		3.1		
93	2 T	石製品	不明	4.6	2.5	0.7	8.2	暗灰色	硯か

第４章　金森家地点の調査

第１節　調査の概要

第１項　金森家住宅の位置と概要 (Fig.32)

金森家住宅は駒の足地区に所在し、市道大森市街線に東面する。江戸時代前期より川北家 (泉屋) が居を構えており、宝暦３(1753) 年から文化７(1810) 年にかけては石見銀山御料内六組六軒の郷宿の一つとなり、波積組の郷宿を勤めたことが文献史料から知られている。川北家は江戸時代の初め頃には大森町で酒造業を経営していたとされるが、その詳細は明らかではない。

明治 37(1904) 年に土地と建物は銀山地区の高橋家の所有に変わり、酒造業を営むが、大正 15 年には廃業して、高橋家は銀山地区の旧宅に転居している。その後、昭和６年に金森医院が開業し、昭和 16 年には土地と建物が金森家の所有となっている。

建物の一部には後世の改修や部分的な修理などがなされているが、概ね旧態を維持しており、江戸時代の建築遺構として貴重であることから､昭和 49 年に「石見銀山御料郷宿泉屋遺宅金森家」として、島根県の指定史跡になっている。

第２項　平成 28 年度の発掘調査の概要 (Fig.33)

本年度は主屋背面の土間部分の礎石を測量をした他に、主屋内の一部と、主屋東側に所在する付属屋の発掘調査を実施した。また、建屋の保存修理工事の関係で、主屋内の一部を掘削する際には部分的に調査を行なった。ただし、主屋については工事の進捗に合わせて来年度以降に本格的な調査を実施する予定であるため、まとまった成果が得られた段階で報告したい。今年度発掘調査を実施した付属屋は、主屋の東側に所在していた建物で、現在は延石の基礎のみが残っていた。大正 12 年に撮影された古写真や昭和 22 年の航空写真では上屋が確認できるが、昭和 40 年頃に撮影された写真には写り込んでいないことから、昭和の前半に上屋が解体されたようである。発掘調査では、幅約 20㎝のトレンチを３本設定し、土層の堆積状態の確認と、主屋との前後関係の確認を行なった。

第２節　調査の成果

第１項　検出遺構 (Fig.33)

【ＳＢ 01】(Fig.33・34)

ＳＢ 01 は主屋の東側に位置する。先述のように昭和の前半に上屋が解体され、現在では基礎の延石のみが残っていた。建物があった場所には庭木が植えられているなど、後世に大きく改変されていた。ＳＢ 01 は主屋に対して軸がやや斜めになっていることから、主屋とは建てられた時期が異なることが想定されており、その新旧関係が問題となっていた。

第１トレンチはＳＢ 01 の南北方向に設定したトレンチである。基本的にはＳＢ 01 の整地層とみられる面まで掘り下げ､一部はさらに下層の確認を行なった。１・２・５・６層は家屋解体後に堆積した層で、２の埋土にはビニール製品も含まれていたことから近年の活動による堆積層とみられる。また、ゴミ穴や水道のパイプを通すための掘削も行われており、上屋が解体された後に大きく改変されていることが確認された。また、ＳＢ 01 内には建築時の整地層とみられる堆積層も確認できたが、主屋との前後関係を堆積状況から明確にするには至らなかった。ただし、ＳＢ 01 が主屋よりも後に建築されたとすると、ＳＢ 01 の礎石が一部主屋の柱軸と重なっている理由が不明である。また、ＳＢ 01 が主屋よりも先に建築されたのであれば、ＳＢ 01 を生かしつつ主屋を敷地に合わせて建てたと考えることもできる。以上のことより、ＳＢ 01 が主屋より古いと考えた方が自然だろう。

【主屋南西部】

主屋南西部は、金森家住宅の玄関から入った通り土間の南側で、東半を物置とし、西半には床が張られていた。修理に際して床板を外したところ、床下から現在の建物には関係のない延石が検出されたため、発掘調査を実施した。検出された延石は東西に３本、南北に２本並んでおり、東西 2.9 m、南北 1.2 m、幅 17 ㎝である。東西方向の延石の内、中央のものには方形の穴が２カ所開いており、柱を入れるほぞ穴の可能性がある。東側の延石は東端部に、１辺 11㎝の四角く

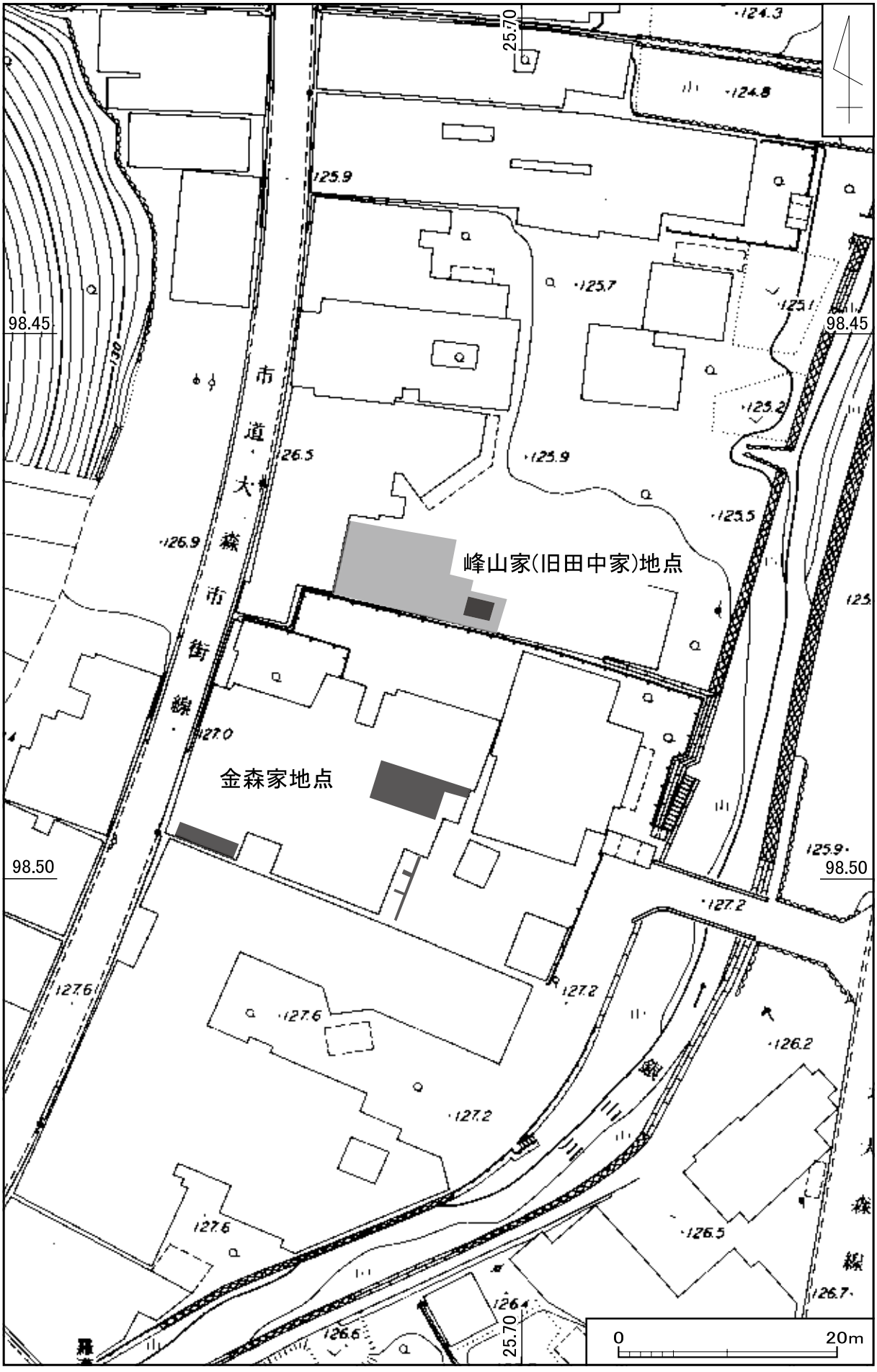


Fig.32　金森家地点周辺地形図・調査区配置図 (S＝1／500)

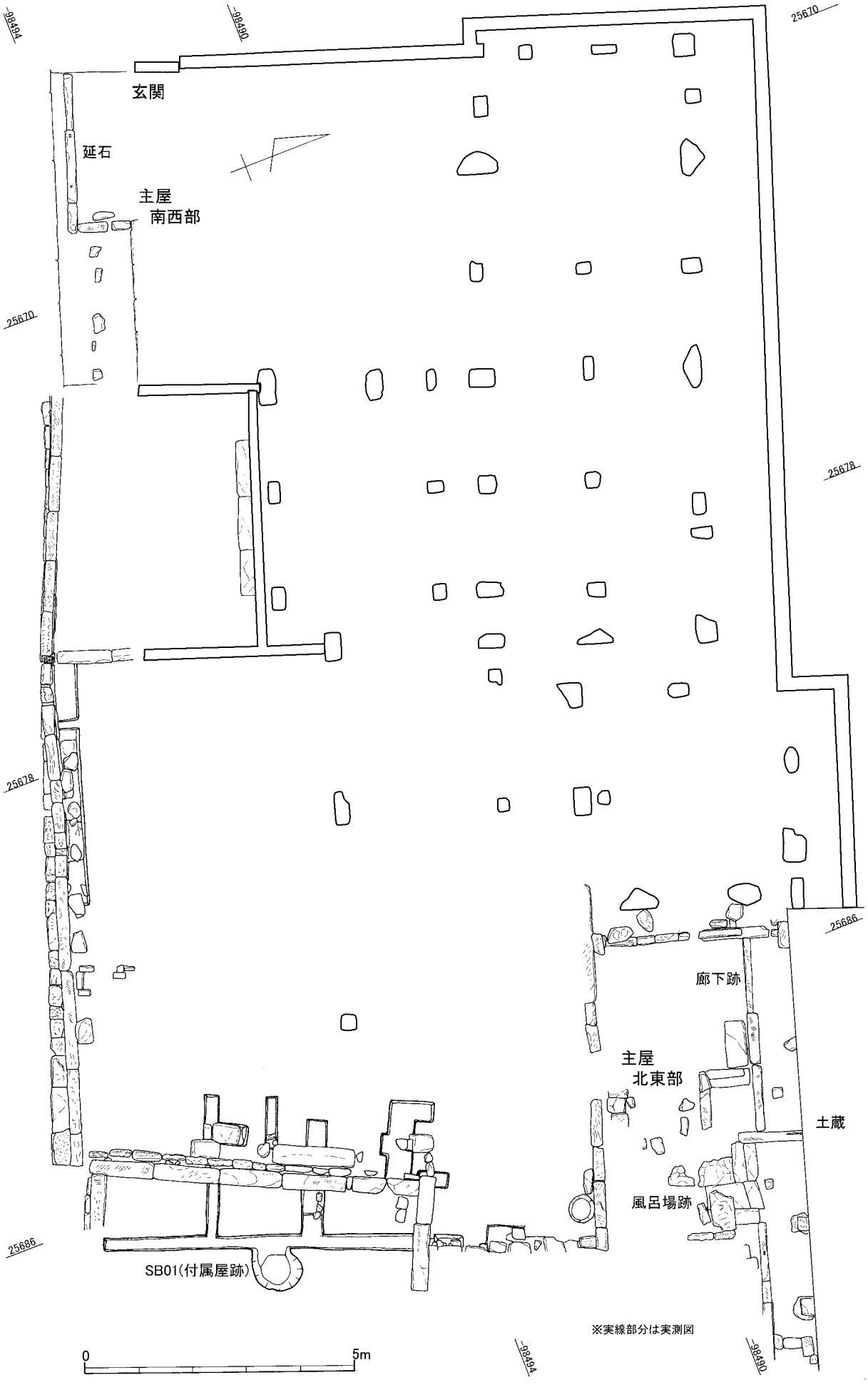


Fig.33　金森家地点遺構配置図 (S＝1／100)

窪んだ箇所があり、柱などを載せていた痕跡とみられる。検出位置より、現在の建物の前身建物の可能性があり、調査範囲を広げた際に建物の位置や規模・性格を検討する必要がある。また、東半部には礎石が４基あるが、これらは倉庫の根太を受けていたもので、現在でも使用されていた。

【主屋北東部】

主屋北東部は主屋と主屋北東の土蔵に挟まれた箇所で、主屋の修理工事に際して上屋を解体したところ、風呂場跡と廊下跡などが検出された。風呂場跡の南半は煉瓦を並べた上をモルタルなどで固めており、水抜きや被熱痕もあったことから風呂桶を置いていた部分とみられ、北半の石敷き部分が洗い場と判断される。風呂場跡の西側からも、延石が検出されており、洗面所跡などの可能性がある。北側と西側にも延石があり、廊下の基礎とみられる。

第２項　出土遺物 (Fig.35、Tab. 6)

出土遺物としては、主屋の東側と土蔵の南側から陶磁器類とガラス製品が出土した。94 は肥前の小碗で、外面に色絵による植物の文様がある。文様は一部が剥離している。95 は肥前磁器で、口径の小さい端反碗の蓋である。内面には口縁部に数珠のような文様と、体部に２本の圏線、見込みに文字が描かれている。外面はつまみと口縁部に圏線が引かれ、その中に文様がある。96 は瀬戸 (新製焼) の可能性がある。器種は小壺で、薬壺などとして使用された可能性がある。外面口縁部付近に穴の開いた小さい突起が２つ並んでおり、蓋をつけていたかもしれない。97 は石見系陶器の蓋である。98 は土師質土器で、底がなく円環状になっている。一部に抉りがある。99 ～ 101 はガラス製品で、いずれもスクリュー式の蓋がつく小瓶である。99 と 100 は外面に陽刻で「るり羽」「定量」の文字と、

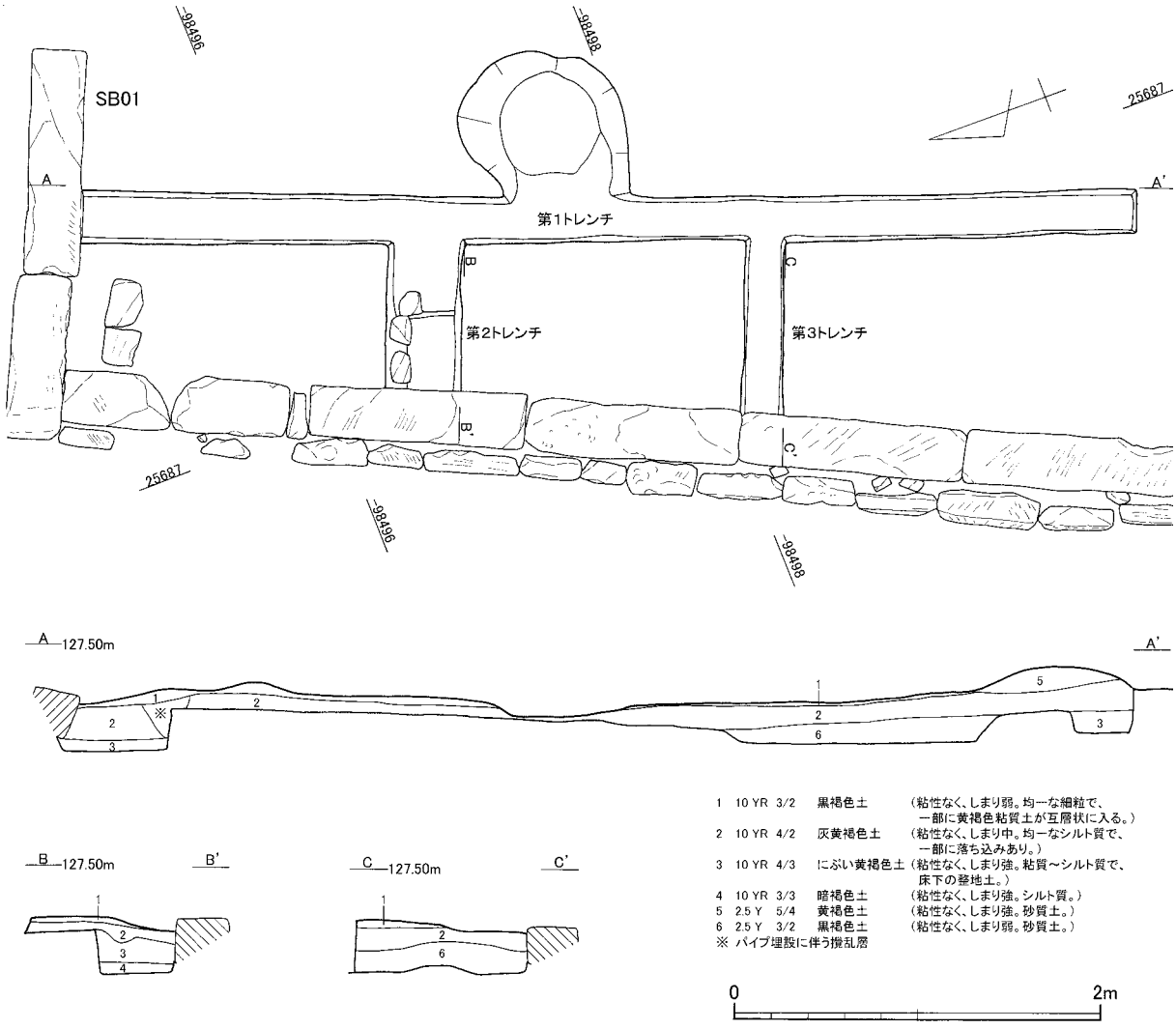


Fig.34　金森家地点トレンチ平面図・土層断面図 (Ｓ＝１／40)

「定量」の直上に線がある。100 のみ底面に「14」の陽刻がある。これらは表面に記載された「るり羽」の商品名から、山発産業株式会社 (現・シュワルツコフヘンケル株式会社) が明治 44(1911) 年に発売した白髪染の瓶とみられる。101 は外面全体に切子を意識した山形の成形がされている。体部の一部には平滑になっている箇所があり、ここには商品名が貼ってあったとみられる。底部には蜂のような陽刻があり、製造会社のロゴを示している可能性がある。

第 3 節　小結

本年度より金森家地点の発掘調査に着手し、礎石等の測量調査と、主屋の一部及び主屋東側の付属屋 (SB 01) の発掘調査を実施した。また、主屋内では保存修理の過程で掘削の必要が発生した箇所についても限定的に調査をした。

主屋内では現在の建物の前身建物に関連する可能性のある延石が検出されたほか、風呂場跡や廊下跡などの金森家の設備に関連する遺構も検出された。SB 01 は、一部に整地面が残っていたものの、後世の活動によって大きくかく乱されていることが確認された。金森家地点については、来年度も主屋・土間及び床下の調査を継続して実施する予定である。

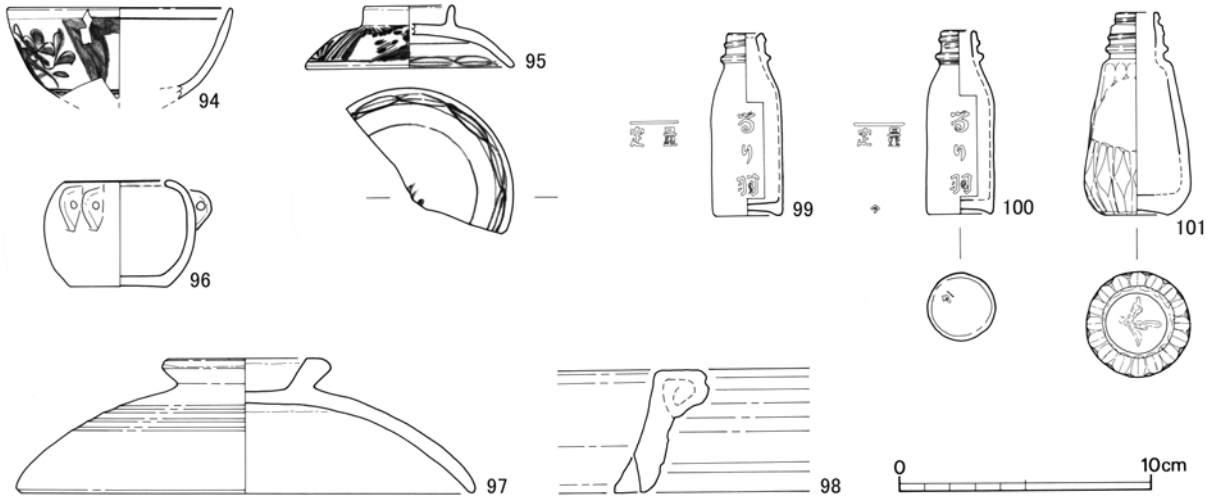


Fig.35　金森家地点出土遺物実測図 (S＝1／3)

Tab. 6　金森家地点出土遺物一覧表

挿図番号	出土地点	種　別	器　種	大きさ (cm)			色　調	成形・調整・文様	備　考
				口径	器高	底径			
94	蔵前表土	肥前磁器	小碗	(8.9)	(3.6)		透明釉	色絵	
95	蔵前表土	瀬戸	蓋	(8.2)	2.5	つまみ径 (3.4)	透明釉		
96	裏表土	瀬戸	小壺	3.8	4.2	3.8	透明釉		
97	裏表土	石見系陶器	蓋	(18.0)	5.4	つまみ径 6.0	長石釉		
98	裏表土	土師質土器	不明		4.9		浅黄橙色		
99	裏表土	ガラス容器	瓶	1.1	7.2	2.6		陽刻	
100	裏表土	ガラス容器	瓶	1.1	7.4	2.4		陽刻	
101	裏表土	ガラス容器	瓶	1.4	8.0	2.4			

第５章　本年度の試掘・立会調査

第１節　平成 28 年度の調査地点 (Fig.19)

伝建地区内においては、地面の掘削を伴う現状変更行為について、小規模な場合には、試掘調査、工事立会で対応しており、毎年数件程度の調査を実施している。

本年度は「大森区域」内を中心に合計７箇所の調査を実施した。このうち、浄化槽埋設工事に伴うものが５件 (旧川上家地点、小さな店地点、峰山家地点、群言堂地点、宗岡家地点)、水路建設によるＵ字溝の埋設工事に伴うものが２件 (加藤家地点、豊栄神社地点) である。

ここでは、遺構が検出された峰山家 (旧田中家) 地点と旧川上家地点について報告する。

尚、宗岡家地点の立会調査については第３章宗岡家地点の調査で概要を報告している。

第２節　峰山家 (旧田中家) 地点の調査

第１項　調査の経緯と建物の来歴

峰山家住宅は、伝建地区内でも「大森区域」の南側に当たる駒の足地区に所在する。町並みの中央を縦断する大森市街線の東側に通りに対して西面して建てられており、間口は３間半である。

元は田中家の所有で、平成12年度の解体修理に伴って主屋内の発掘調査をしており、この時点では当時の所有者である田中家地点としていた場所である。

その後、所有が峰山氏に移り、この度、主屋背後に別棟を建設することとなり、浄化槽埋設に伴って立会を行なうこととなった。主屋背後の空き地には、近年まで建物が建っており、その礎石の一部が露出している状態であった。調査は当初浄化槽埋設部分の立合のみを行なう予定であったが、建物の建築によって露出している礎石の除去が避けられないことから、浄化槽の立会と合わせて礎石の測量調査を実施することとした。また、所有者の変更により、地点名についても峰山家 (旧田中家) 地点とした。

主屋については平成 12 年度の修理に伴う調査で発見された板図により、安政２(1855) 年に建築されたものと推定されている。平成７(1995) 年頃までは、主屋の奥側に切妻屋根の台所が繋がっており、土蔵へ至る渡り廊下とともに崩壊していたため取り壊されている。

裏庭の南側には便所風呂棟が建っており、平成 12 年時点では残存していたが、その後取り壊されている。

昭和 49 年度に実施された「石見銀山御料　大森の町並み調査」(以下「49 年調査」という) では町並み全体の立面・平面図、断面図等が作成されており、報

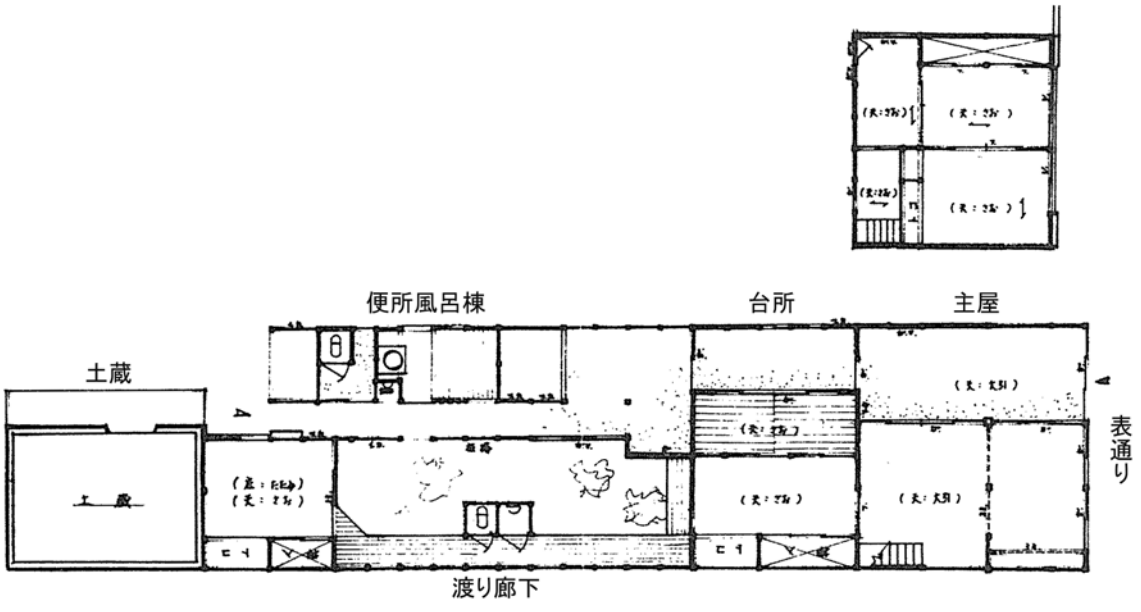


Fig.36　旧田中家建物平面 (昭和 49 年度調査時)

※「石見銀山御料　大森の町並み調査報告書」より転載　一部加筆

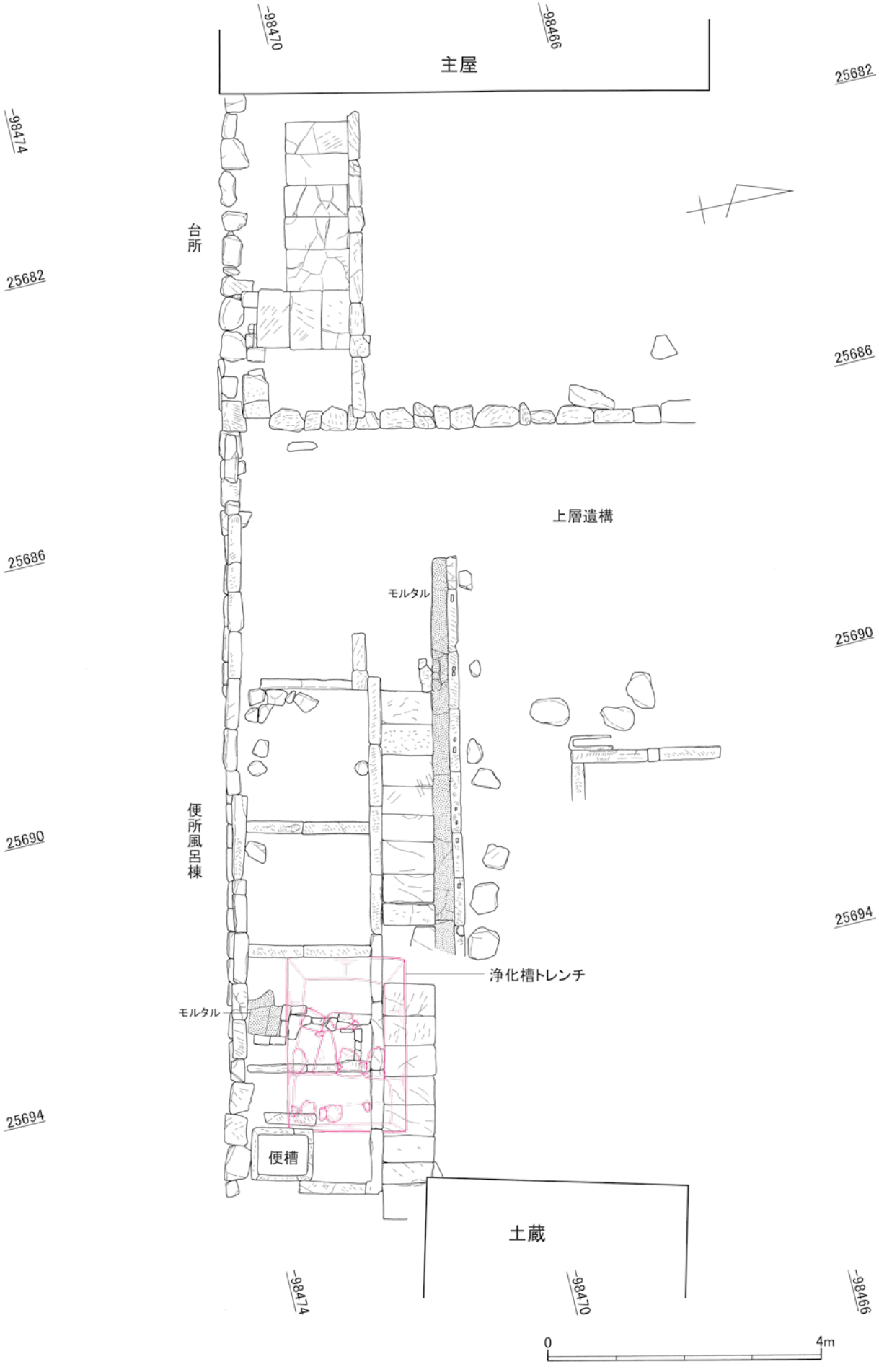


Fig.37　峰山家 (旧田中家) 地点遺構配置図 (S＝1／80)

告書には旧田中家の図面も掲載されている。この報告には前述の台所、渡り廊下、便所風呂棟が記載されており、昭和 49 年時点での間取りを知ることができる(Fig.36)。

尚､建物等の名称は平成 15(2003) 年３月発行の『大田市大森銀山伝統的建物跡群保存地区保存事業概報 56』に依った。

第２項　検出遺構（Fig.37・38）

【上層遺構】

調査前から遺構の一部が露出しており、現存建物に付属する建物と考えられたことから上層遺構とした。

表土下すぐに遺構が検出され､表土は南側では薄く、北側にいくほど厚く堆積していた。

西側で検出した遺構は、前述の台所建物と考えられ、北端の一部を除いた建物の大半を検出した。規模は南北約 6.6 m、東西約 4.5 mで、49 年調査の建物とも一致する。南側には、延石と石列で区画された部分があり、土間部分と一致する。この土間部分には、長方形に成型された延板状の石を敷き詰めており、石敷きとなっていたことが明らかとなった。石は８個を検出し、西側から５個は北の延石に接するように長軸を南北方向にして並べられ、これに接するように長軸を東西方向にして３個が南北に並べられている。石敷きの石材は福光石と思われ、長辺約 90㎝、短辺約 45㎝であった。土間北側の延石部分には方形や長方形の礎石が置かれ、束柱の位置と推定される。間隔は概ね 182㎝で、主屋から建物端部まで 4.5 mであることから台所建物の奥行は２間半であったことになる。

南側では便所風呂棟と考えられる建物の礎石を検出した。建物は南側の側溝に沿って建てられており、規模は、東西約 7.4 m、南北約２mである。礎石はほとんど延石が使われ､延石の長さは約90～100㎝となっている。建物は４部屋に分かれており、西側の２部屋は平面形が一辺２m程度の正方形を呈する。東側の２部屋は風呂場、便所と考えられる。風呂場には東側で内面が円弧状に加工された石材が検出され、この位置に風呂釜を設置していたと考えられる。円弧状に加工された石材内面には煤及び炭化物が付着し、形状等からいわゆる五右衛門風呂が設置されていたものと推定される｡風呂釜の固定には一部煉瓦も使用されていた。風呂釜の南西側ではモルタルによって張られた床が一部残存しており、洗い場であったと考えられる。便所遺構では南東隅で便槽と考えられる遺構を検出している。便槽の平面形は長方形をしており、内法で南北 75㎝、東西 60㎝である。凝灰岩系の石材を刳り抜いて作られており、壁面の厚さは約８㎝で、深さは 60㎝程である。この便所風呂棟は、構造及び施設の位置等 49 年調査の報告書の記載と完全に一致している。

便所風呂棟の北側では、建物に接して石敷きが検出された。石材は長軸を南北方向に向け、建物に沿って東西に並べられている。検出されたものは 17 基であるが、中央付近で一部抜き取られている部分があるので、本来は 18 個以上あったものと推定される。石材の幅は 45㎝と台所で使用されたものと同様であるが、長さは 75㎝とやや短い。また、２箇所に幅 30㎝の石材が使用されており、石敷きの長さ調整に使われた可能性がある。

石敷きの北側では幅 22 ～ 25㎝の溝を検出し、さらにその北側ではホゾ穴の空けられた延石が東西方向に並んで検出された。この延石は 49 年調査の報告に記載されている板塀の基礎と考えられる。溝の底面にはモルタルが張られているが、サブトレンチを設定して掘り下げたところ、石敷き上面から約 20㎝下層で溝の底面と思われる硬化面が検出されたため、本来は素掘りの溝であったものを後世にモルタルで舗装したものと判断した。これらの石敷きと溝は 49 年調査の報告には記載が見られない遺構である。

北側では、南北方向に延びる延石とそれに直角に接続する延石を検出した。49 年調査の報告書に記載されている渡り廊下と便所の一部と考えられ、南北に延びる延石中央付近には方形の礎石があり、便所の柱が立っていたものと推定される。また、延石に接して西側には､南北方向に幅約 20㎝の石樋も埋設してあった。

便所と板塀の延石との間には飛び石と考えられる上面が平らな石が並べられて設置されている。また、庭石と思われる自然石も配されており、庭の一部と推測される。

これら上層で検出した遺構について、年代を示す遺物が出土しておらず、建築年代は明確にし得ないが、主屋の建築年代が安政２(1855) 年であることから、

幕末から明治期にかけて建築されたと考えるのが妥当であろう。

【浄化槽トレンチ】（Fig.37・38）

峰山家の新築工事に当たっては、建物の裏手に浄化槽の埋設工事が行われることとなり、工事に伴って立会調査を行った。浄化槽埋設の位置は土蔵の南西であるが、掘削を開始すると、旧田中家の便所風呂棟の遺構が検出され、掘削位置には便槽も存在した。このため、極力地下遺構に影響が及ばないよう当初計画からやや西側に位置をずらして掘削を行うこととした。除去が避けられない延石、石敷きについては、検出後、写真撮影及び測量を行った後除去して掘削を行った。

掘削の規模は、東西約 2.5 m、南北約 1.7 mで、掘り下げを行うと下層で遺構が検出されたため、名称を浄化槽トレンチとした。

【層序】

掘り下げを行うと、表土下８㎝で黄灰色土及び淡黄色土が検出され、便所風呂棟に伴う整地層と判断した。

４～７層は造成土と考えられる。７層の橙色土は混入物がほとんど見られず、造成のために搬入されたものと推測され、短期間に造成されたものと推定される。また、西側より東側が厚く堆積しており、東端部で厚さが 60㎝程ある。

11 層の黄橙色土は石列に伴う整地層と考えられ、上面は硬くしまっている。12 層は石列に伴う造成土で硬くしまる。

13 層・14 層は敷地の嵩上げに伴う造成土と考えられる。特に、13 層は厚く堆積しており、厚い部分で 50㎝以上ある。

15 層の黒褐色土はよくしまった安定した層で、上面では層の切り替わりが見られ、遺構の可能性が考慮されたが、調査範囲が狭く明確な遺構検出には至らなかった。広範囲で検出を行えば、遺構が検出される可能性がある。16 層はその造成土と考えられる。

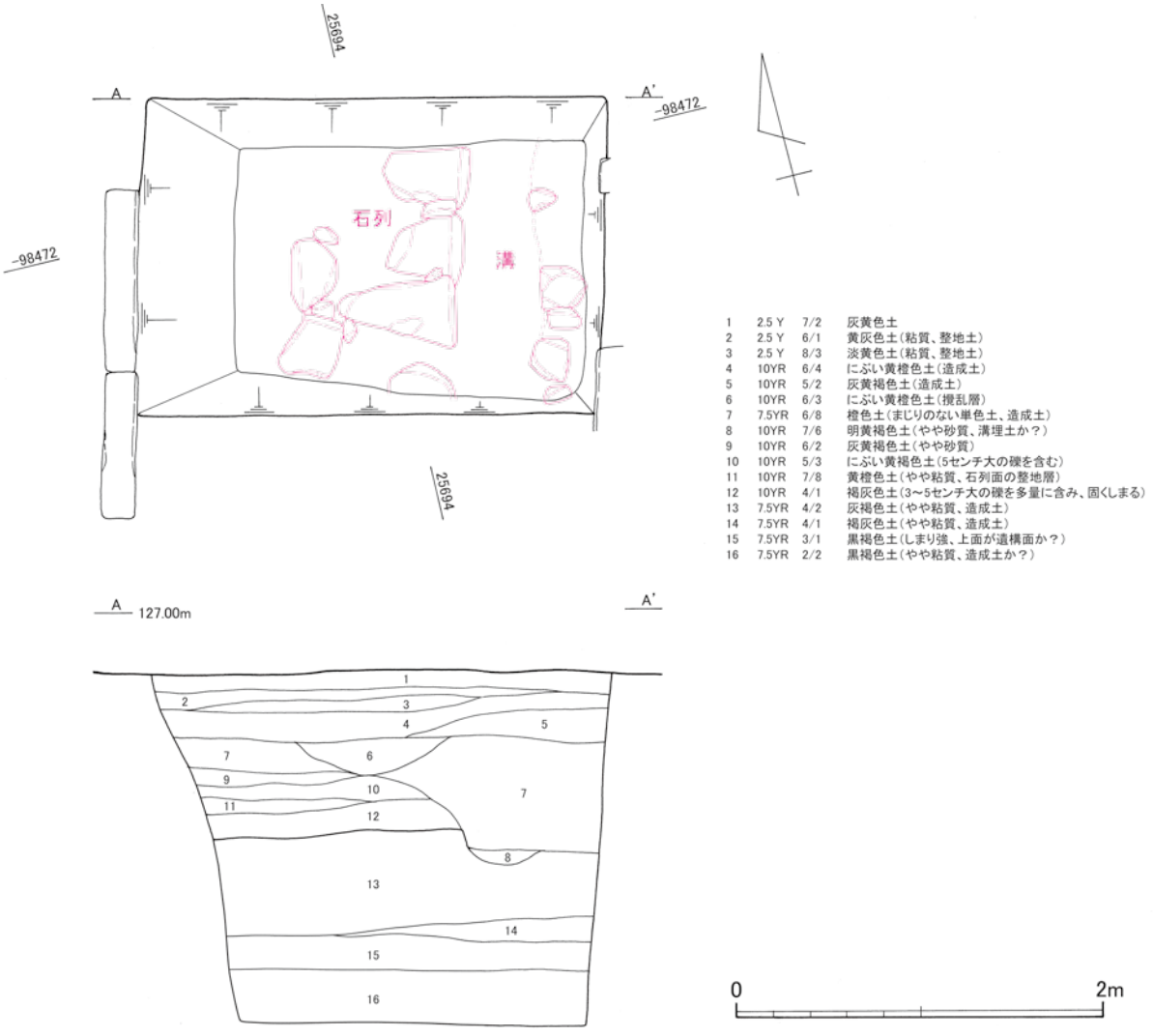


Fig.38　峰山家 (旧田中家) 地点トレンチ平面図・土層断面図 (S＝1／40)

Tab. 7　峰山家 (旧田中家) 地点出土遺物一覧表

挿図番号	出土地点	種　別	器　種	大きさ (cm)			色　調	成形・調整・文様	備　考
				口径	器高	底径			
102	上層	石見焼	植木鉢	(14.2)	(6.1)		長石釉		
103	上層	肥前陶器	鉢		(4.5)		透明釉 白土化粧	刷毛目	
104		石見焼	皿？		(1.4)		長石釉		
105	灰褐色粘質土	土師質土器	皿		3.4		淡橙色		
106	最下層	土師質土器	皿		2.6		にぶい黄橙色		

掘削は、表土下約２ｍで予定の深度に達したため終了した。

【検出遺構】

表土下約 70㎝で石列を検出した。石列は敷地割りと直交するように南北に並んでおり、東側に面を持っている。石材の大きさは 40㎝程度で、上面が平らに整えられている。このことから、建物の基礎か敷地を区画する石列と考えられるが、検出範囲が狭く明確にはできない。

また、石列の東側には段差があり、直下では幅 30 ～ 45㎝の溝状遺構を検出した。深さは８㎝程度で浅く、埋土と考えられる８層はやや砂質の明黄褐色土であった。溝の東側でも、溝肩部に沿って礫が検出されていることから、溝東部にも石列が存在していた可能性がある。位置、方向、規模などから建物の雨落ち溝か、排水溝と考えられるが、前述のとおり明確にはできない。

石列に伴うと考えられる整地層は 11 層であるが、その下層の 12 層は礫を多量に含んだ固い層で、他の層とは明瞭に異なる。石列は基本的にこの層に構築されていることから、石列を建物基礎と仮定すれば、嵩上げを兼ねた地業と考えることもできる。

11 層の上層には、9 層及び 10 層が堆積しているが、石列部分を堺に東側では検出できないことから、石列が使われなくなって以降も、この位置で段差は継続して残存していたものと推測される。

石列の時期については、年代を示す遺物が出土していないため不明であるが、上層遺構が幕末～近代と考えられることから江戸中期～後半の可能性がある。

掘り下げの最下層は黒褐色土となっているが、地表下２ｍまで掘り下げても、17 世紀初頭の層までは達しておらず、当該期の状況は不明である。周辺地域の調査成果を待ちたい。

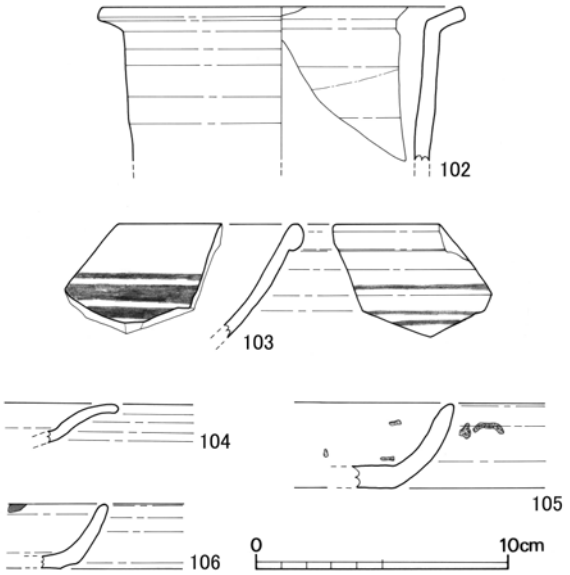


Fig.39　峰山家 (旧田中家) 地点出土遺物実測図
(Ｓ＝１／３)

【出土遺物】(Fig.39、Tab. 7)

102 ～ 104 は表土から出土したもので、102 は石見焼の植木鉢である。外面及び内面の上部にのみ長石釉がかかり、口縁部は強く外反する。103 は肥前陶器の鉢で、口縁部は玉縁となる。内外面には白化粧土による横方向の刷毛目がみられ、透明釉がかかる。104 は石見焼の皿と考えられ、長石釉がかかる。口縁部は大きく開き、底部付近に段差を有する。胎土は緻密で灰色を呈する。105 は、13 層灰褐色土から出土したもので、土師質土器の皿である。やや大ぶりで、底面の切り離しの痕跡は不明である。焼成はやや不良である。106 は、最下層から出土したもので、土師質土器の皿である。105 より小型で器壁も薄い。底面は糸切りの痕跡がわずかに残る。焼成は良好である。

出土した遺物はいずれも表土及び包含層からの出土で、遺構等の年代を示すものではない。

第３節　旧川上家地点の調査

第１項　調査の経緯と周辺環境

旧川上家は伝建地区内でも「大森区域」の中央付近の新町に所在する。表通りである大森市街線の東側に東面して建てられている。

今回の調査は、改築工事の一環として浄化槽の埋設工事に伴って工事立会を行なったもので、上層及び下層において遺構が検出されたため、その都度協議を行ない、遺構を避けて掘削位置を移動して遺構の保存を行なった。このため、工事日程に支障をきたさないよう、検出された遺構については詳細な測量は行なわず、写真記録のみに留めることとした。

浄化槽埋設位置は、敷地の裏手で背後の岩山が迫る場所で、掘削を行うと岩盤に当たることも予想された。この岩山は、調査地の南で東側に細長く張り出しているが、先端付近では石材を切り出した痕跡が確認されており、石切り場遺構と認識されている。

また、岩盤を挟んだ南側に所在する森山家地点では包含層からではあるが、17 世紀初頭の遺物が大量に出土しており、表通りの向かい側に位置する旧河島家地点でも 17 世紀初頭の遺物が出土している。このように、付近では 17 世紀初頭の遺物が多く出土している場所で、17 世紀初頭から町並みが形成されていたと推測されている地域である。

第２項　検出遺構

掘削範囲は、東西方向に長い長方形とし、規模は東西 2.8 m、南北 1.8 m程であった。掘削を開始すると地表下約 50㎝で石列を検出した。

石列は表通りに垂直となるよう東西方向に並んでおり、南側に面を有していた。石材は方形状に荒く成形されており、上面も平らにしてあった。石列の検出した長さは約２ｍで、石材は４基のみであるが、建物の基礎か敷地の境界と考えられる。

さらに、石列には焼土及び炭化物が密着しており、火災により被災した可能性が高い。また、この焼土層及び石列検出面からは肥前陶磁編年でⅤ期に相当する広東碗などが出土しており、1800 年前後の遺構と考えられる。

こうしたことから、この遺構は寛政 12(1800) 年に発生した大森大火により被災している可能性が高い。

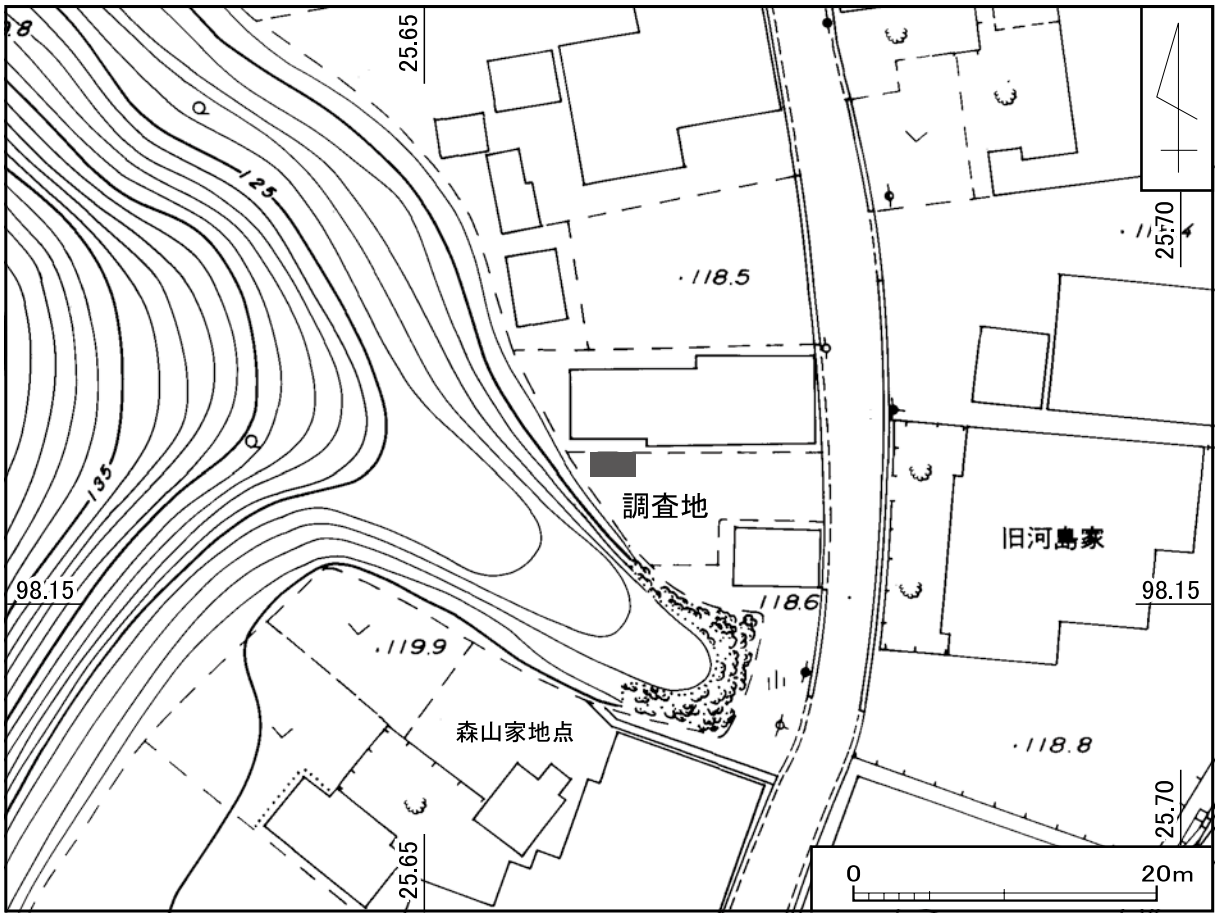


Fig.40　旧川上家地点調査区配置図 (Ｓ＝１／500)

こうした状況を踏まえ、協議の結果、石列は現状保存を図ることとし、掘削は位置を南側に約 50㎝ずらして実施することとした。

掘削を進めると、西端で岩盤が検出された。岩盤を精査すると表面に加工痕が認められ、垂直に削られていることが判明したので、掘削位置を東側に約 40㎝ずらして、岩盤の壁面を検出しながら掘り下げを継続した。その結果、表土下約 85 ～ 90㎝で黄褐色粘質土による整地層が検出された。この面で遺構の確認を行なったが、掘削範囲内では遺構は検出されなかった。このため、掘削を継続した。岩盤はこの面で幅 30 ～ 40㎝のテラス状となっていることが確認された。こうしたことから、岩盤は敷地の造成に合わせて背後の岩盤を垂直に削り取ったものと推定される。この面では、遺物は出土しておらず、時期については不明である。

岩盤を避けてさらに掘削を続けると、表土下約 145㎝で黄褐色粘質土の整地面を確認した。この面で精査を行なったところ、岩盤直下の位置で直径約 90㎝の円形の掘り込みを確認した。遺構の内容確認のため半截して東側を掘り下げたところ、ほぼ垂直に掘り込まれた遺構で、深さは約 50㎝であった。遺構は、岩盤直下という検出位置や、形状、規模に加えて、調査中も湧水があったことなどから水溜遺構 (ＳＥ 01) とした。埋土は暗褐色土の単層で、埋土内からは 17 世紀初頭の美濃焼､肥前陶器､朝鮮王朝陶器などが出土した。

遺構が確認されたことで、協議を行った結果、掘削位置をさらに東側に 1.5 mずらして実施することとなった。掘り下げを継続すると、水溜遺構検出面の下層で灰色粘質土等を検出したが、明確な遺構は確認できなかったため、掘削を継続し、表土下約２mで予定深度に達したため掘削を終了した。

旧川上家地点水溜遺構検出状況 (北東より)

この調査により、上層では大森大火に関連すると推定される石列を確認した。また、下層では 17 世紀初頭の水溜遺構及び遺構面などを確認した。前述のとおり、付近では当該期の遺物は多数確認していたが、今回の調査で遺構と遺構面を確認できたことは大きな成果と言える。

第３項　出土遺物（Fig.41・42、Tab. 8）

107 は上層表土から出土したもので、石見系陶器のすり鉢である。来待釉がかけられ、口縁部のすり目はなで消してある。108 ～ 115 は石列に伴う焼土層及び遺構面から出土したものである。108・112 は肥前磁器の広東碗で、セットにはならないが、碗と蓋である。111 は肥前磁器の蓋で、外面にはコンニャク印判による施文が３箇所みられる。109 は肥前磁器の瓶と思われ、内面に釉薬はかけられていない。110 は肥前磁器の筒型碗で、外面には菊花文が描かれている。113 は肥前陶器甕の口縁部である。114・115 は土師質土器で、114 は焙烙の口縁部、115 は焜炉の底部と考えられる。これらの遺物は寛政 12(1800) 年の大森大火に伴って廃棄されたものと考えられ、廃棄年代を明らかにできる貴重な一括資料となる。116 は大火層より下層で出土したもので、肥前磁器の瓶である。117 は排土からの出土であるが、肥前磁器の瓶である。表面の釉薬が荒れており、火を受けている可能性がある。

118 ～ 122 は水溜遺構 (ＳＥ 01) から出土したものである。118 は美濃焼の丸皿で、灰釉がかかり、内面見込みは内禿となっている。高台内には輪トチンの痕跡も残る。119・120 は肥前陶器の皿で、119 には内面胎土目痕が残る。121 は肥前陶器の大皿で、白泥と銅緑釉が掛け分けられている。内面及び高台に砂目痕が残る。口縁部は意図的に歪める意匠が見られる。122 は朝鮮王朝産の陶器で、甕の口縁部と底部である。赤褐色を呈し、無釉で内外面にはタタキ痕が残る。頚部には２条の凸帯が巡る。慶尚南道産と考えられる。これらの遺物は、石見銀山遺跡では貴重な単一の遺構内からの一括遺物で、17 世紀初頭の基準資料となり得るものである。

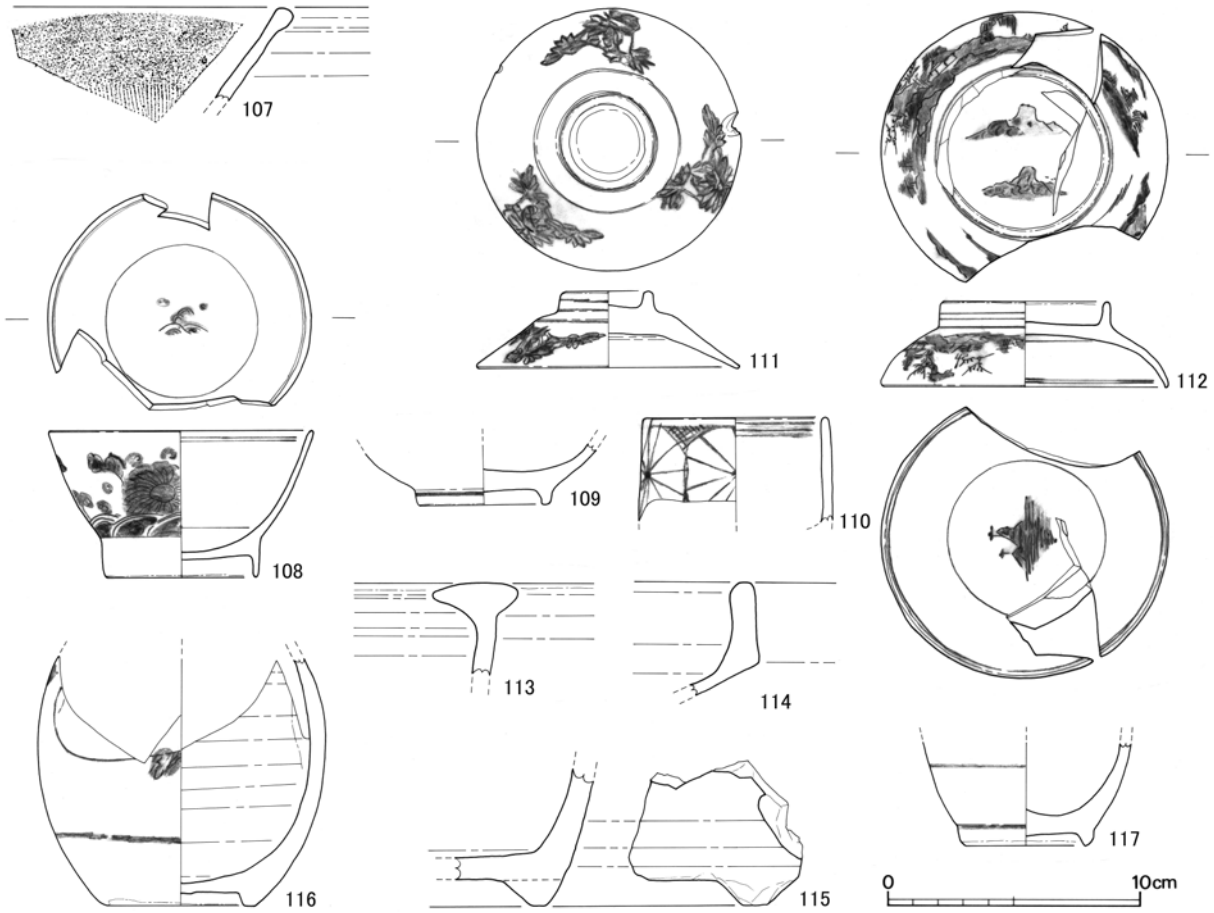


Fig.41　旧川上家地点出土遺物実測図Ⅰ（S＝1／3）

Tab. 8　旧川上家地点出土遺物一覧表

挿図番号	出土地点	種　別	器　種	大きさ (cm)			色　調	成形・調整・文様	備　考
				口径	器高	底径			
107	表土	石見系	すり鉢		(3.7)		来待釉		
108	大火層	肥前磁器	碗	10.4	5.9	5.9	透明釉		
109	大火面	肥前磁器	瓶		(2.4)		(外) 透明釉		
110	大火層	肥前磁器	碗 (筒形)	(7.1)	(4.2)		透明釉		
111	上層（大火層付近）	肥前磁器	蓋	10.3	3.1	つまみ径 3.4	透明釉	コンニャク印判	
112	大火層排土	肥前磁器	蓋	11.2	3.4	つまみ径 (6.5)	透明釉		
113	大火層	肥前陶器	甕		(3.6)		褐釉		
114	大火面	土師質土器	焙烙		(4.5)		にぶい橙色		
115	大火層	土師質土器	焜炉		(5.5)		灰白色		
116	中層（大火層下）	肥前磁器	瓶		(9.9)	5.9	透明釉		
117	排土	肥前磁器	瓶		(4.1)	(4.8)	透明釉	赤絵	
118	最下層 井戸内 (ＳＥ01)	美濃	皿	(10.2)	2.1	(5.7)	灰釉	輪トチン内禿	
119	最下層 井戸内 (ＳＥ01)	肥前陶器	皿	(12.8)	3.1	(4.8)	灰釉 褐釉	胎土目	
120	最下層 井戸内 (ＳＥ01)	肥前陶器	皿	12.5	3.4	5.2	灰釉		
121	最下層 井戸内 (ＳＥ01)	肥前陶器	皿	(24.0)	5.7	9.0	透明釉 銅緑釉	砂目	
122	最下層 井戸内 (ＳＥ01)	朝鮮陶器	甕	(29.6)		(19.6)		タタキ	

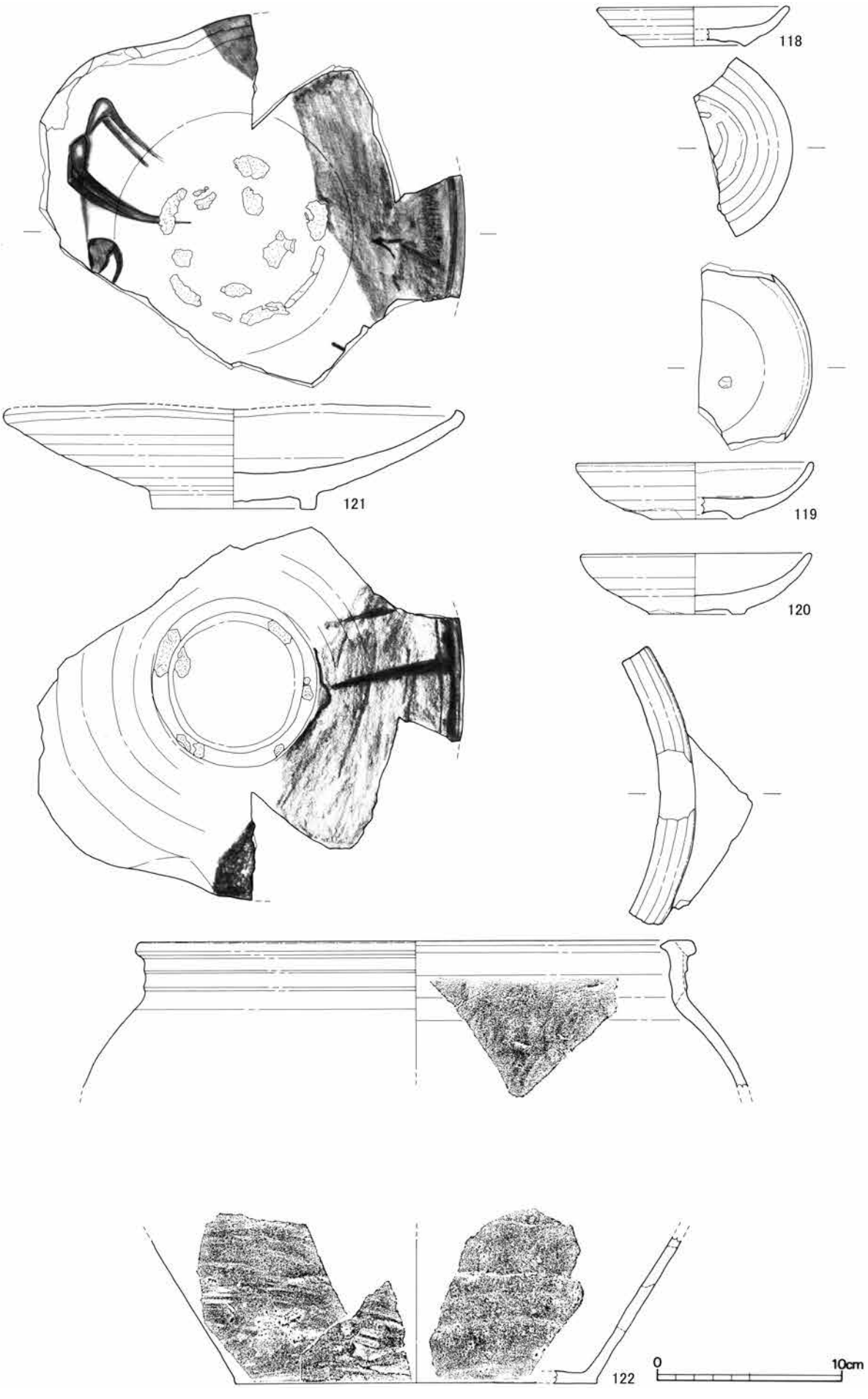


Fig.42　旧川上家地点出土遺物実測図Ⅱ（Ｓ＝１／３）

第６章　総括

第１節　昆布山谷地区

昆布山谷地区の発掘調査は本年度で７年目となった。昨年度までは主に谷筋を挟んで東西に広がる平坦面を対象として発掘調査を実施し、平坦面の利用状況が明らかとなってきていた。本年度は平坦面の調査は継続しながら、新たに道沿いの調査に着手した。

第５地点においては、昨年度から調査範囲を広げたことによってⅠ区の形成過程の一部が明らかとなった。特に、第３遺構面では選鉱に関連する可能性のある遺構とともに、大量に廃棄されたズリやユリカスが出土するなど、昆布山谷における鉱山活動の様相を解明する上で、重要な資料が得られた。

第６地点では谷筋から尾根に登るための道の一部とみられる岩盤加工遺構ＳＸ 25 が検出された。

第８地点では石垣遺構ＳＷ 06 が検出され、昆布山谷の谷筋は石垣によって道と平坦面が明確に区分されていたことが判明した。谷筋には石垣の一部が点々と露出していることから、本来は昆布山谷の広い範囲が石垣によって区画されていた可能性がある。

以上のように、本年度の調査では居住や生産に関わる遺構のみでなく、谷筋や尾根上に続く道に関連する遺構も検出され、昆布山谷の景観や変遷を考察する上で重要な資料を得ることができた。以下では各調査地点における成果をまとめる。

第１項　第５地点

第５地点の発掘調査は３年目となった。本年度は、昨年度ＳＸ 02 の東側に設定したトレンチを拡張し、Ⅰ区の広い範囲を対象として実施した。発掘調査によって、第３遺構面では選鉱に関係する可能性があるＳＫ 03 が検出され、その周辺には選鉱に伴って排出された可能性の高いユリカスが多く堆積していた。そのため、第５地点Ⅰ区は、第３遺構面が機能していた時期には選鉱関連の作業場として利用されていたとみられる。昨年度の発掘調査では、製錬に関連する可能性のある遺構が検出されていたが、今年度は火を使用した遺構が見つかっていないことから、時期によって土地の利用方法が変化していたようである。

調査範囲を拡張したことによって、Ⅰ区東西方向の堆積状況が明らかとなった。その結果、第３遺構面が機能しなくなった後には、ズリなどの鉱山廃棄物の集積場となっていたことが判明した。今年度の調査成果を踏まえてⅠ区の形成過程を整理すると、おおよそ５段階に分けることができる。

第１段階は岩盤を利用していた段階である。平成 26 年度の調査によってⅠ区の最下部では岩盤加工遺構ＳＤ 02・ＳＸ 05 が検出されており、Ⅰ区の利用が始まった当初は地表面に広がる岩盤を利用していたことが確認されている。ＳＤ 02 内からは 17 世紀前半の遺物が出土していることから、江戸時代の初め頃には利用が始まっていたようである。

第２段階は平坦部の岩盤が整地や造成によって埋没し、第３遺構面が形成された段階で、ＳＸ 17 ～ 19 が検出されていることから、製錬などの火を用いた活動が行われていたと想定される。

第３段階はⅠ区がさらに整備された段階である。選鉱における水溜めの可能性があるＳＫ 03 が検出されたことや遺構面上に大量のユリカスが廃棄されていたことから、この段階ではⅠ区で選鉱場が行われていた可能性がある。第３遺構面直上からは九州陶磁編年のⅢ期に相当する呉器手碗が出土していることから、17 世紀後半頃に形成された可能性がある。

第４段階はユリカスやズリなど鉱山活動で排出された廃棄物の集積場となっていた段階である。廃棄物の中でもズリはドーム状に積み上げられている。

第５段階は集積した廃棄物の上を造成し、東側に石垣を構築して平坦面として利用していた段階である。出土遺物より、現在の地形は 19 世紀以降に形成されたと考えられる。造成された後の平坦面では礎石建物跡ＳＢ 01 が検出されているが、ＳＢ 01 内やその周辺からは炉跡や選鉱施設が検出されていないため、生産活動に関わる遺構でないと考えられる。

Ⅰ区の形成過程は、これまでの発掘調査成果から現段階では以上のように整理できる。ただし、第３遺構面においては上下で遺構が検出されており、その間に

は複数の硬化面があることも確認できていることから、さらに細分できる可能性もあり、来年度の課題としたい。

第３遺構面上面から出土したユリカスは色調や粒子の大きさなどによって分類ができ、これは排出された坑道・鉱脈の違いや選鉱過程の違いを反映していると考えられる。また、ユリカスの一部には緑錆を吹いており、銅を多く含むものあることから、銅製錬も行なっていた可能性がある。それらのユリカスについては、今後は肉眼的な分類に加えて理科学的な成分分析等によって、選鉱過程や排出された坑道の違いなどの解明が期待される。

第２項　第６地点

第６地点では岩盤加工遺構ＳＸ 25 が検出された。ＳＸ 25 の規模や内容については第４節第３項で述べたとおりで、尾根上の長楽寺へと向かうための参道の一部と考えられる。岩盤の最下部に至っていないため、ＳＸ 25 の本来の規模及び形成された時期は明らかにできていないが、江戸時代中ごろに作成された文書の中には当時の昆布山谷、特に長楽寺周辺の様相が記載された絵図 (Fig.43) があり、ＳＸ 25 の所在地についても記載がある。当該文書は『安田家文書』に所収されており、正徳６(1716) 年に作成され、長楽寺から御役御衆中宛に提出されたものである。その内容は、水害によって石垣が流失し、不明瞭となった土地境を証明するための訴訟文と絵図で、絵図には長楽寺周辺の様相が詳細に描かれている。

平成 25・26 年に実施した分布調査の際に、現在の昆布山谷との照合を行なっており、土地区画や道の位置などがほとんど一致することを確認している。絵図の中で谷筋の道と尾根上に登る道との結節点付近には「長楽寺下坂口」と記載されており、これがＳＸ 25 であるならば、ＳＸ 25 は少なくとも 1716 年には存在していたことになる。また、ＳＸ 25 の廃絶時期については、ＳＸ 25 が長楽寺へと向かうための参道の一部であるならば、長楽寺の廃絶とともに道としての機能を失ったと考えることができる。

長楽寺は明治時代の初め頃に、清水寺に合併したとされている [(1)]。このことから、ＳＸ 25 も明治時代の初め頃までは道として機能していた可能性が高い。以上のことから、ＳＸ 25 は少なくとも江戸時代の中ごろから近代の初めにかけて利用されていたと考えらえる。また、ＳＸ 25 の下部に設定したトレンチでは複数の硬化面や、道を区画するための石列の一部が確認されており、ＳＸ 25 の下部が水害などによって埋没した後には、その上面を道としていたとみられる。

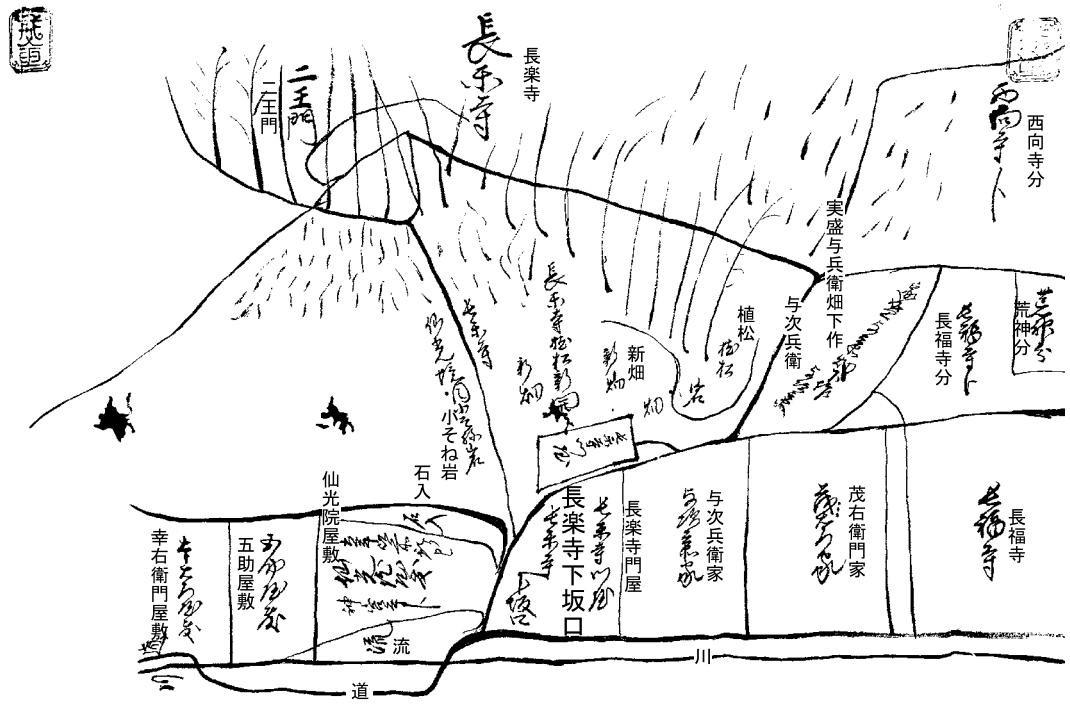


Fig.43　長楽寺周辺絵図

第３項　第８地点

第８地点は本年度より新たに着手した調査地点で、トレンチ調査によって道と平坦面を区画する石垣遺構（ＳＷ06）が検出された。ＳＷ06は高さが最大で２m程度ある大きな石垣で、昆布山谷の道は現在よりもかなり低い位置にあったことが判明した。トレンチの埋土には大小の礫が多く含まれていたことから、水害などによって埋没したと判断される。

ＳＷ06の最下面からは江戸時代後半の遺物がわずかに出土しているが、堆積土中に含まれる遺物はほとんどが近代以降のものであることから、石垣と道は江戸時代の内に形成されたが、近代以降に発生した水害によって埋没したようである。堆積土中には道路面と機能していた可能性のある面がいくつかあり、水害後には埋まった部分を限定的に復旧して道としていたことが窺われる。

江戸時代の堆積層がないことは、おそらく江戸期には水害が発生したとしても復旧が十分に行われていたが、近代以降には復旧が部分的になったことを反映していると考えられる。

調査トレンチの最下部付近で出土した木舞は、出土状況より平坦面上の建物が崩れた痕跡とみられる。出土層位より、建物が崩壊した年代は近代とみられるが、堆積層内でも下位からの出土であることから、建物自体は江戸時代に建てられていたと考えられる。また、木舞の出土によって、平坦面上の建物には土壁があったことが判明した。このことは昆布山谷地区における景観を考察するに当たって非常に重要な発見といえる。

第２節　宗岡家地点

宗岡家地点の発掘調査は本年度で３年目となり、敷地内における工事対象範囲の調査は全て完了した。本年度の発掘調査は主屋の床下と土間を対象として実施し、宗岡家の台所設備に関連する遺構や、宗岡家が建てられる前の建物の痕跡が検出された。

主屋の床下から検出された建物遺構（ＳＢ03）は東西５間半、南北５間の礎石建物で、一部では犬走りや溝なども検出された。また、建物の東側には石敷き遺構が検出された。第３章でも指摘したように、建物の位置や規模が文献資料の記録と一致することから、ＳＢ03は宗岡家が建つ前にこの土地を所有していた福本家の住宅とみられる。また、主屋の土間からは大カマドや排水溝、台所の台石などの宗岡家の設備に関連する遺構が検出された。

第３節　金森家地点

本年度より金森家の保存修理事業が本格的に開始し、それに伴って発掘調査も始まった。本年度は主屋の礎石の記録を行なったほか、主屋内の一部と主屋東側に位置する付属屋の発掘調査を実施した。主屋の南西部では現在の建物とは関係のない延石が検出された。これらは金森家の前身建物に関連する可能性があることから、調査範囲を広げた際の成果が期待される。

主屋の北東部では風呂跡や廊下の跡など、金森家の設備に関する遺構が検出された。また、風呂場の付近にも延石の基礎があり、手洗いの跡などと想定される。主屋東側の付属屋跡ではトレンチ調査を行なったが、近年のかく乱が激しかったこともあり、一部で整地面が確認できた程度であった。ただし、主屋が付属屋に先行していたとするならば付属屋の軸を合わせなかった理由が不明であることから、主屋よりも付属屋が先行して建設されていた可能性が高いと判断される。

第４節　まとめ

本年度は昆布山谷地区第５・６・８地点、宗岡家地点、金森家地点の３か所の発掘調査を実施した。昆布山谷地区ではこれまでは谷筋の平坦面を主に調査してきたが、本年度から道の調査に着手した。発掘調査により、道と平坦面を区画する石垣（ＳＷ06）が検出され、昆布山谷の景観を復元・考察する上で重要な資料が得られた。第５地点では、土地利用や地形の形成に関わる情報を得られた。特に、第３遺構面上では選鉱後に廃棄されたとみられるユリカスが大量に集積しており、選鉱が行われていたと考えられる。堆積したユリカスは色調や粒子の大きさで分類可能で、鉱石や作業過程の違いを反映している可能性があることから、今後は理化学的な分析も交えた検討も必要となるであろう。第６地点では尾根上の長楽寺へと向かう参道の可能性がある岩盤加工遺構ＳＸ25が検出された。

宗岡家地点は本年度で保存修理事業に伴う発掘調査が完了した。本年度は主屋内の発掘調査を実施し、宗岡家の設備に関する遺構や、宗岡家よりも古い建物の跡などが検出された。また、発掘調査終了後に実施した立会調査では宗岡家北側の敷地と道の境からかつての側溝跡が検出された。

平成 26 年度から 3 年にわたって実施した発掘調査によって、宗岡家の建物や庭に関連する情報が多く得られた。また、下層確認トレンチを適宜設定したことで、江戸時代を通じての土地の形成や利用の変遷などが窺われる遺構が検出されるなど、多くの成果が得られた。

金森家地点は本年度から発掘調査に着手した。本年度は主屋東側の付属屋と主屋の一部の発掘調査を行ない、現在の建物の前身建物に関連する可能性のある礎石や、金森家の設備に関連する遺構が検出された。

注

(1) 三瓶古文書を読もう会 1995『石見銀山百か寺』による。

引用・参考文献

島根県教育委員会・大田市教育委員会・温泉津町教育委員会・仁摩町教育委員会 1999『石見銀山遺跡総合調査　報告書』第 1 冊【遺跡の概要】 第 2 冊【発掘調査・科学調査編】

島根県大田市 2006『史跡石見銀山遺跡保存管理計画書』

島根県教育委員会・大田市教育委員会 1999『石見銀山遺跡発掘調査報告』Ⅰ

中田健一他 2005『石見銀山遺跡発掘調査報告書』Ⅱ　島根県教育委員会・大田市教育委員会

中田健一・新川　隆 2013『石見銀山遺跡発掘調査報告書』Ⅲ 島根県教育委員会・大田市教育委員会

島根県教育委員会・大田市教育委員会 2000 ～ 2004『石見銀山遺跡発掘調査概要』10 ～ 14

大田市教育委員会 2006 ～ 2016『石見銀山遺跡発掘調査概要』15 ～ 24

島根県大田市教育委員会 1975『石見銀山御料 大森の町並調査報告書』

三瓶古文書を読もう会 1995『石見銀山百か寺』

新川　隆 2013『史跡石見銀山遺跡総合整備事業に伴う発掘調査報告書』大田市教育委員会

江戸遺跡研究会 2001『図説江戸考古学研究事典』

九州近世陶磁学会 2000『九州陶磁の編年』

大橋康二 1984「肥前陶磁の変遷と出土分布」『国内出土の肥前陶磁』佐賀県立九州陶磁文化館

大橋康二 1994『古伊万里の文様　初期肥前磁器を中心に』理工学社

小野正敏「15 ～ 16 世紀の染付碗・皿の分類と編年」『貿易陶磁研究』No.2　1982

尾村　勝 2014「石見銀山遺跡昆布山谷地区の土地利用の変遷―文献史料と分布調査成果からみる―」『世界遺産石見銀山遺跡の調査研究』 4　島根県教育委員会・大田市教育委員会

熊野栄助 1973「石見銀山御料 大森 ―大田市大森町町並調査速報―」『季刊文化財』第 22 号　島根県文化財愛護協会

西尾克己 2013「石見銀山遺跡出土の在地系陶器・石見焼について (1)」『世界遺産石見銀山遺跡の調査研究』 3　島根県教育委員会・大田市教育委員会

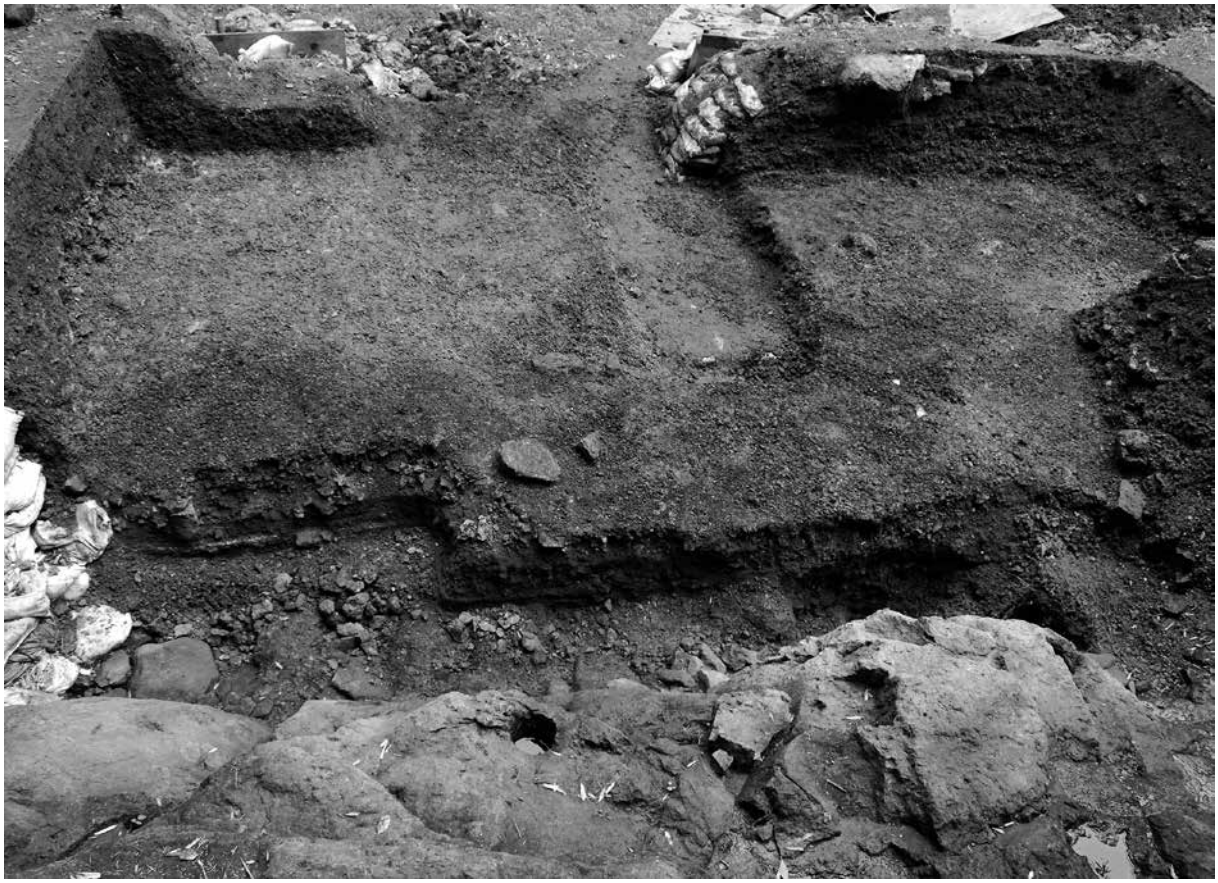
西尾克己 2014「石見銀山遺跡出土の在地系陶器・石見焼について (2)」『世界遺産石見銀山遺跡の調査研究』 4　島根県教育委員会・大田市教育委員会

西田宏子・大橋康二監修 1988『古伊万里』別冊太陽　日本のこころ 63　平凡社

守岡正司・新川　隆 2011「陶磁器から見た石見銀山遺跡」『石見銀山遺跡テーマ別調査研究報告書』Ⅰ　島根県教育委員会・大田市教育委員会

図　　版

昆布山谷地区第５地点　第２面検出状況 (南東より)



同　第２面検出状況 (南西より)

PL. 2

昆布山谷地区第５地点　ユリカス集積部検出状況 (南東より)

同　ユリカス集積部検出状況 (南西より)

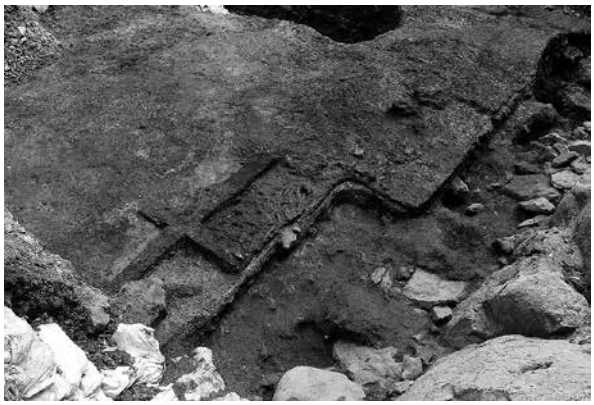
昆布山谷地区第５地点　完掘状況 (南東より)

同　完掘状況 (北より)

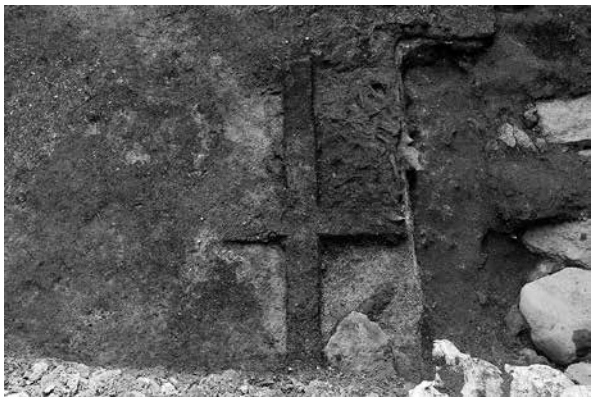
PL. 4

昆布山谷地区第５地点　ユリカス集積部検出状況 (北東より)

同　ユリカス集積部検出状況 (南西より)



昆布山谷地区第５地点　有機物出土状況 (西より)



同　有機物出土状況 (北西より)

同　有機物出土箇所土層堆積状況 (東より)

同　有機物出土箇所土層堆積状況 (南東より)

同　ＳＫ 03 検出状況 (南東より)

同　ＳＫ 03 完掘状況 (南東より)

同　ＳＫ 03 完掘状況 (北東より)

同　ＳＫ 03 北壁石積 (南東より)

PL. 6

昆布山谷地区第５地点　北壁・東壁北側 (南より)

同　東壁南側 (南西より)

昆布山谷地区第５地点　南壁 (北西より)

同　南壁中央部 (北東より)

PL. 8

昆布山谷地区第６地点　ＳＸ 25 調査前状況 (南東より)

同　ＳＸ 25 調査前状況 (北東より)

昆布山谷地区第６地点　ＳＸ 25 検出状況 (南東より)

同　ＳＸ 25 上部 (南西より)

ＰＬ．10

昆布山谷地区第６地点トレンチ　遺構面 (南東より)

同　遺構面 (南東より)

同　南壁 (北東より)

昆布山谷地区第８地点　調査前状況 (南東より)

同　調査前状況 (南より)

ＰＬ．12

昆布山谷地区第８地点　南壁 (北西より)

同　第１面検出状況 (南東より)

同　第３面検出状況 (南東より)

同　第４面検出状況 (南東より)

昆布山谷地区第８地点第１トレンチ　ＳＷ 06- ②検出状況 (南東より)

同　ＳＷ 06- ②検出状況 (北東より)

ＰＬ．14

昆布山谷地区第８地点第１トレンチ　ＳＷ 06-①検出状況 (南東より)

同　ＳＷ 06-①検出状況 (北より)

昆布山谷地区第８地点第１トレンチ　東壁 (南より)

同　東壁 (北より)

ＰＬ．16

昆布山谷地区第８地点　木舞出土状況①（北東より）

同　木舞出土状況②（北東より）

同　第１トレンチ北端部踏石出土状況（東より）

同　第２トレンチ　南壁（北より）

同　第２トレンチ完掘状況（南西より）

同　ＳＷ 06-②上平坦面検出状況（南東より）

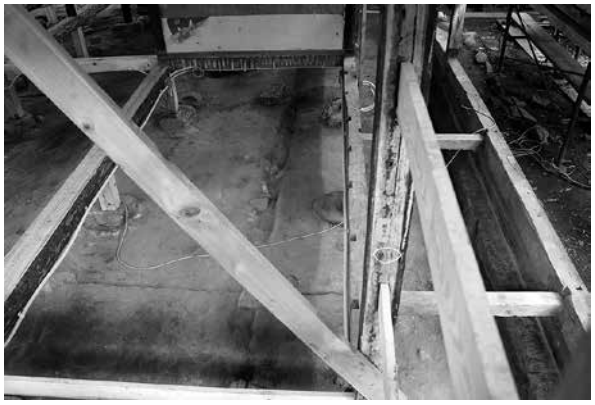
宗岡家地点Ⅶ区　調査前状況 (西より)

同　完掘状況 (南西より)

ＰＬ．18

宗岡家地点Ⅵ区　調査前状況①（西より）

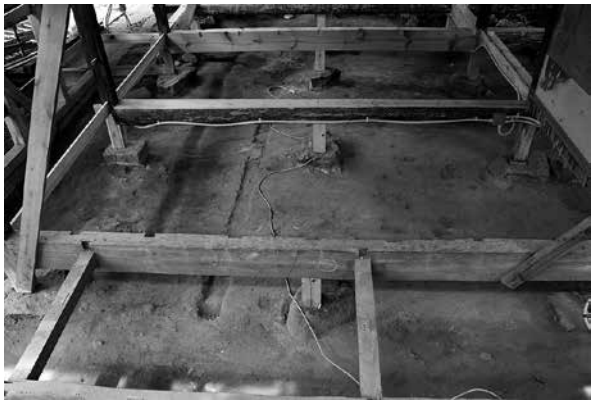
同　調査前状況②（西より）



同　調査前状況③（西より）

同　調査前状況③（西より）

同　調査前状況⑤（西より）



同　調査前状況⑥（南より）

同　調査前状況⑦（南より）

宗岡家地点Ⅵ区　完掘状況①（北東より）

同　完掘状況②（東より）

ＰＬ．20

宗岡家地点Ⅵ区　完掘状況③（北東より）

同　完掘状況④（南より）

宗岡家地点Ⅵ区　ＳＢ 03 検出状況①（北より）

同　ＳＢ 03 検出状況②（南東より）

ＰＬ．22

宗岡家地点Ⅵ区　ＳＢ 03 検出状況③ (北東より)

同　ＳＢ 03 北西部 (北西より)

同　ＳＢ 03 検出状況④ (東より)

宗岡家地点Ⅶ区　ＳＸ 06 検出状況 (南より)

同　ＳＸ 06 完掘状況① (南より)

同　ＳＸ 06 完掘状況② (西より)

同　ＳＸ 06 南北断面 (東より)

宗岡家地点Ⅶ区　ＳＸ 07 検出状況 (西より)

同　ＳＤ 04- ②検出状況 (南より)

同　ＳＤ 04- ②完掘状況 (南より)

ＰＬ．24

宗岡家地点 10 トレンチ　柱掘方検出状況 (南より)

同　礎石掘方検出状況 (東より)

同　礎石掘方検出状況 (北東より)

同　完掘状況 (南西より)

宗岡家地点浄化槽トレンチ　北壁 (南より)

同　東壁 (西より)

ＰＬ．26

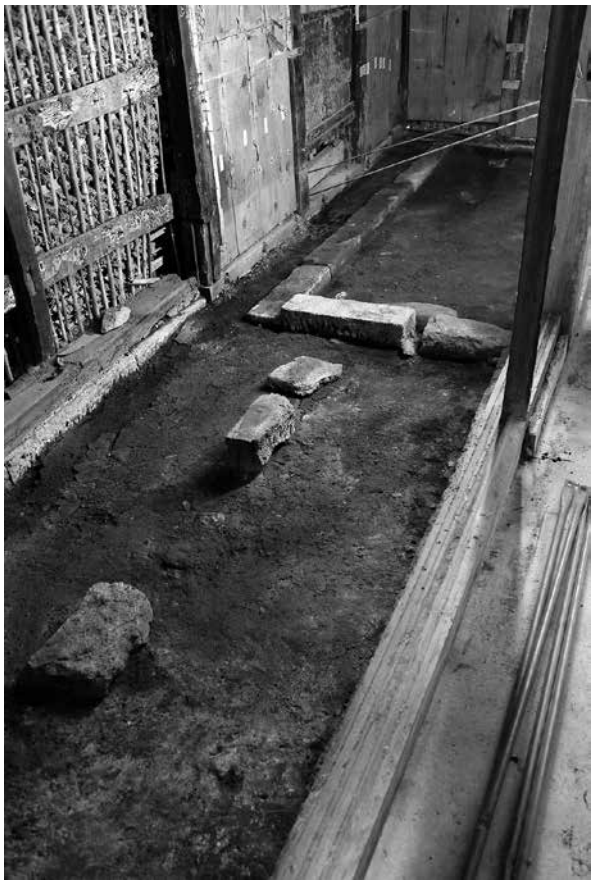
宗岡家地点北側　ＳＤ 04 検出状況 (北東より)

同　ＳＤ 04 検出状況 (東より)

同　ＳＤ 04 検出状況 (北西より)

同　ＳＤ 04 検出状況 (西より)

同　ＳＤ 04 内部 (西より)



金森家地点主屋南西部　礎石検出状況 (西より)

同　東半部礎石検出状況 (北より)

同　西半部礎石検出状況 (北より)

同　ＳＢ 01　調査前状況 (南東より)

ＰＬ．28

金森家地点ＳＢ 01　完掘状況 (北より)

同　第１トレンチ南半東壁 (北より)

同　第１トレンチ北半東壁 (南東より)

同　第２トレンチ南壁 (北より)

同　第３トレンチ南壁 (北より)

金森家地点主屋北東部　風呂場跡検出状況 (東より)

同　廊下跡踏石検出状況 (西より)

同　廊下跡礎石検出状況 (南より)

同　廊下跡礎石検出状況 (東より)

ＰＬ．30

峰山家 (旧田中家) 地点　上層遺構検出状況 (東より)

同　台所検出状況 (南東より)

峰山家 (旧田中家) 地点　台所礎石検出状況 (南より)

同　石敷検出状況 (東より)

同　台所検出状況 (北東より)

同　便所風呂棟西側部分検出状況 (北より)

ＰＬ．32

峰山家 (旧田中家) 地点　便所風呂棟西側部分検出状況 (南西より)

同　(南東より)

峰山家 (旧田中家) 地点　便所風呂棟東側部分検出状況 (南より)

同　全景 (南東より)

ＰＬ．34

峰山家 (旧田中家) 地点便所検出状況 (北より)

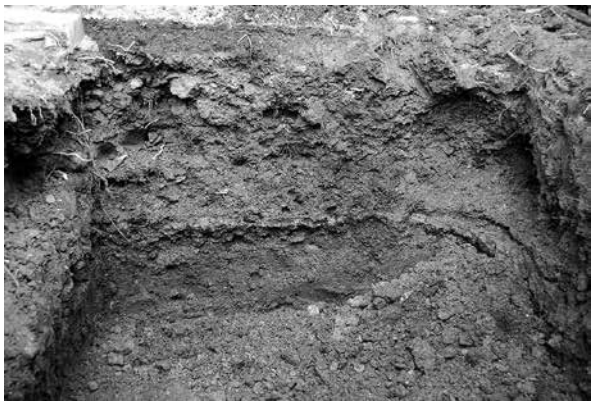
同　風呂場検出状況 (南より)

同　便槽検出状況 (北より)

同　風呂釜遺構検出状況 (北より)

同　浄化槽トレンチ　石列検出状況 (南より)

峰山家(旧田中家)地点　浄化槽トレンチ　石列検出状況(東より)



同　土層断面 (東より)

同　(南より)

同　完掘状況 (南より)

ＰＬ．36

旧川上家地点　調査前状況 (南西より)

同　石列検出状況 (南より)

旧川上家地点　石列焼土検出状況 (南より)

同　岩盤検出状況 (東より)

同　遺構面検出状況 (東より)

同　石列部分土層断面 (南より)

ＰＬ．38

旧川上家地点　水溜遺構 (ＳＥ 01) 検出状況 (北より)

同　半截状況 (南より)

同　(東より)

同　水溜遺構 (ＳＥ 01) 検出面完掘状況 (東より)

旧川上家地点　土層断面 (南より)

同 (南より)

PL．40

昆布山谷地区出土遺物Ⅰ

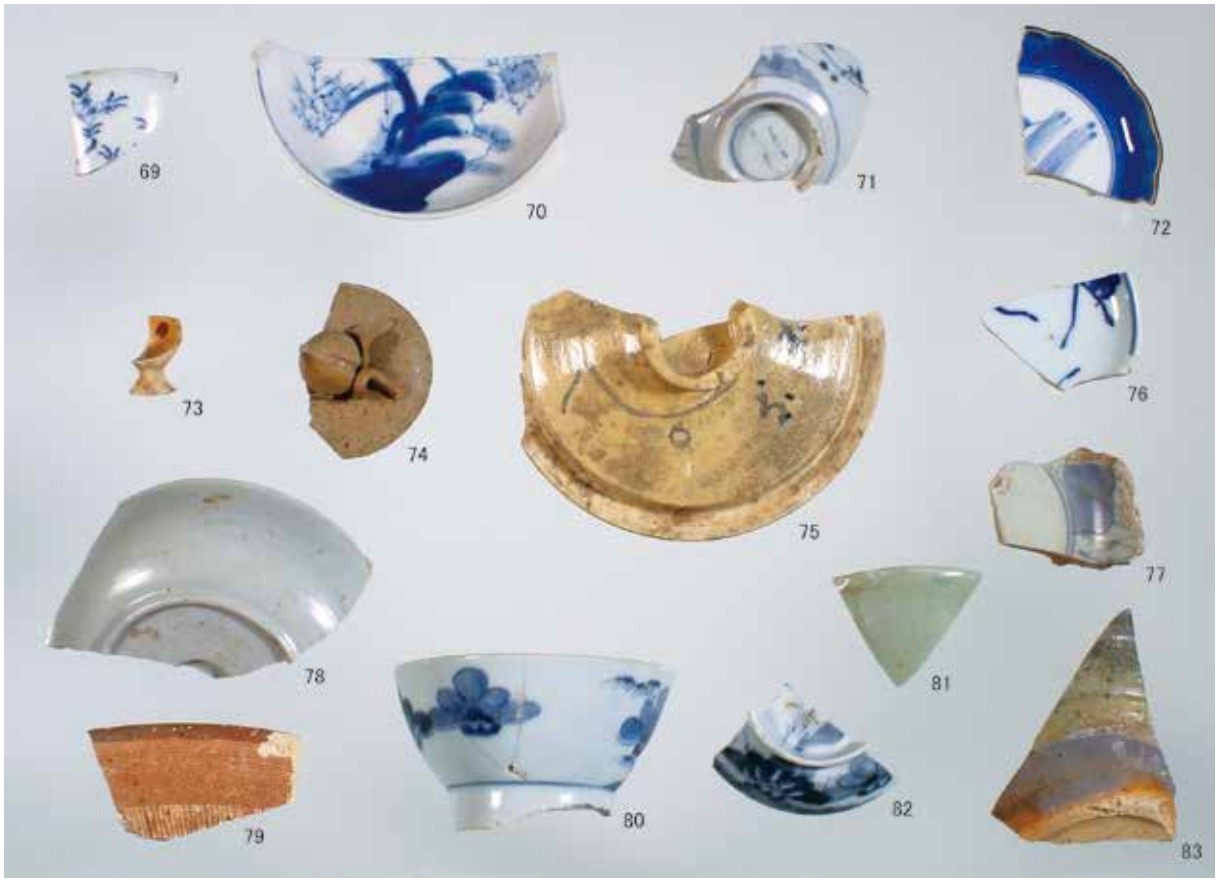
昆布山谷地区出土遺物Ⅱ

昆布山谷地区出土遺物III

昆布山谷地区出土遺物IV

PL．42

宗岡家地点出土遺物Ⅰ



宗岡家地点出土遺物Ⅱ

宗岡家地点出土遺物Ⅲ

金森家地点・峰山家 (旧田中家) 出土遺物

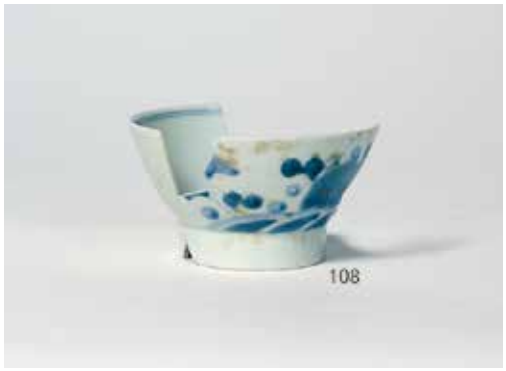
PL. 44

旧川上家地点出土遺物 I

旧川上家地点出土遺物 II

昆布山谷地区出土遺物

ＰＬ．46



金森家地点・旧川上家地点出土遺物

報告書抄録

ふりがな	いわみぎんざん
書名	石見銀山　Iwami-Ginzan Silver Mine Site
ふりがな	いわみぎんざんいせきはっくつちょうさがいよう
副書名	石見銀山遺跡発掘調査概要 25
シリーズ名・巻次	昆布山谷地区・宗岡家地点・金森家地点
編著者名	山手貴生・新川　隆・尾村　勝
編集機関	島根県大田市教育委員会
所在地	〒694-0064　島根県大田市大田町大田ロ 1,111 番地
発行年月日	2017 年 3 月 31 日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査年月日
		市町村	遺跡番号			
いわみぎんざん 石見銀山	しまねけんおおだしおおもりちょう 島根県大田市大森町	32205	A232 ～ 319	35° 5’ 30”	132° 26’ 30”	2016 年 4 月 ～ 2017 年 1 月

調査面積	363 ㎡
調査原因	国庫補助事業による学術調査

所収遺跡名	各種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
石見銀山	鉱山遺跡 町屋跡	戦国時代 江戸時代 明治時代	礎石 土坑 石列 溝跡 石垣 側溝	陶磁器 金属製品 石製品 木製品	国指定史跡 銀生産遺跡 （1969 年 4 月 14 日） （2002 年 3 月 19 日、 2005 年 3 月 2 日、 2005 年 3 月 14 日、 2008 年 3 月 28 日 追加指定）

石　見　銀　山

Iwami-Ginzan Silver Mine Site

石見銀山遺跡発掘調査概要 25

●

－昆布山谷地区・宗岡家地点・金森家地点－

２０１７年３月

島根県大田市教育委員会

島根県大田市大田町大田口 1,111 番地

印刷・製本　急行印刷